樽味立添遺跡 4 次調查 樽味高木遺跡 15 次調查

2 0 1 1

松山市教育委員会 財団法人松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター

樽味立添遺跡 4 次調査 樽味高木遺跡 15 次調査



2011

松山市教育委員会 財団法人松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター

本書は、民間の宅地開発に伴い実施した二遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。遺跡が所在する松山市樽味地区では、西日本有数の規模を誇る弥生時代終末から古墳時代初頭の大型建物3棟が発見された樽味四反地遺跡をはじめ弥生時代末から古墳時代後期の竪穴住居や掘立柱建物と、古代の自然流路のほか、弥生時代から近世までの遺物が数多く発見されており、松山平野内でも有数の遺跡地帯として知られています。

博味立添遺跡 4 次調査では平安時代の自然流路を検出し、流路内からは土師器や須恵器のほかに瓦や緑釉陶器が出土しました。 博味地区における古代の遺跡は、調査地南西部にある博味四反地遺跡 1 次調査や 5 次調査において飛鳥時代から平安時代の流路が検出され、流路内からは官衙や寺院の存在を示唆する遺物が出土しています。 今回検出した流路内からも同様の遺物が出土しており、 博味地区における古代集落の様相や環境復元をするうえで貴重な手がかりを得ることができました。 また、 博味高木遺跡 1 5 次調査では弥生時代から古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物をはじめ数々の遺構や遺物を検出しました。 このうち、古墳時代の遺物には朝鮮半島系の土器が含まれており、 当概期における朝鮮半島と松山との交流が知れる貴重な資料といえます。

このような成果をあげることができましたのも、埋蔵文化財に対する関係各位の深い ご理解とご協力のたまものと心より感謝申し上げる次第です。

本書が、埋蔵文化財の保護思想の啓発や調査研究等にご活用いただければ幸いに存じます。

平成23年3月31日

松山市教育長 山 内 泰

例 言

- 1. 本書は、松山市教育委員会と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが、平成18・19年度に松山市樽味地区内で実施した宅地造成工事と共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2. 本報告書の遺構は、呼称を略号で記述した。SB:竪穴住居、掘立:掘立柱建物、SD:溝、SR:自然流路、SK:土坑、SP:柱穴。
- 3. 遺構の製図および遺物の実測・製図は、水本完児の指示のもと、木西嘉子、西本三枝、平岡直美、山下満佐子が行った。
- 4. 遺物の復元は、青野茂子、松本美代子、石川千代美が行った。
- 5. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
- 6. 本書に使用した方位は、すべて真北である。
- 7. 写真図版は遺構撮影を水本と大西朋子が行い、遺物撮影および図版作成は大西が行った。
- 8. 本書の執筆と編集は水本が担当し、宮内慎一と平岡、山下の協力を得た。浄書は平岡が担当した。
- 9. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。
- 10. 製版・写真図版

製版 白黒図版 - 175線

印刷 オフセット印刷

用紙 本 文 マットコート

写真図版 マットコート

製本 アジロ綴じ

本 文 目 次

第1章 はじめに
1. 調査に至る経緯
2. 調査の経緯
3. 刊行組織
第2章 立地・環境
1. 立 地
2. 環 境
第3章 樽味立添遺跡 4次調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
1. 調査の経緯 (1)調査に至る経緯 (2)調査の経緯 (3)調査組織
2. 層 位 (1) 基本層位 (2) 検出遺構・遺物
3. 遺構と遺物 (1) 竪穴住居 (2) 掘立柱建物 (3) 溝 (4) 自然流路
(5) 土 坑 (6) その他の遺構と遺物
4. まとめ
第4章
1. 調査の経緯 (1)調査に至る経緯 (2)調査の経緯 (3)調査組織
2. 層 位 (1) 基本層位 (2) 検出遺構・遺物
3. 遺構と遺物 (1) 竪穴住居 (2) 掘立柱建物 (3) 土 坑
(4) その他の遺構と遺物
4. まとめ
第5章 調査の成果と課題

挿 図 目 次

			立地・環境	
	1		松山平野の地形概要図(縮尺 1 /200,000)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第	2	図	遺跡分布図(縮尺 1 /3,000)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	7
	第	3章	章 樽味立添遺跡 4 次調査	
第	3	図	調査地測量図(縮尺 1 /400)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	10
第	4	図	北壁・東壁土層図 (縮尺 1 /60) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	12
第	5	図	南壁・西壁土層図 (縮尺 1 /60) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	13
第	6	図	遺構配置図(縮尺 1 /150)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	14
第	7	図	SB1・2測量図・出土遺物実測図(縮尺1/60・1/4・1/3・1/2)·······	17
第	8	図	掘立1測量図·出土遺物実測図 (縮尺1/60·1/4·1/3)···································	18
第	9	図	掘立2測量図・出土遺物実測図(縮尺1/60・1/4・1/3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	19
第	10	図	SD1測量図(縮尺1/60) ······	20
第	11	図	SD1出土遺物実測図(1)(縮尺1/4·1/3)······	22
第	12	図	SD1出土遺物実測図(2)(縮尺1/4·1/3)······	23
第	13	図	SR1断面図 (縮尺1/80)	
第	14	図	SR1出土遺物実測図(1)(縮尺1/3) ······	25
第	15	図	SR1出土遺物実測図(2)(縮尺1/4·1/3)·······	26
第	16	図	SR1出土遺物実測図(3)(縮尺1/3) ······	27
第	17	図	SK1測量図·出土遺物実測図(縮尺1/60·1/4·1/3)	
第	18	図	SK2測量図・出土遺物実測図(縮尺1/60・1/3) ·····	
第	19	図	SK3測量図・出土遺物実測図(縮尺1/60・1/3) ·····	
第	20	図	SK4·5·6測量図(縮尺1/60) ····································	
第	21	図	SK7測量図 (縮尺1/60) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第	22		SK7出土遺物実測図(縮尺1/4·1/3)······	
第	23		柱穴出土遺物実測図(縮尺1/4・1/3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第	24		包含層出土遺物実測図(1)(縮尺1/3)	
第	25		包含層出土遺物実測図(2)(縮尺1/3)	
第	26		包含層出土遺物実測図(3)(縮尺1/4・1/3)	
第	27	図	地点不明出土遺物実測図(縮尺 1 / 3) · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	39
	第	4章	尊味高木遺跡 15 次調査	
			調査地測量図(縮尺 1 /500)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第	29	図	北壁・東壁土層図 (縮尺 1 /60) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	54
第	30	义	南壁·西壁土層図(縮尺1/60)·····	55

第 31 図	遺構配置図(縮尺 1 /150)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	56
第 32 図	SB1測量図(縮尺1/60)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	57
第 33 図	SB1出土遺物実測図(縮尺1/4·1/3) ······	58
第 34 図	SB2測量図(縮尺1/60)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	59
第 35 図	SB2出土遺物実測図(1)(縮尺1/4·1/3)···································	61
第 36 図	SB2出土遺物実測図(2)(縮尺1/4) ······	62
第 37 図	SB2出土遺物実測図(3)(縮尺1/4·1/3)···································	
第 38 図	SB3測量図(縮尺1/60)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	64
第 39 図	SB3炉①測量図(縮尺 1 /20)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	65
第 40 図	SB3炉②測量図(縮尺1/20)	
第 41 図	SB3出土遺物実測図(1)(縮尺1/4) ······	66
第 42 図	SB3出土遺物実測図(2)(縮尺1/3·1/1)································	
第 43 図	SB4測量図(縮尺1/60)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	68
第 44 図	SB5測量図・出土遺物実測図(縮尺1/60・1/4)	69
第 45 図	SB6測量図(縮尺 1 /60)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	70
第 46 図	掘立1測量図・出土遺物実測図(縮尺1/60・1/3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	71
第 47 図	掘立2測量図・出土遺物実測図(縮尺1/60・1/4・1/3・1/1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	72
第 48 図	掘立3測量図(縮尺1/60)	73
第 49 図	掘立3出土遺物実測図(縮尺1/4・1/3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第 50 図	SK1・2測量図(縮尺1/60)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第 51 図	柱穴出土遺物実測図(1)(縮尺1/3)	
第 52 図	柱穴出土遺物実測図(2)(縮尺1/4)	
第 53 図	包含層出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)	
第 54 図	包含層出土遺物実測図(2)(縮尺1/3)	
第 55 図	地点不明出土遺物実測図(縮尺 1 / 4 · 1 / 3 · 1 / 1) · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	81
	表目次	
第1章	章 はじめに	
	,	1
第2章	章 立地・環境	
表 2		8
第3章	章	
表 3	竪穴住居一覧	41

表 4	掘立柱建物一覧	41
表 5	溝一覧	
表 6	自然流路一覧	
表 7	土坑一覧	
表 8	柱穴一覧	
表 9	SB1出土遺物観察表(土製品)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	42
表 10	SB2出土遺物観察表(土製品)	
表 11	SB2出土遺物観察表(石製品)	
表 12	掘立1出土遺物観察表(土製品)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	43
表 13	掘立2出土遺物観察表(土製品)	
表 14	SD1出土遺物観察表(土製品)	
表 15	SR1出土遺物観察表(土製品)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	44
表 16	SR1出土遺物観察表(石製品)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	46
表 17	S R 1 出土遺物観察表(金属製品)	
表 18	SK1出土遺物観察表(土製品)	
表 19	SK2出土遺物観察表(土製品)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	47
表 20	SK3出土遺物観察表(土製品)	
表 21	SK3出土遺物観察表(石製品)	
表 22	SK7出土遺物観察表(土製品)	
表 23	柱穴出土遺物観察表(土製品)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	48
表 24	包含層出土遺物観察表(土製品)	
表 25	包含層出土遺物観察表 (石製品) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	50
表 26	包含層出土遺物観察表(金属製品)	
表 27	地点不明出土遺物観察表(土製品)	
表 28	地点不明出土遺物観察表(金属製品)	
第 4	章 樽味高木遺跡 15 次調査	
表 29	竪穴住居一覧 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	83
表 30	掘立柱建物一覧	
表 31	土坑一覧	
表 32	柱穴一覧	
表 33	S B 1 出土遺物観察表(土製品)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	86
表 34	SB2出土遺物観察表(土製品)······	87
表 35	S B 2 出土遺物観察表 (石製品) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
表 36	SB3出土遺物観察表(土製品)	
表 37	S B 3 出土遺物観察表(金属製品)	90
表 38	SB3出土遺物観察表(玉類)	
表 39	SB5出土遺物観察表(土製品)	

表 40	掘立1出土遺物観察表(土製品)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	90
表 41	掘立2出土遺物観察表(土製品)	
表 42	掘立2出土遺物観察表(玉類)	
表 43	掘立3出土遺物観察表(土製品)	
表 44	柱穴出土遺物観察表(土製品)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	91
表 45	包含層出土遺物観察表(土製品)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	92
表 46	包含層出土遺物観察表(金属製品)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	93
表 47	地点不明出土遺物観察表(土製品)	
表 48	地点不明出土遺物観察表(玉類)	
	写真図版目次	
第3章	章	
図版 1	1. 調査前全景(北西より)	

- 2. 調査区完掘状況(南西より)
- 図版 2 1. 西半部遺構検出状況(南東より)
 - 2. 東半部遺構検出状況(南西より)
- 図版 3 1. 西半部遺構完掘状況 (南より)
 - 2. 東半部遺構完掘状況(南西より)
- 図版 4 1. SB1・2完掘状況(東より)
 - 2. 掘立1 完掘状況(南西より)
- 図版 5 1. SD1完掘状況(北東より)
 - 2. SK1遺物出土状況(南より)
- 図版 6 1. SK3遺物出土状況(北東より)
 - 2. SK7完掘状況 (東より)
- 図版 7 1. 出土遺物 [SB1、SB2、SD1]
- 図版 8 1. SR1出土遺物(1)
- 図版 9 1. 出土遺物 [SR1(2)、SK3、SK7]
- 図版 10 1. 出土遺物〔包含層、地点不明〕

第4章 樽味高木遺跡 15 次調査

- 図版 11 1. 調査前全景(南西より)
 - 2. 作業風景 (東より)
- 図版 12 1. 遺構検出状況 (1) (東より)
 - 2. 遺構検出状況(2)(西より)
- 図版13 1. 遺構完掘状況(東より)

- 2. SB1完掘状況(北東より)
- 図版14 1. SB2検出状況(北より)
 - 2. SB2完掘状況 (東より)
- 図版15 1. SB2遺物出土状況(東より)
 - 2. SB3完掘状況(北東より)
- 図版 16 1. SB5・掘立1 完掘状況 (東より)
 - 2. 掘立2完掘状況(東より)
 - 3. 掘立3完掘状況(東より)
- 図版 17 1. 出土遺物 [SB1、SB2]
- 図版18 1. 出土遺物〔SB3、掘立2〕
- 図版19 1. 出土遺物 [掘立3、柱穴、包含層(1)]
- 図版 20 1. 出土遺物〔包含層 (2)、地点不明〕

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

今回報告する樽味立添遺跡 4 次調査と樽味高木遺跡 15 次調査は、民間の宅地開発に伴い実施した 埋蔵文化財の発掘調査である。発掘調査は、文化財保護法第 93 条の届出を受け、愛媛県教育委員会 が行った指示に基づき発掘調査を実施した。なお、両遺跡は松山市が指定する周知の埋蔵文化財包蔵 地『No.81 樽味遺物包含地』内に所在する。

博味立添遺跡は昭和63年度からこれまでに4度の発掘調査(1次~4次調査)が実施され、主に弥生時代後期から古墳時代後期までの竪穴住居をはじめとする集落関連遺構や遺物が多数確認されている。このうち、博味立添遺跡1次調査では、包含層資料であるが「貨泉」が出土している。また、博味高木遺跡は16度の発掘調査(1次~16次調査)が実施され、弥生時代中期から古墳時代後期までの竪穴住居148棟を含む数多くの集落関連遺構や遺物が確認されている。 博味高木遺跡3次調査では、準構造船を描いた絵画土器が出土しているほか、各調査で検出した竪穴住居では玉類を使用した住居廃絶に伴う祭祀行為が数多く報告されている。

発掘調査は財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)が主体となり松山市教育委員会文化財課の協力のもと、平成18年度と19年度に実施した。

2. 調査の経緯

調査: 樽味立添遺跡 4 次調査は、平成 19 年 1 月 9 日から 2 月 8 日までの間に実施され、弥生時代 後期から古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物のほか、古代の自然流路を検出した。一方、樽味高木遺跡 15 次調査は平成 19 年 12 月 4 日から平成 20 年 1 月 31 日までの間に実施され、弥生時代終末期の竪 穴住居をはじめ、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物など多数の遺構や遺物を検出した。なお、各遺跡 の調査場所や調査面積等は表 1 に記す。

整理:両遺跡の調査では、屋外作業終了後に測量図や記録写真類の整理、及び出土遺物の洗浄や注記、接合作業を行った。本格的な整理作業は平成22年度に行い、遺構図面の作成や出土遺物の実測等を進め、報告書作成作業を行った。

表 1 調査地一覧

遺跡名	調査場所	面積(m³)	調査期間
樽味立添遺跡 4次調査	松山市樟味二丁目 18 番の一部	約 174.0	2007 (平成 19) 年 1 月 9 日 ~同年 2 月 8 日
樽味高木遺跡 15 次調査	松山市樟味二丁目 90-2 の一部	169.5	2007 (平成 19) 年 12 月 4 日 ~ 2008 (平成 20) 年 1 月 31 日

3. 刊行組織

平成22年度報告書刊行事業(平成22年4月1日現在)

松山市教育委員会 教 育 長 山内 泰 事務局 局 長 藤田 仁 勝谷 雄三 企 画 官 青木 茂 企 画 官 文化財課 課 長 駒澤 正憲 主 幹 森 正経 三好 博文 副主幹

財団法人松山市文化・スポーツ振興財団 理 事 長 一色 哲昭

事務局 局 長 松澤 史夫

次 長 砂野 元昭

施設利用推進部 部 長 中越 敏彰

埋蔵文化財センター 所 長 重松 佳久

調査担当リーダー 栗田 茂敏

(編集担当) 主 任 水本 完児

(写真担当) 調 査 員 大西 朋子

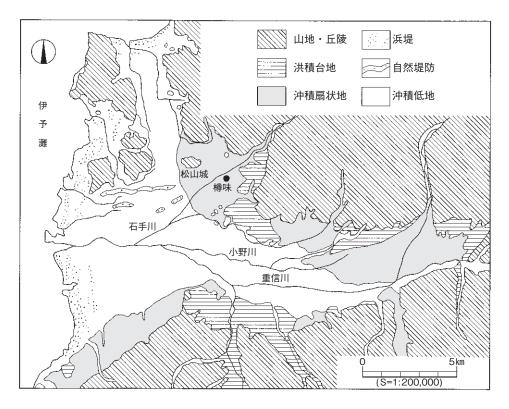
第2章 立地・環境

1. 立 地

松山平野は四国山地北西部に位置し、石手川や重信川などの大小河川で形成された複合扇状地の平野である。このうち、調査地北側を流れる石手川は高縄山から西方に流れ、途中に重信川と合流する。石手川が形成した扇状地は、松山市石手付近(標高 50 m)を扇頂とし南西方向に広がりをみせ、その範囲は半径約 4 km、標高 20 mの地点まで含んでいる。石手川扇状地は、山麓裾の松山市正円寺や畑寺にかけての古期扇状地面と、道後、中村に広がる新期扇状地面、さらには石手川南岸東側に広がる洪積世の段丘化した低位段丘面とに区分される。このうち、調査地は石手川南岸新期扇状地面に立地している。なお、調査地が所在する扇状地面は、今から約 23,000 年前、姶良 Tn 火山灰の降下、堆積時には既に段丘化していたものと推測されている。近年の発掘調査において、樽味遺跡 1 次調査や 樽味四反地遺跡 1 次調査で、2 次的な堆積状況の火山灰が検出されているほか、同じ扇状地面にある東本遺跡 4 次調査からも同様の火山灰が検出されている。

一方で、洪積世の最終氷期、約2万年~1.8万年前には、石手川は道後城北地区を通り、松山市堀 江地区へ流化していたものと推定されており、石手川南岸にある樽味地区では洪積世最末期から完新 世にかけて石手川北岸に比べ、安定した地形を形成していたものと考えられている。

両遺跡の所在する桑原地区は、石手川がつくる扇状地の扇央、標高 39 ~ 40 mに立地しており、樽味遺跡をはじめとして弥生時代から中世にいたる遺跡が数多く存在している。



第1図 松山平野の地形概要図

2. 環 境

両遺跡周辺には、樽味遺跡をはじめとして数多くの遺跡が存在している。主な遺跡について、その 概要を時代別にまとめる。

旧石器時代

松山平野においては、旧石器時代の明確な遺構は確認されていない。経石山古墳からはスクレーパーや楔形石器、桑原西稲葉遺跡 2 次調査では角錐状石器、樟味四反地遺跡 6 次調査や束本遺跡 4 次調査ではナイフ形石器などがある。また、姶良 Tn 火山灰(AT 火山灰)の 2 次堆積では、樟味遺跡 1 次調査、樟味四反地遺跡 1 次調査、枝松遺跡 3 次調査などがあり、姶良 Tn 火山灰(AT 火山灰)の 1 次堆積では、東本遺跡 4 次調査がある。

縄文時代

東本遺跡 4 次調査からは、鬼界アカホヤ火山灰(6,300 年前)の堆積が確認され、堆積層直上からは槍先形石器、石鏃、スクレーパーなどの石器類が出土しており、草創期から早期に時期比定される。 樟味立添遺跡 3 次調査や東野森ノ木遺跡 2 · 4 次調査からは晩期の貯蔵穴数基が検出されており、生活関連遺構の初現期を考える上で貴重な資料である。

弥生時代

前期から中期初頭にかけては樽味遺跡1・5次調査から竪穴住居や土坑などが検出されており、愛 媛大学農学部から西側にかけて当該期の集落が展開していたことが窺える。また、樟味立添遺跡3次 調査や樽味四反地遺跡7次調査からは、集落の構造解明に重要な役割を持つ大溝や小溝が検出されて いる。前期末~中期初頭では、樽味四反地遺跡17次調査で長方形土坑を検出したほか、樽味高木遺 跡 12 次調査で楕円形周溝を検出した。中期後半では、樟味高木遺跡 13 次調査で隅丸方形土坑 1 基を 検出した。土坑内より伐採斧などが出土し、土坑の性格は貯蔵穴の可能性がある。また、樟味四反地 遺跡 14 次調査で楕円形土坑を検出した。中期後半〜後期初頭では、樟味四反地遺跡 17 次調査で円形 竪穴住居を検出したほか、樟味高木遺跡 12 次調査で円形竪穴住居を検出した。住居内より磨製石鏃が 2点出土し、北部九州の製作技術の伝播を考える上で貴重な資料である。また、樟味高木遺跡 12 次調 査で方形竪穴住居、円形竪穴住居、隅丸方形住居、長方形土坑を検出している。中期後葉から後期は 遺跡の数が急増し、樽味遺跡1次調査、樽味高木遺跡2次調査や樽味四反地遺跡2~5次調査、樽味 立添遺跡1次調査で円形及び方形竪穴住居や溝などが検出されている。また、樟味高木遺跡3次調査 では土坑を検出している。後葉から終末期では竪穴住居の検出事例が増加すると共に、他地域との交 流が知れる貴重な資料が数多く確認されている。後期後葉では、樟味立添遺跡や樟味四反地遺跡、樟 味高木遺跡のほか、扇状地南側に所在する桑原高井遺跡1次調査や東本遺跡2・4・5次調査、枝松 遺跡3・5次調査において竪穴住居が多数確認されている。特に、東本遺跡で検出した竪穴住居のうち、 円形を呈する住居は直径8mを超える大型住居で、住居内からは鉄鏃や鉄斧などの鉄製品が多く出土 することから、鍛冶関連の遺構である可能性が示唆されている。このほか、束本遺跡4次調査検出の SB203号住居からは破鏡、包含層資料ではあるが樟味立添遺跡1次調査からは中国銭である『貨泉』、 樽味高木遺跡3次調査では準構造船が描かれた絵画土器片などが出土しており、他地域との交流を知 る貴重な考古資料が注目される。後期後半では、樽味四反地遺跡 17 次調査で長方形土坑を検出した。

古墳時代

古墳時代初頭では、3棟の超大型建物が注目されている。平成8年度に実施した樟味四反地遺跡6次調査において、床面積約130㎡を測る総柱構造の床東式建物が発見された。平成15年度に実施した樟味四反地遺跡8次調査では床面積160㎡前後を測る3棟のうち最大規模の建物が発見された。また平成17年度には樟味四反地遺跡13次調査にて3棟目の大型建物が確認され、これら3棟の建物群は当該期の首長階層にかかわる特殊建造物群の存在であることが確定されている。このほか、樟味四反地遺跡18次調査では方形竪穴住居と大型掘立柱建物を検出した。前期後半では、樟味四反地遺跡16次調査で方形竪穴住居を検出した。

中期になると、樟味高木遺跡 7・8・11 次調査、樟味四反地遺跡 7~9 次調査で竪穴住居が数多く検出され、その中には渡来系遺物の共伴がある。中期初頭~前半では、樟味四反地遺跡 16 次調査や樟味四反地遺跡 17 次調査において、方形竪穴住居を検出している。中期前半~中頃では、樟味四反地遺跡 17 次調査で方形と長方形の竪穴住居を検出した。このうち、方形竪穴住居からは住居南東隅にてカマドを検出している。中期後半では、樟味高木遺跡 13 次調査で方形竪穴住居を検出した。住居内からは、ガラス玉、臼玉、分銅形土製品、有孔円板などが出土し、装飾品は住居廃絶に伴う祭祀行為の一様相であり、祭祀のあり方を考える上での貴重な資料である。中期末では、樟味高木遺跡 13 次調査で方形竪穴住居を検出した。中期末~後期では遺跡数が増加し、樟味立添遺跡、樟味高木遺跡 13 次調査で方形竪穴住居を検出した。中期末~後期では遺跡数が増加し、樟味立添遺跡、樟味高木遺跡 15 次調査で方形竪穴住居と掘立柱建物を検出した。また、樟味四反地遺跡 16 次調査では、方形竪穴住居と掘立柱建物を検出しているほか、樟味高木遺跡 12 次調査では方形竪穴住居、掘立柱建物、楕円形土坑、不整楕円形土坑、溝を検出した。後期後半では、樟味四反地遺跡 16 次調査で隅丸長方形竪穴住居と掘立柱建物を検出したほか、後期末では樟味四反地遺跡 17 次調査で掘立柱建物を検出した。

古 代

樽味四反地遺跡1・5次調査では平安時代の自然流路が検出され、樽味四反地5次調査では、溝内より円面硯や奈良三彩などが出土している。樽味四反地遺跡17次調査では、飛鳥時代中頃の掘立柱建物を検出している。

中世

13世紀代では、樟味高木遺跡 12 次調査で隅丸長方形の土坑墓を検出した。樟味遺跡 2 次調査では、 14~16世紀の集落関連遺構が検出されている。東野森ノ木遺跡 1 次調査からは掘立柱建物や溝に伴い、土坑内から白磁四耳壺が埋納された状態で検出している。

近 世

16世紀~17世紀では、 韓味四反地遺跡 17次調査で土坑を検出した。17世紀前半では、 韓味高木遺跡 12次調査で隅丸長方形の桶棺墓と溝を検出している。

【参考文献】

愛媛県史編纂委員会 1980『愛媛県史 古代Ⅱ・中世』愛媛県

宮本一夫編 1989『鷹ノ子・樟味遺跡』愛媛大学埋蔵文化財調査報告 I

梅木謙一・山之内志郎 1992「樟味四反地遺跡の調査」 『桑原地区の遺跡』 松山市文化財調査報告書 26

梅木謙一・宮内慎一 1992「樟味立添遺跡の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書 26

梅木謙一・宮内慎一 1992「樟味高木遺跡の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書 26

田崎博之編 1993『樟味遺跡Ⅱ-樟味遺跡2次調査報告-』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ

栗田正芳・河野史知 1994「樟味高木遺跡2次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書46

梅木謙一・宮内慎一・武正良浩 1994「樟味高木遺跡 3 次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書 46

梅木謙一・宮内慎一・武正良浩・加島次郎 1994「樽味四反地遺跡 4 次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』 松山市文化財調 査報告書 46

田崎博之編 1997『樟味遺跡3-樟味遺跡3次調査報告-』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅵ

高尾和長編 2002『樟味四反地遺跡 5次調査』松山市文化財調査報告書 87

吉田 広 2003「樟味遺跡5次調査」『樟味遺跡Ⅳ』愛媛大学埋蔵文化財調査報告区

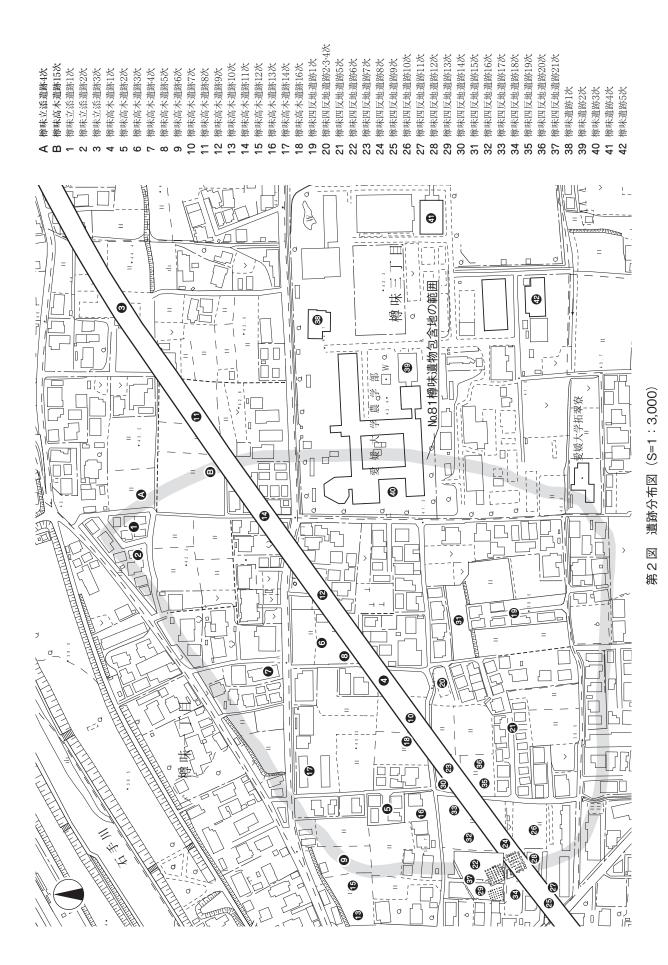
小玉亜紀子編 2003『樟味四反地遺跡-6次調査-弥生時代~古墳時代初頭編』松山市文化財調査報告書94

小玉亜紀子·梅木謙一編 2005 『樟味四反地遺跡 II -6 次調査 - 古墳時代中期~中世編』 松山市文化財調査報告書 106 高尾和長編 2007 『東野森ノ木遺跡 $1\cdot 2\cdot 3\cdot 4$ 次調査地、樟味立添遺跡 3 次調査地、樟味高木遺跡 $7\cdot 8\cdot 9\cdot 11$ 次調査地、樟味四反地遺跡 $7\cdot 8\cdot 9\cdot 11$ 次調査地、枝松遺跡 6 次調査地』 松山市文化財調査報告書 117

宮内慎一·河野史知 2009『樟味高木遺跡 12 次·13 次調査』松山市文化財調査報告書 131

宮内慎一·水本完児 2009『樟味四反地遺跡 14 次·16 次調査』松山市文化財調査報告書 133

橋本雄一 2010『樟味四反地遺跡 17 次・18 次調査』松山市文化財調査報告書 139



- 7 -

調査	名	年度	時 代	遺構	遺物	文献
①樽味高木 ((1次)	S63	弥生~古墳	竪穴·溝·土坑·柱穴	弥生·土師·須恵·石·種	1
②樽味高木((2次)	Н3	弥生~中世	竪穴·溝·土坑·経塚·柱穴	弥生·土師·須恵·陶·玉	2
③樽味高木((3次)	H3 ∼ 4	弥生~古墳	竪穴·掘立·溝·土坑·柱穴	弥生·土師·須恵·石·絵画	2
④樽味高木((4次)	H7	古墳~近世	溝·流路·土坑·柵·柱穴	弥生·土師·須恵·石·玉	3
⑤樽味高木((5次)	H14	弥生~古墳	竪穴·掘立·柱穴	弥生·土師·須恵·石·玉	7
⑥樽味高木((6次)	H14	弥生~古代	竪穴·掘立·溝·土坑·柱穴	弥生·土師·須恵·石	7
⑦樽味高木 ((7次)	H15	弥生~古墳	竪穴·土坑·柱穴	弥生·土師·須恵·石	4
⑧樽味高木((8次)	H15	弥生~中世	竪穴·掘立·溝·土坑·柱穴	弥生·土師·須恵·石·鉄	4
⑨樽味高木((9次)	$\mathrm{H}16\sim17$	弥生~古代	竪穴·掘立·土坑·柱穴	弥生·土師·須恵·石	4
⑩樽味高木(10次)	H16	弥生~古墳	竪穴·掘立·溝·土坑·柱穴	弥生·土師·須恵·鉄	8
⑪樽味高木(11次)	$H17 \sim 18$	弥生~中世	竪穴·掘立·溝·土坑·柱穴	弥生·土師·須恵·軟質·石	4
⑫樽味高木 (12次)	H17	弥生~中世	竪穴·掘立·溝·土坑·柱穴	弥生·土師·須恵·陶·石·骨	5
③樽味高木(13次)	H18	弥生~中世	竪穴·掘立·溝·土坑·柱穴	弥生·土師·須恵·石·玉	5
迎樽味高木 (14次)	H19	弥生~古代	溝·土坑·柱穴	縄文·弥生·土師·須恵·硯	10
⑤ 樽味高木(15次)	H19	弥生~古墳	竪穴·掘立·土坑·柱穴	弥生·土師·須恵·石·玉	10
16 樽味高木(16次)	H20	弥生~中世	溝·土坑·柱穴	弥生·土師	11
17/ 樽味立添((1次)	S63	弥生~古墳	竪穴·掘立·溝·土坑·柱穴	弥生·土師·須恵·玉·貨泉	1
⑧樽味立添((2次)	H10	古墳~近世	掘立·溝·土坑·柱穴	弥生·土師·須恵·石·鉄·玉	6
19樽味立添((3次)	$\mathrm{H15}\sim16$	縄文~中世	竪穴·掘立·溝·土坑·柱穴	縄文·弥生·土師·須恵·鉄	4
20 樽味立添((4次)	H18	弥生~古代	竪穴·掘立·溝·土坑·柱穴	弥生·土師·須恵·陶·瓦·鉄	9

〔竪穴:竪穴住居、掘立:掘立柱建物、縄文:縄文土器、弥生:弥生土器、土師:土師器、須恵:須恵器、陶:陶磁器、軟質:軟質土器、絵画:絵画土器、石:石器、鉄:鉄器・鉄滓、玉:臼玉・勾玉・ガラス玉、種:種実〕

【対文】

- 1 『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書 第26集
- 2 『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書 第46集
- 3 『桑原地区の遺跡Ⅲ』松山市文化財調査報告書 第58集
- 4 『東野森ノ木遺跡 1·2·3·4 次調査地、樟味立添遺跡 3 次調査地、樟味高木遺跡 7·8·9·11 次調査地、 樟味四反地遺跡 7·8·9·11 次調査地、枝松遺跡 6 次調査地』松山市文化財調査報告書 第 117 集
- 5 『樟味高木遺跡 12 次・13 次調査』松山市文化財調査報告書 第 131 集
- 6 『松山市埋蔵文化財調査年報 11』
- 7 『松山市埋蔵文化財調査年報 15』
- 8 『松山市埋蔵文化財調査年報 17』
- 9 『松山市埋蔵文化財調査年報 19』
- 10 『松山市埋蔵文化財調査年報 20』
- 11 『松山市埋蔵文化財調査年報 21』

第3章 樽味立添遺跡4次調査

1. 調査の経緯

(1)調査に至る経緯

2006 (平成 18) 年 5 月 11 日、野本フミ子氏より松山市樽味二丁目 18 番地内における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化財課(以下、文化財課)に提出された。確認願が提出された申請地の南西側 170 mの地点には樽味立添遺跡 1 次調査地と 2 次調査地があり、弥生時代から中世までの集落関連遺構や遺物が多数確認されている。また、申請地の北東側 200 mの地点には樽味立添遺跡 3 次調査地があり、縄文時代晩期から弥生時代までの集落関連遺構と縄文時代晩期から古墳時代までの遺物が多数確認されている。

これらのことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)は、申請地内における埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、2006(平成18)年5月30日に試掘調査を実施することとなった。調査の結果、竪穴住居や土坑、柱穴のほか、弥生土器や土師器、須恵器を含む遺物包含層を確認した。

この結果を受け、文化財課と申請地の両者は遺跡の取り扱いについての協議を重ね、宅地造成工事によって消失する遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、申請地内における古墳時代から中世までの集落構造解明を主目的とし、文化財課の指導のもと埋文センターが主体となり、2007(平成19)年1月9日より開始した。

(2)調査の経緯

調査は、2007(平成19)年1月9日から同年2月8日までの間に屋外調査を実施した。その後、3月8日まで埋文センターにて整理作業を実施した。以下、屋外調査の工程を略記する。

2007 (平成19) 年1月9日、申請者の立会いのもとに調査区を設定し、調査を開始する。重機を使用して、表土層を掘削する。1月11日、第VI層上面にて遺構検出作業をし、竪穴住居や溝、土坑等を確認する。1月15日、遺構検出状況写真を撮影後、各遺構の掘り下げや測量作業をおこなう。2月2日、高所作業車を用いて遺構完掘状況写真を撮影し、2月7日、重機を使用して調査区の埋め戻しをする。2月8日、発掘用具や機材を撤去して屋外調査を終了する。

(3)調査組織

所 在 地:松山市樽味二丁目 18番の一部

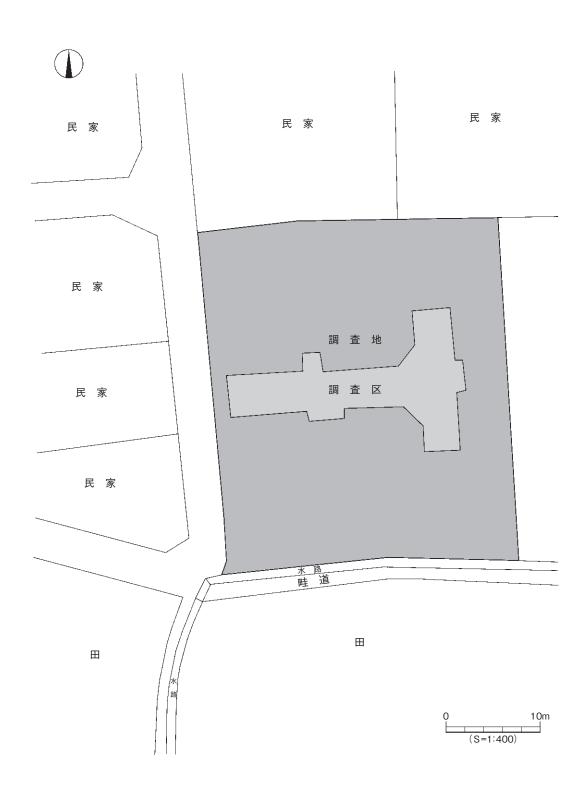
調査期間:2007 (平成19) 年1月9日~同年2月8日

調査面積:約174.0 m²

調査主体:松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

調査担当:水本完児、宮内慎一



第3図 調査地測量図

2. 層 位

(1) 基本層位(第4·5図)

調査地は松山平野北東部、石手川左岸の標高 42.96 ~ 43.16 mに立地する。調査以前は水田として利用されていた。調査で確認した土層は、以下の六種類(I~VI層)である。

I層:水田耕作に伴う耕作土で、三種類に分層される。

 $I①層: 灰色(10Y 6/1)土で調査地ほぼ全域にみられ、層厚 <math>6 \sim 21 \text{ cm}$ を測る。

I②層: 灰色(5Y 6/1) 土で調査地ほぼ全域にみられ、層厚 $2 \sim 10$ cmを測る。

I ③層: 灰黄色 (2.5Y 6/2) 土で調査地北東部を除く地域にみられ、層厚 4~20 cmを測る。

II 層: 黄褐色(10YR 5/6)土で水田耕作に伴う床土である。調査地東側を除く地域でみられ、層厚 6 ~ 22 cmを測る。

Ⅲ層: 灰黄褐色 (10YR 6/2) 土で調査地西半部にみられ、層厚8~30 cmを測る。本層は、調査地 北側から南側に向けて傾斜堆積をなす。本層中からは、少量の土師器片や陶磁器片が出土した。

IV層:暗褐色 (7.5Y 3/3) を呈するシルト層で調査地西半部にみられ、層厚8~40cmを測る。本層は調査地北側から南側に向けて傾斜堆積をなす。なお、自然流路 (SR1) の上面は本層が覆っている。本層中からは、主に古代の土師器片が出土した。

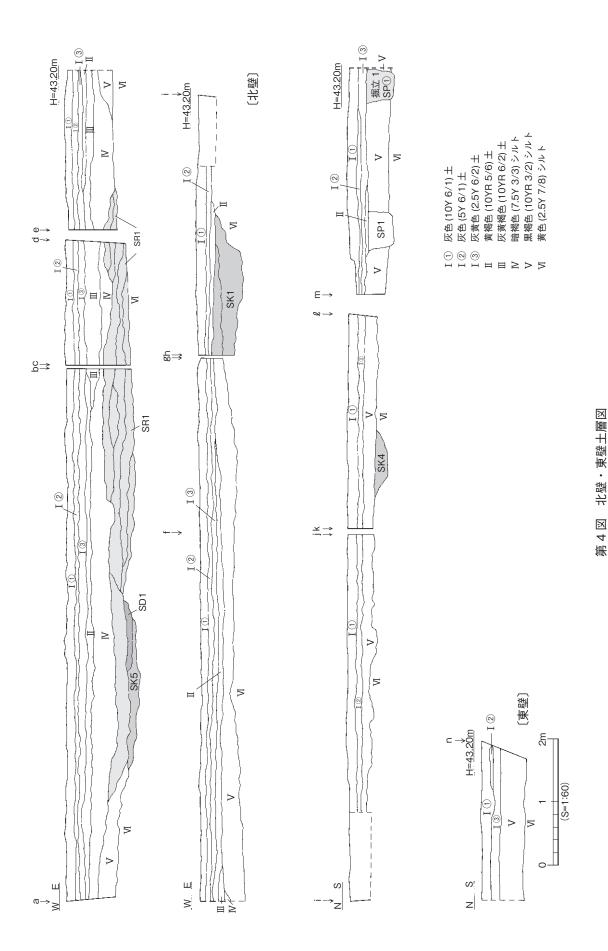
V層: 黒褐色 (10YR 3/2) を呈するシルト層で調査地北西側を除く地域に広くみられ、層厚 4~40 cmを測る。本層は調査地北東側から南西側に向けて傾斜堆積をなす。調査壁の土層観察により、竪穴住居 (SB2) や掘立柱建物 (掘立1)、土坑 (SK7)、柱穴 (SP1·SP13) は、本層上面より掘削された遺構であることを確認した。

VI層: 黄色(2.5Y 7/8)を呈するシルト層で本層上面が調査における最終遺構検出面である。

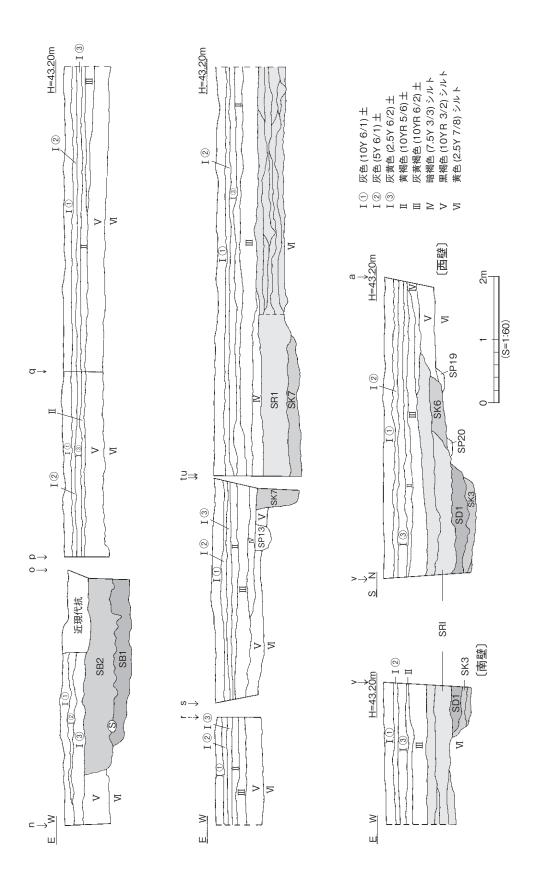
検出した遺構や出土遺物より、V層は古墳時代、V層は古代から中世までに堆積したものと推測される。なお、調査にあたり調査地内を5 m四方のグリットに分けた。グリットは北から南へ $A \cdot B \cdot C \cdot D$ 、西から東へ $1 \cdot 2 \cdot \cdot \cdot 5$ とし、 $A \cdot 1 \cdot A \cdot 2 \cdot \cdot \cdot \cdot D \cdot 6$ といったグリット名を付した。グリットは、遺構の位置表示や遺物の取り上げに利用した。

(2) 検出遺構・遺物 (第6図)

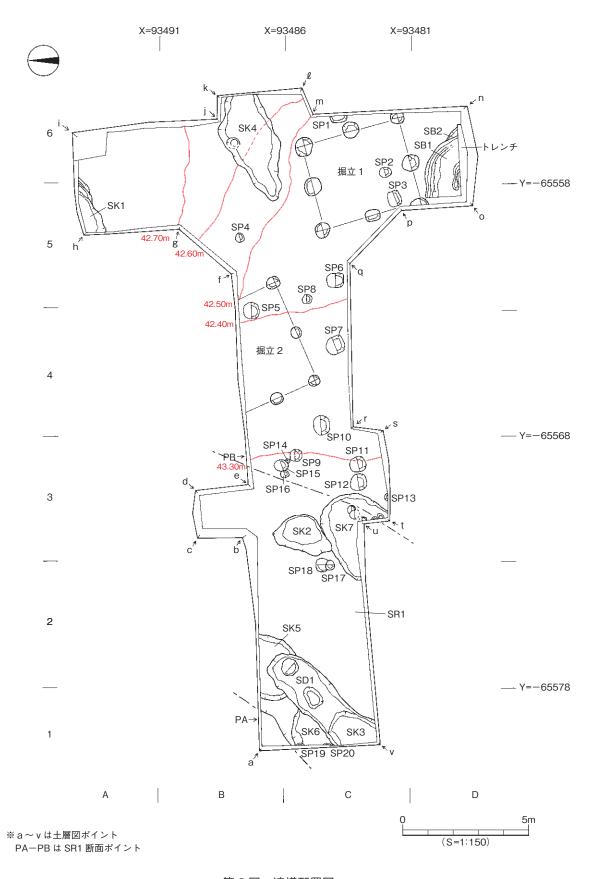
調査では竪穴住居 2 棟〔S B 1:弥生末、S B 2:6世紀後半〕、掘立柱建物 2 棟〔掘立 1・2:6世紀前半以降〕、溝 1 条〔S D 1:7世紀前半〕、自然流路 1 条〔S R 1:10世紀〕、土坑 7 基〔S K 1:6世紀中葉、S K 2:7世紀初~前半、S K 3・7:7世紀初頭、S K 4:古墳以前、S K 5・6:7世紀前半以前〕、柱穴 20 基を検出した。遺物は遺構や包含層及び重機掘削時に出土したもので、弥生土器(前期~後期)、土師器(古墳~中世)、須恵器(古墳~古代)、陶磁器(近世)、緑釉陶器(古代)、瓦(古代)、石器、鉄滓である。なお、遺物の出土量は収納箱(44×60×14 cm)約8箱分である。



- 12 -



第5図 南壁・西壁土層図



第6図 遺構配置図

3. 遺構と遺物

(1) 竪穴住居

[調査工程]

発掘調査時、調査区南東部にて竪穴住居を検出した。調査区壁面に沿ってトレンチを掘削し、土層観察を行った結果、二種類の土層を確認した。調査開始当初は埋土上位の掘り下げが終了した時点では1棟の住居と判断し、遺物の取り上げを行った。その後、住居下位にて円形状の掘り方を検出した。遺物の取り上げは埋土上位とは別に行い、住居底面にて壁体沿いに周溝状の溝を検出した。調査終了後の整理作業では埋土上位と下位で出土した遺物は明らかに時期差が認められ、住居の平面形態についても、住居東側には一部突出する部分が確認された。平面形態や遺物の出土状況から、検出した竪穴住居は本来2棟の重複であったと考えられる。ここでは、埋土上位部分として掘り下げた遺構をSB2、埋土下位部分をSB1として報告する。

SB1 (第7図、図版4)

調査区南東部D5・6区に位置し、住居西側と南側は調査区外に続く。調査壁の土層観察により、埋土上位はSB2が覆う。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.35 m、南北検出長1.30 m、壁高は30 cmを測る。SB1の底面は平坦で、埋土は黒色粘質シルトに黄色シルトがブロック状に混入するものである。住居床面にて、周壁溝を検出した。規模は幅20 cm、深さ14 cmを測り、埋土は黒色粘質シルトに黄色シルトがブロック状に混入するものである。住居壁体に沿って幅10~20 cm程度のテラス状の高まり(高床部)をもつ。このほか、床面中央部より溝状遺構(SD①)を検出した。規模は長さ1.0 m、幅10~20 cm、深さ7.5 cmを測り、埋土は住居埋土と同様である。遺物は、埋土中より弥生土器片が散在して出土した。

出土遺物 (第7図、図版7)

1~6は弥生土器である。1~4は甕形土器である。1は口縁部小片で口縁端部を上方に拡張し、口縁端面はナデ凹む。2は「く」の字状口縁で、口縁端部は丸い。口縁部内外面共にハケメ調整を施し、頸部内面には指頭痕が顕著にみられる。3は胴部の小片で、外面にはタタキ調整後ハケメ調整(8本/cm)、内面にハケメ調整(8本/cm)を施す。4は平底で、1/2の残存である。底部外面に煤が付着し、内面には指頭痕が顕著にみられる。5は壺形土器の口縁部で口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に径0.4cm大の竹管文1列と半截竹管文1列を施す。6は高坏形土器の脚部で、裾部に凹線文1条と脚部端面に凹線文2条を施す。なお、脚柱部には矢羽根状の文様がわずかに残る。裾部外面にはハケメ調整、裾部外面と脚部外端面には板状工具によるナデを施す。

時期:出土遺物には時期幅があるが、甕形土器(3)や壺形土器(5)の出土より、SB1の廃棄・埋没時期は弥生時代末とする。

SB2(第7図、図版4)

調査区南東部D5・6区に位置し、住居北西隅は掘立1柱穴に切られ、住居西側と南側は調査区外に続く。第VI層上面の検出であるが、調査壁の土層観察により第V層上面より掘削された遺構である。 平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.70 m、南北検出長1.20 m、壁高は検出面下10 cmを測る。住居底面には凸凹がみられ、埋土は黒色シルト単層である。遺物は埋土中 より土師器片、須恵器片のほか、石器が出土した。

出土遺物 (第7図、図版7)

7~9は須恵器である。7・8は坏身片で、たちあがりは欠損する。7は内外面共に回転ナデ調整を施す。9は有蓋高坏のつまみで、つまみ上部が凹む。内外面共に回転ナデ調整を施す。10は土師器の甕形土器で口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。胴部内外面共にハケメ調整を施し、内面には指頭痕が顕著にみられる。11はサヌカイトの剥片である。

時期:出土遺物の特徴より、SB2の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、6世紀後半とする。

(2) 掘立柱建物

掘立1 (第8図、図版4)

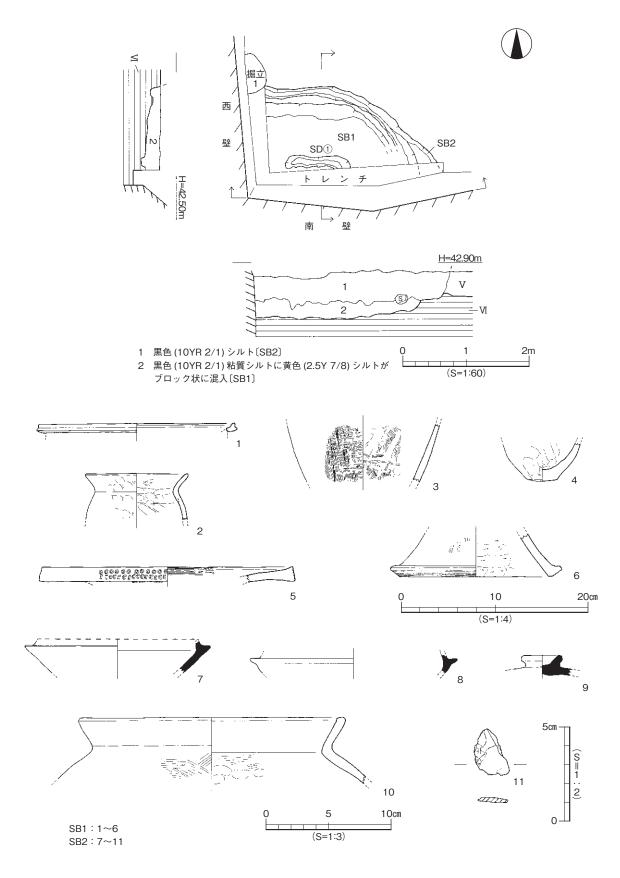
出土遺物 (第8図)

12・16 はSP④、13 はSP③、14 はSP②、15 はSP⑧出土品。12・13 は須恵器の坏蓋である。12 は口縁部の小片で、丸みのある断面三角形状の稜をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。内外面共に回転ナデ調整を施す。13 の稜は断面三角形状の丸みをもち、内外面共に回転ナデ調整を施す。14 は土師器の甕形土器の頸部片で、内面に明瞭な稜をもつ。15・16 は、弥生土器の甕形土器である。15 は「く」の字状を呈する口縁部の小片で、口縁端部は丸くおさめる。弥生後期。16 は口縁部の小片で、口唇部より下がった位置に凸帯を貼り付け、凸帯上に指頭押圧を施す。弥生前期。

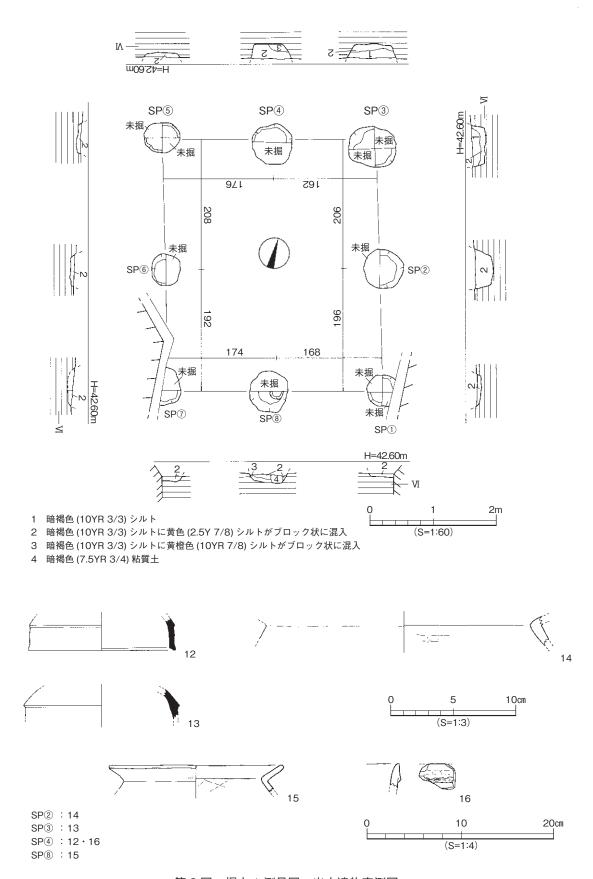
時期:出土した須恵器の特徴より古墳時代後期、6世紀前半以降の建物とする。

掘立2 (第9図)

調査区中央部東寄りB・C 4 区に位置し、建物北側は調査区外へ続く。第VI層上面での検出であり、4 基の柱穴(S P①~④)を確認した。2 間 × 1 間以上の建物で、規模は東西長 4.20 m、南北検出 長 2.50 m、柱穴間隔は $1.7 \sim 2.1$ mである。建物を構成する各柱穴の平面形態は円形を呈し、柱穴掘り方規模は径 $40 \sim 45$ cm、深さ $5 \sim 15$ cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色シルトに黄色シルトがブロック状に混入するものである。遺物は柱穴掘り方埋土中より弥生土器片や土師器片、須恵器片が出土したほか、S P④からは径 10 cm、厚さ 5 cmの扁平石が 2 点出土した。



第7図 SB1・2 測量図・出土遺物実測図

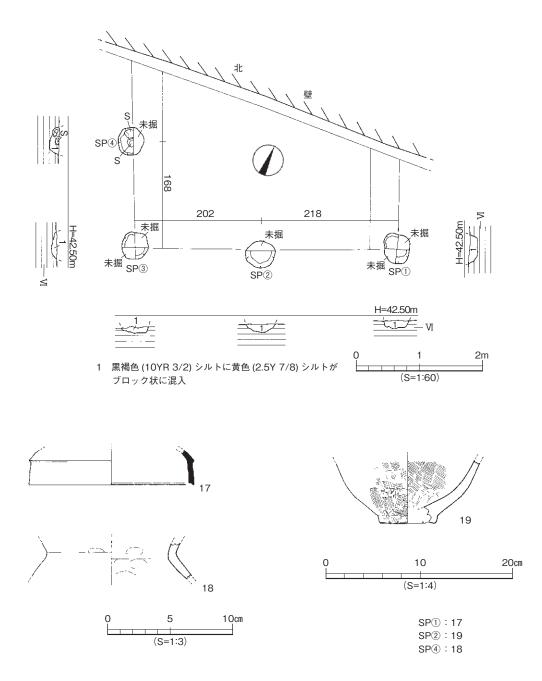


第8図 掘立1測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (第9図)

17 は S P ①、18 は S P ④、19 は S P ②出土品。17 は須恵器の坏蓋である。口縁部の小片で丸みのある断面三角形状の稜をもち、口縁端部は内傾する段をもつ。内外面共に回転ナデ調整を施す。18 は土師器の甕形土器である。口頸部の小片で、内面には指頭痕が顕著にみられる。19 は弥生土器の鉢形土器で、突出する上げ底である。外面はハケメ調整後、板状工具によるナデを施し、底部内面には指頭痕が顕著である。

時期:出土遺物や検出状況などから古墳時代後期、6世紀前半以降の建物とする。



第9図 掘立2測量図・出土遺物実測図

(3) 溝

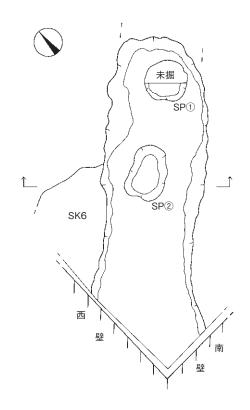
SD1 (第10回、図版5)

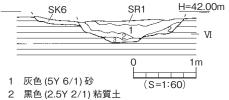
調査区西部B1~C2区で検出した北東-南西方向の溝で、南西側は調査区外へ続く。第 II 層上面での検出であり溝上面は自然流路 SR1が覆い、溝北側は土坑 SK5、西側は土坑 SK6を切り、溝基底では土坑 SK3を検出した。規模は検出長5.20 m、幅1.60 m、深さは検出面下34 cmを測る。溝基底面は、北東から南西へ向けて緩やかに傾斜をなす(比高差10 cm)。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は三種類に分かれ、1層:灰色砂、2層:黒色粘質土、3層:黒色粘質土に黄色シルトがブロック状に少量混入するものである。発掘調査時は、層毎に掘り下げと遺物の取り上げを行った。

溝基底面では2基の柱穴(SP①・②)を検出した。SP①は径60~65cm、深さ6cmを測る円形柱穴、SP②は長径0.85m、短径0.60m、深さ8cmを測る楕円形柱穴で、埋土は黒色粘質土に黄色シルトがブロック状に少量混入するものである。SP①からは、須恵器の坏身と高坏片が出土した。溝埋土中からは弥生土器片や土師器片、須恵器片が散在して数多く出土した。

出土遺物 (第11・12 図、図版7)

 $20 \sim 25$ は埋土 3 層、 $26 \sim 35$ は埋土 2 層、 $36 \sim 44$ は埋土 1 層出土品、 $45 \cdot 46$ は S P①、47 はトレンチ出土品である。





3 黒色 (2.5Y 2/1) 粘質土に黄色 (2.5Y 7/8) シルトがブロック状に少量混入

第10図 SD1測量図

埋土3層出土品(20~25)

20~23 は須恵器である。20 は坏蓋で丸みのある断面三角形状の稜をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。天井部外面には回転ヘラケズリ調整(1/2)を施す。21・22 は坏身で、たちあがり端部は内傾し、受部端に沈線状の凹みが巡る。23 は短頸壺の口縁部小片である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は丸い。体部外面には回転カキメ調整を施す。24 は土師器甕形土器の肩部片で、頸部内面には明瞭な稜をもつ。25 は弥生土器である。甕形土器の胴部片で、2条1組によるヘラ描き沈線文4条と刻目を施す。

埋土 2 層出土品 (26~35)

 $26\sim30$ は須恵器である。 $26\sim28$ は坏身で、 $26\cdot27$ はたちあがり端部が内傾し、受部は上外方に短く延び、受部端に沈線状の凹みが巡る。28 のたちあがり端部は丸くおさめ、内外面共に回転ナデ調整を施し、外面に回転ヘラケズリ調整を施す。 $29\cdot30$ は高坏である。29 は無蓋高坏で坏部中位に凸線 1 条と 8 条の波状文、柱部には長方形透かし 3 ヶ所を施す。柱部外面には回転カキメ調整を施し、

内面は回転ナデ調整を施す。30 は脚部の小片である。裾部は段をなし、脚端部は丸い。柱部に透かし2ヶ所以上を施し、柱部外面には回転カキメ調整を施す。31 は陶質系の壺である。口縁部は外反し、口縁端面はナデ凹む。頸部外面に凸線1条と凸線の上下に11条と4条以上の波状文を施す。32・33 は土師器である。32 は甕形土器の口縁部で口縁部中位に稜をもち、口縁端部は丸い。33 は甑形土器で口縁部は直立し、口縁端部は平らな面をなす。口縁部外面にはタテ方向のハケメ調整(6本/cm)、内面はヨコ方向のハケメ調整(6~7本/cm)を施す。34・35 は弥生土器である。34 は鉢形土器で口縁部は外反し、口縁端部は尖り気味である。35 は壺の肩胴部小片である。外面にハケメ調整(4本・8本/cm)、内面には粘土接合痕と指頭痕が顕著にみられる。

埋土1層出土品(36~44)

 $36 \sim 40$ は須恵器である。 $36 \cdot 37$ は坏蓋で断面三角形状の鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する。36 は扁平な天井部をもち、天井部外面には回転ヘラケズリ調整(1/3)を施す。 $38 \cdot 39$ は高坏である。38 は無蓋高坏で、坏部中位に凸線 2 条と凸線下に $8 \sim 9$ 条の波状文を施す。39 は脚部で脚裾部は下内方へ屈曲し、脚端部は丸い。柱部には、長方形状の透かし 2 ヶ所を看取する。40 は椀の胴部で、胴部中位に沈線 2 条を施す。外面には、平行叩き後回転カキメ調整を施す。 $41 \sim 43$ は土師器の甕形土器である。41 は口縁部がやや内湾し、口縁端部は丸くおさめる。 $42 \cdot 43$ は肩部片で、42 はヘラ描き沈線文 1 条、43 はヘラ描き沈線文 2 条を施す(記号か)。44 は弥生土器である。脚付鉢の脚部で、脚端部は丸い。

S P①出土品 (45·46)

45・46 は須恵器である。45 は坏身でたちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味に丸い。46 は高坏の脚部小片で脚端部は段をなし、下外方へ屈曲する。脚端面には、凹線状の凹みが巡る。

SD1トレンチ出土品(47)

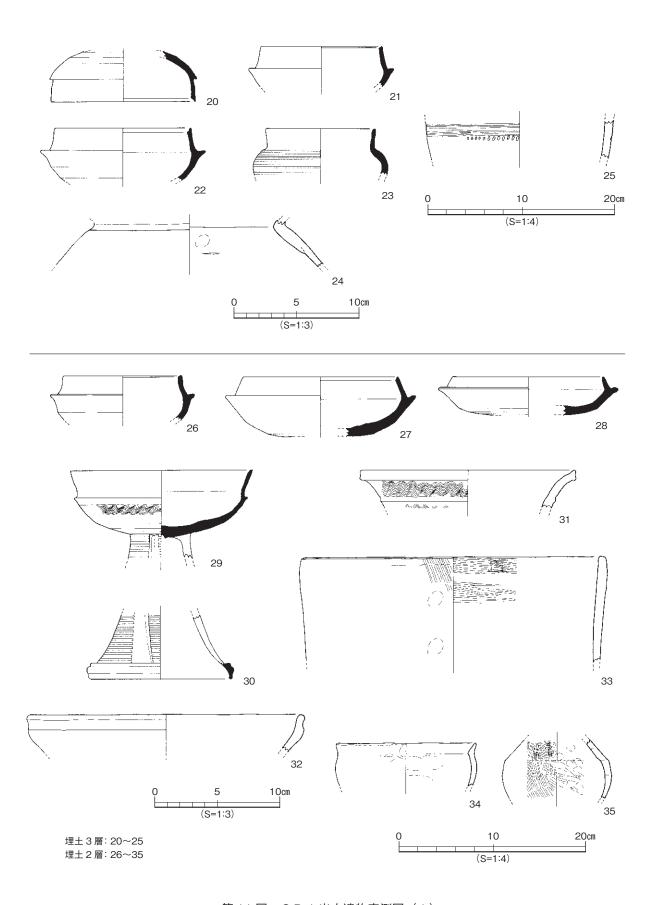
47 は須恵器の高坏である。脚裾部は垂直に下がり上端部には凸線が巡り、脚端部は丸い。柱部には、 長方形状の透かしを2ヶ所看取する。

時期:出土した遺物には時期幅が認められるが、溝の最終埋没時期は古墳時代終末、7世紀前半とする。

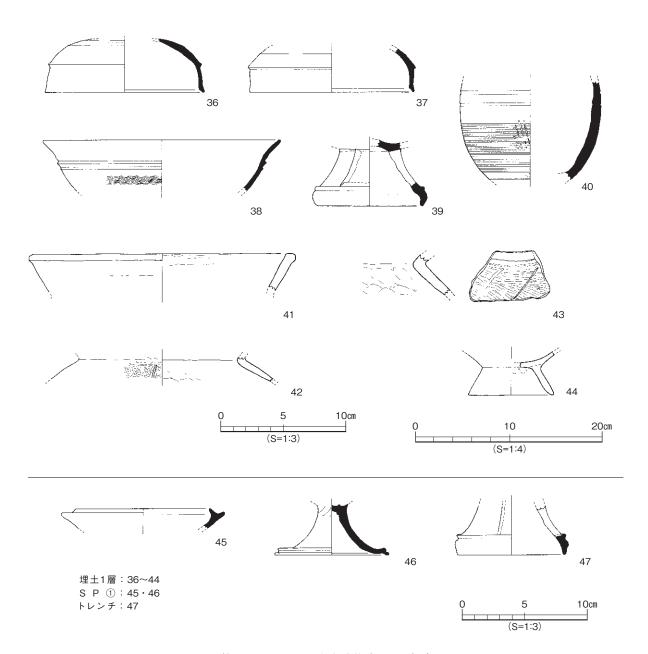
(4) 自然流路

SR1 (第6·13図)

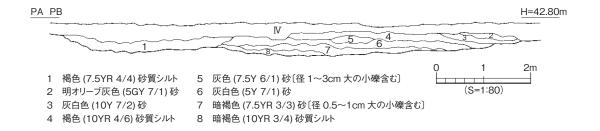
調査区西部B3~C3区で検出した北東-南西方向の流路で、平面精査では流路西側壁体のみを検出した。調査壁の土層観察により、流路の範囲を想定線で示している。第VI層または第VI層上面の検出であり、流路上面は第IV層が覆う。規模は東西検出長12.00 m、幅8.80 m、深さ50 cmを測る。流路基底面は、北東から南西へ向けて緩やかに傾斜をなす(比高差6 cm)。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は八種類あり、上位より1層:褐色砂質シルト、2層:明オリーブ灰色砂、3層:灰白色砂、4層:褐色砂質シルト、5層:灰色砂に径1~3 cm大の小礫を含む、6層:灰白色砂、7層:暗褐色砂に径0.5~1 cm大の小礫を含む、8層:暗褐色砂質シルトである。堆積状況をみると砂や小礫が数多くみられることから、激しい水流があったことが伺われる。遺物は埋土中より、弥生土器や土師器、須恵器、瓦のほか、緑釉陶器片や、石器、鉄滓が出土した。



第11図 SD1出土遺物実測図(1)



第12図 SD1出土遺物実測図(2)

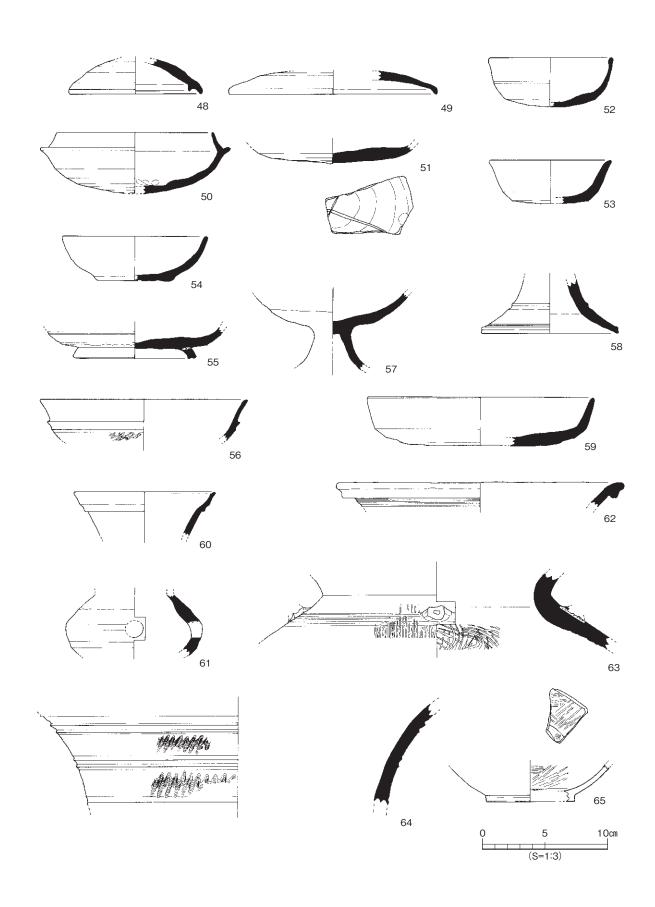


第13図 SR1断面図

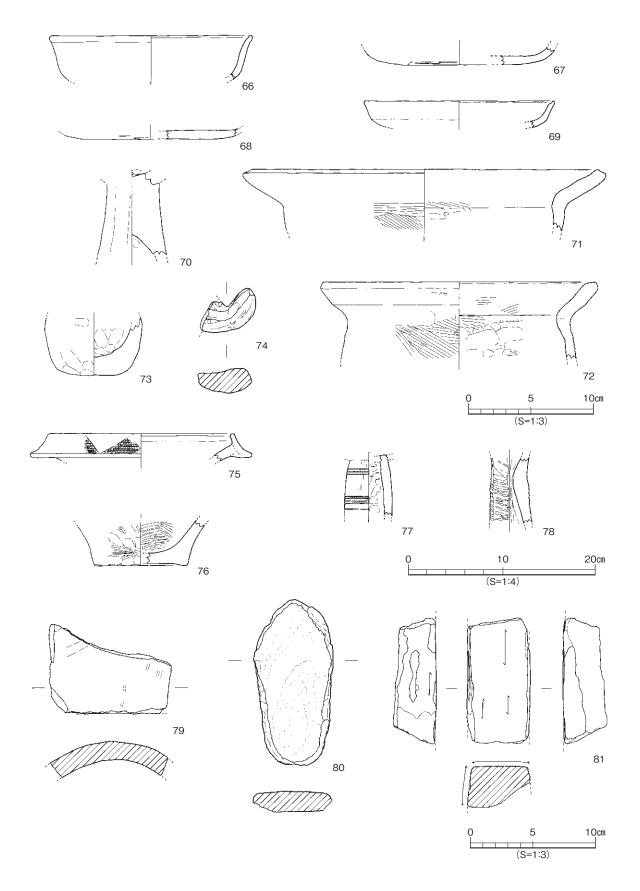
出土遺物 (第 14 ~ 16 図、図版 8 · 9)

 $48 \sim 64$ は須恵器である。 $48 \cdot 49$ は坏蓋である。48 は天井部が丸みを帯び、かえりはわずかに内 傾する。49 は天井部が扁平で、口縁部は下方に屈曲する。内外面共に回転ナデ調整を施し、天井部 外面には回転ヘラケズリ調整を施す。50・51 は坏身である。50 はたちあがりが内傾し、端部は丸い。 内外面共に回転ナデ調整を施し、底部外面には回転ヘラケズリ調整(反時計回り)を施す。51の底 部には、ヘラ記号を施す。52~55は坏である。52は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸 い。体部中位に沈線1条が巡る。53は口縁部がわずかに外反し、口縁端部は尖り気味に丸い。54は 突出する平底である。52~54の底部外面には、回転ヘラケズリ調整を施す。55は高台の付く坏で、 高台は「ハ」の字状に開く。56~58は高坏である。56は無蓋高坏で口縁部は緩やかに外反し、坏部 中位に凸線1条と波状文5条以上を施す。57は坏脚部片、58は脚部である。58は柱部中位に凸線1 条が巡り、脚端面は凹む。59は皿である。底部は平底で口縁部は短く内湾気味に立ち上がり、口縁 端部は尖り気味に丸い。底部外面には回転ヘラ切り痕を残し、内面には回転ナデ調整を施す。60・61 は 聴である。60 は口縁部が外反し頸部上位には屈曲部をもち、口縁端部は内傾する。61 は体部小片 で径 1.4 cm大の円孔を穿ち、外面には回転ヘラケズリ調整を施す。62・63 は壺である。62 は口縁部 が外反し、口縁端部は下方に肥厚する。なお、口縁部に歪みがみられる。63 は四耳壺の頸部で、突 起物の痕跡を残す。外面には平行叩き後回転カキメ調整を施し、内面には円弧叩きを施す。64 は大 甕の頸部片であり、2条の凸線と凸線間に波状文(11条と14条)を施す。65は緑釉陶器の椀である。 削出高台で、底部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。須恵質で胎土は灰色を呈し、内外面には濃緑 色の釉が部分的に残る。66~73は土師器である。66~68は坏で66は口縁部が内傾し、口縁端部内 面に沈線状の凹みをもつ。67・68 は平底である。69 は皿で、口縁端部は内傾する凹面をなす。66 ~ 69 は赤色塗彩土器。70 は高坏で、脚柱部は中実である。71・72 は甕形土器で、71 は口縁部が内湾 し、口縁端面はナデ凹み、器壁は厚い。胴部内外面に、粗いハケメ調整(5本/cm)を施す。72は 口縁部が内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。73 は壺形土器である。平底の完形品で、器壁は厚 い。内外面には指頭痕が顕著にみられる。74は瓦質の甑形土器で、上外方に屈曲する把手部である。 75~78 は弥生土器である。75.76 は壺形土器である。75 は複合口縁壺で口縁端部は上下方に肥厚し、 口縁部外面に山形文(縦横沈線で充塡)を施す。76 はわずかに上底で、内外面共にヨコ方向のヘラ ミガキを施す。77 は高坏形土器で、柱部に3条と4条の櫛描き沈線文を施す。78 は支脚形土器であり、 柱部は中空である。79 は丸瓦である。凸面は細縄叩き、凹面には布目痕を施す。80・81 は石製品で ある。80 は扁平片刃石斧で、敲打段階の未成品である。材質は縁色片岩である。81 は砂岩製の砥石で、 2面の砥面をもつ。82~84は鉄滓である。表面には無数の気泡がみられる。

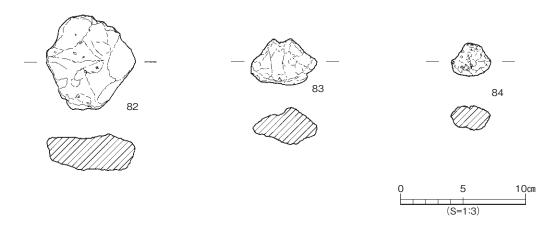
時期:出土した須恵器や緑釉陶器の特徴より、SR1の最終埋没時期は平安時代中期、10世紀代とする。



第14図 SR1出土遺物実測図(1)



第15図 SR1出土遺物実測図(2)

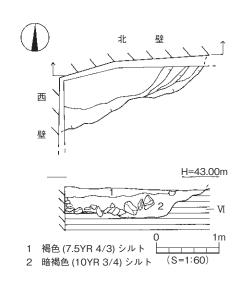


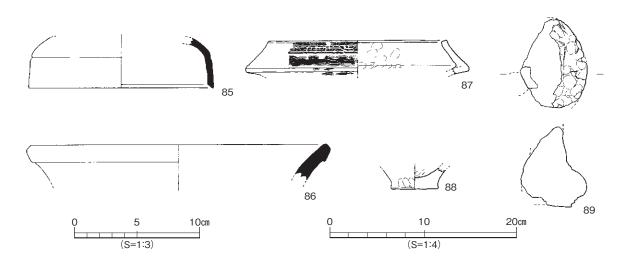
第16図 SR1出土遺物実測図(3)

(5) 土 坑

SK1 (第17 図、図版5)

調査区北東部A5区に位置し、土坑北側と西側は調査区外へ続く。第VI層上面での検出であり、第II層が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.20 m、南北検出長0.96 m、深さは検出面下50 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑東側にはテラス状の段部をもつ。埋土は二種類に分層され、上層は褐色シルト(1層)、下層は暗褐色シルト(2層)である。遺物は埋土中より弥生土器片や須恵器が出土したほか、径5~20 cm、厚さ3~10 cm大の河原石がまとまって出土した。





第17図 SK1測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (第17図)

85・86 は須恵器である。85 は坏蓋で、天井部と口縁部の境界に沈線状の凹みが巡る。86 は甕で口縁部は外反し、口縁端部は方形状に肥厚する。87・88 は弥生土器である。87 は複合口縁壺で、口縁部に7条の櫛描き沈線文を2段に施す。88 は甕形土器の底部で、平底となる。89 は支脚形土器で柱部は中空となり、外面には指頭痕が顕著にみられる。

時期:出土した須恵器の特徴から古墳時代後期、6世紀中葉とする。

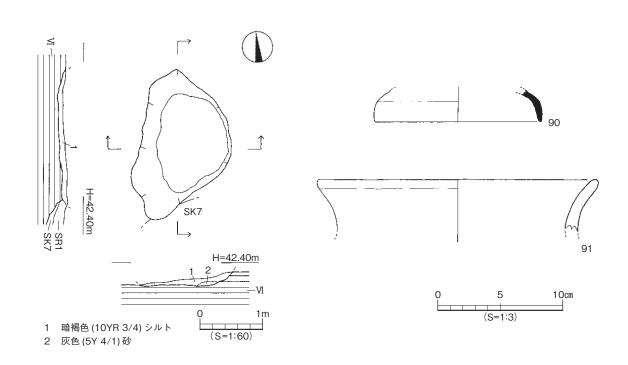
SK2 (第18図)

調査区中央部B・C3区に位置し、土坑南側は土坑SK7を切る。第VI層上面での検出である。平面 形態は不整楕円形を呈し、規模は南北長2.38 m、東西長1.60 m、深さ20 cmを測る。断面形態は逆台 形状を呈するが、土坑西側壁体は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色シルトを基調とし、基底面付近 には灰色砂が部分的に堆積する。土坑基底面は平坦である。遺物は埋土中より、土師器片や須恵器片 が少量出土した。

出土遺物 (第18図)

90 は須恵器である。坏蓋の小片で、口縁端部は丸い。内外面共に回転ナデ調整を施す。91 は土師器の甕形土器で口縁部は外反し、口縁端部は丸い。

時期:出土遺物の特徴から古墳時代終末、7世紀初頭から前半とする。



第18図 SK2測量図・出土遺物実測図

SK3 (第19図、図版6)

調査区南西部C1区に位置し、土坑南側と西側は調査区外へ続く。溝SD1基底面にて検出した土坑で、平面形態は楕円形を呈し、規模は南北検出長1.84 m、東西検出長1.40 m、深さは25 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は二種類に分層され、上層は灰色粘質土(1層)、下層は暗褐色シルトに黄色シルトがブロック状に混入(2層)である。土坑基底面には、多少の凸凹がみられる。土坑内には、基底面よりやや高い位置に径5~15 cm、厚さ3~10 cm大の河原石が散在しており、石の上面や石と石との間からは土師器片や須恵器片のほか敲石などが出土した。

出土遺物 (第19回、図版9)

92~95 は須恵器である。92・93 は坏蓋である。天井部は扁平で、口縁端部は内傾する面をもつ。 天井部外面は回転ヘラケズリ調整(1/2)、口縁部は内外面共に回転ナデ調整を施す。94・95 は甕である。94 の口縁部は外反し、口縁端部は下方に肥厚する。内外面共に回転ナデ調整を施す。95 は 頸肩部片で、外面は平行叩き、内面には円弧叩きを施す。96 は土師器の高坏で、柱部は中実となる。 97 はほぼ完形の敲石で、使用痕を顕著に残す。砂岩製。

時期:出土遺物の特徴と土坑上面を溝SD1が覆うことから古墳時代終末、7世紀初頭とする。

SK4 (第20図)

調査区東側B5・6区に位置し、土坑東側は調査区外へ続く。第VI層上面での検出であり、土坑上面は第V層が覆う。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は東西検出長4.48 m、南北長2.16 m、深さ22 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、壁体は比較的緩やかに立ち上がる。埋土は、暗褐色シルトに褐色シルトがブロック状に混入するものである。土坑基底面には凸凹がみられ、土坑北側基底面にて柱穴1基(SP①)を検出した。SP①は径40 cm、深さ17 cmを測る円形柱穴で、埋土は暗褐色シルト単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片や石が少量出土したが、実測しうるものはない。時期:出土遺物が僅少で時期決定は難しいが第V層が覆うことから、概ね古墳時代以前とする。

SK5 (第20図)

調査区北西部B1~C2区に位置し、土坑南側は溝SD1に切られ、土坑北側は調査区外へ続く。 調査壁の土層観察により、土坑上面は第V層と流路SR1が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと 考えられ、規模は東西検出長2.42 m、南北検出長1.66 m、深さ18 cmを測る。断面形態は皿状を呈し、 埋土は黒色粘質土単層である。土坑基底面は、中央部が凹んでいる。土坑内から、遺物の出土はない。 時期:出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SD1に切られることや第V層が覆うことから、 7世紀前半以前とする。

SK6 (第20図)

調査区西側C1区に位置し、土坑南東部は溝SD1に切られ、土坑西側は調査区外へ続く。第VI層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により本来は第V層上面より掘削された遺構である。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長1.60 m、東西検出長1.40 m、深さは検出面下12 cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色シルト単層である。土坑基底面は、中央部が凹んでいる。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期:出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SD1に切られることや第V層上面から掘削されていることから、概ね7世紀前半以前とする。

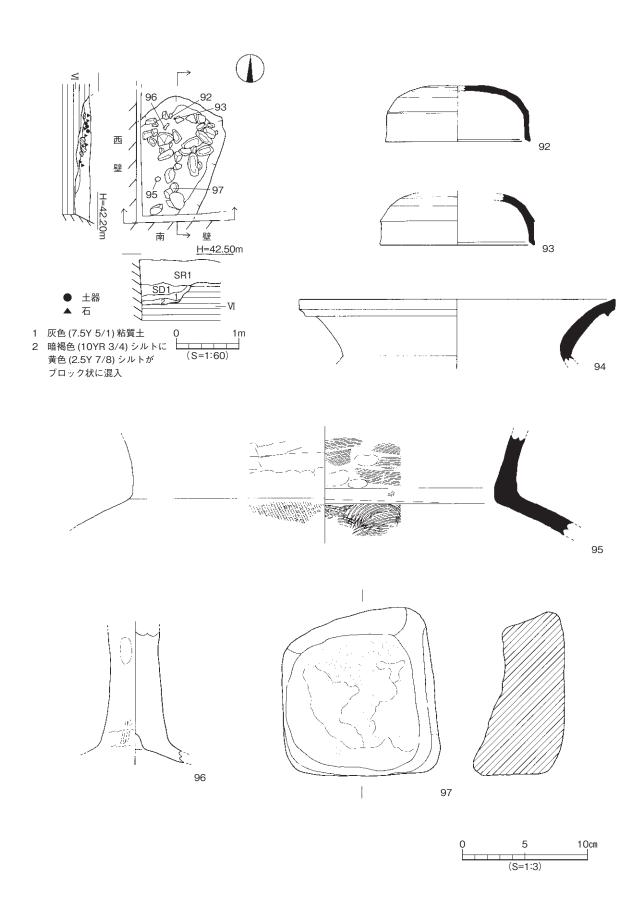
SK7 (第21 図、図版6)

調査区中央部C $2 \cdot 3$ 区に位置し、土坑北側は土坑 S K 2 に切られ、南側は調査区外へ続く。第V 層上面での検出であり、土坑上位は流路 S R 1 が覆っている。平面形態は楕円形を呈し、規模は東西長 3.30 m、南北検出長 2.70 m、深さ 60 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、壁体は鋭角的に立ち上がる。埋土は六種類に分層され、1 層:暗褐色シルト、2 層:暗褐色シルトに褐色シルトがブロック状に混入、3 層:暗褐色シルト、4 層:灰黄褐色粘質土、5 層:灰色シルトに黄色シルトがブロック状に混入、6 層:暗褐色シルトに黄色シルトがブロック状に混入である。埋土の堆積状況をみると、ほぽ水平堆積をなす。土坑基底面にて、5 基の柱穴(S P ①~⑤)を検出した。各柱穴の規模は径 20 ~ 40 cm、深さ 10 ~ 15 cmを測り、柱穴掘り方埋土は土坑埋土 6 と同様である。遺物は土坑埋土中より弥生土器片のほか、土師器片や須恵器片が数多く出土した。なお、埋土下位からは径 5 ~ 30 cm、厚さ 3 ~ 10 cm大の河原石が散在して出土した。

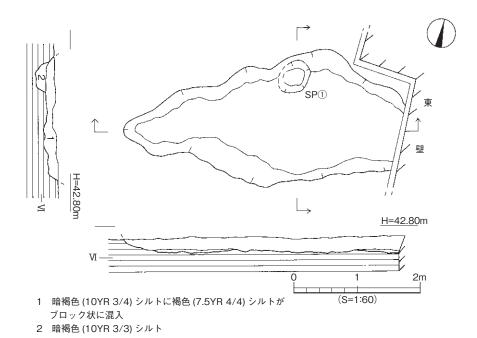
出土遺物 (第22図、図版9)

98~107は須恵器である。98~100は坏身である。98のたちあがり端部は内傾する段をなし、受部は上外方に延びる。99のたちあがり端部は丸く仕上げられ、100のたちあがりは欠損する。101は高坏の脚部で、脚柱部に透かしが1ヶ所以上施される。内外面共に回転ナデ調整を施し、裾部外面に工具痕を残す。102・103は提甁である。102は口縁部が外反し、口縁端部は丸く仕上げる。103は体部片で、外面に回転カキメ調整を施す。104・105は壺である。104は口縁部が上外方に屈曲し、口縁端部は尖り気味に丸い。105は肩胴部である。やや扁平な球状の胴部で、下半部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。106・107は甕である。106は口縁部が下外方に肥厚し、107の口縁部は長方形状に肥厚する。106の頸部外面には平行叩きを施す。108~110は土師器の甕である。108は口縁部が内湾し、口縁端部は内傾する面をなす。109・110は口縁部が外反し、109は口縁端面に凹線状の凹みが巡る。110は胴部外面にハケメ調整(5~6本/cm)を施す。111・112は弥生土器である。111は脚付の鉢形土器、112は甕形土器で上げ底となる。

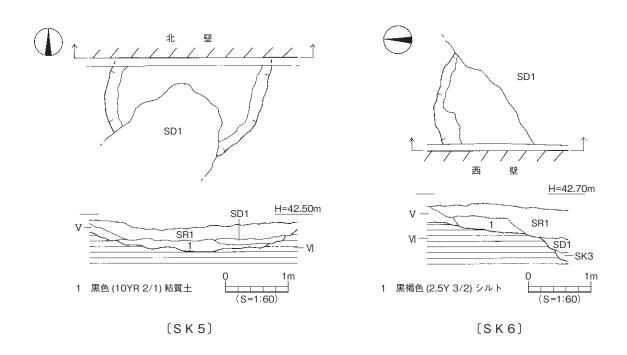
時期:出土遺物の特徴とSK2との切り合いより古墳時代終末、7世紀初頭頃とする。



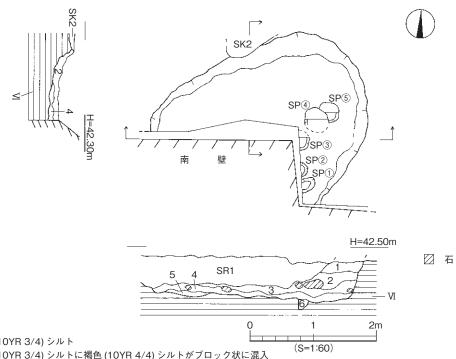
第19図 SK3測量図・出土遺物実測図



(SK4)



第20図 SK4・5・6 測量図



- 1 暗褐色 (10YR 3/4) シルト
- 2 暗褐色 (10YR 3/4) シルトに褐色 (10YR 4/4) シルトがブロック状に混入
- 3 暗褐色 (10YR 3/3) シルト
- 4 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土
- 5 灰色 (5 Y 4/1) シルトに黄色 (2.5 Y 7/8) シルトがブロック状に混入
- 6 暗褐色 (10YR 3/3) シルトに黄色 (2.5Y 7/8) シルトがブロック状に混入

第21図 SK7測量図

(6) その他の遺構と遺物

調査では遺構内及び掘立柱建物柱穴を除き、20基の柱穴を検出した。このほか、包含層掘削時や 重機掘削時に遺物が出土した。なお、重機掘削時の出土品は層位や地点が不明であるため、ここでは 地点不明遺物として取り扱う。

1) 柱 穴

調査で検出した柱穴は、掘り方埋土で分類すると以下の四種類(1類~4類)である。

1類:黒褐色土······ 9基[SP4·6~13]

1基「SP5]

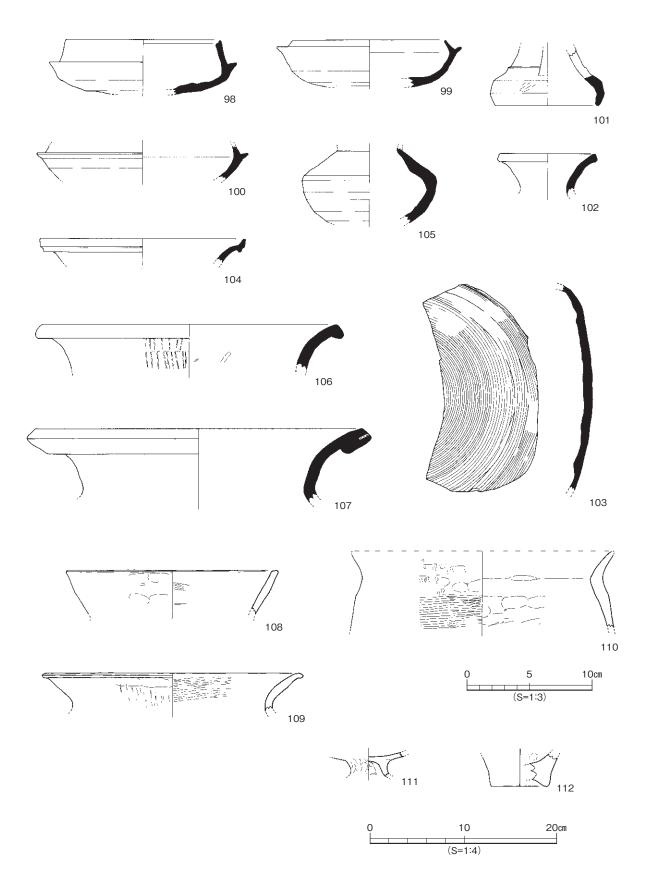
3類:暗褐色土(黄色土混入) ……………… 6基[SP1~3·15·19·20]

4類:灰色土·················· 4基[SP14·16~18]

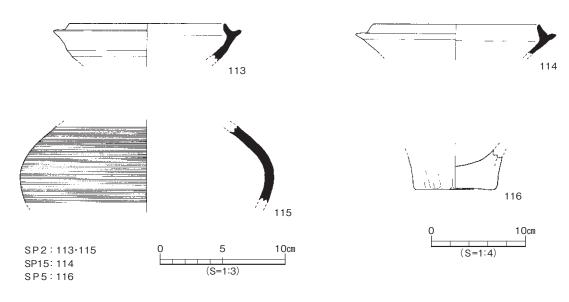
上記の柱穴のうち、2・3・4類の柱穴から出土した遺物を4点掲載した。

出土遺物 (第23図)

113・115 はSP2、114 はSP15、116 はSP5出土品。113~115 は須恵器である。113・114 は 坏身で、たちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。113の外面には回転ヘラケズリ調整 を施す。114 は受部端に沈線状の凹みが巡る。115 は短頸壺の肩部である。外面には回転カキメ調整 を施し、内面は回転ナデ調整を施す。116は弥生土器の壺形土器である。底部の完形品で、わずかに 上げ底である。



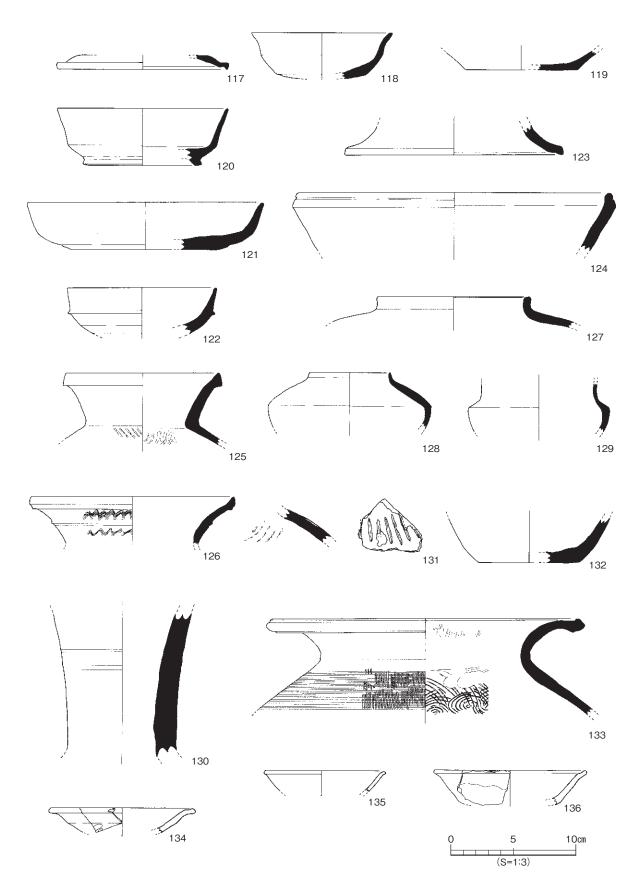
第22図 SK7出土遺物実測図



第23図 柱穴出土遺物実測図

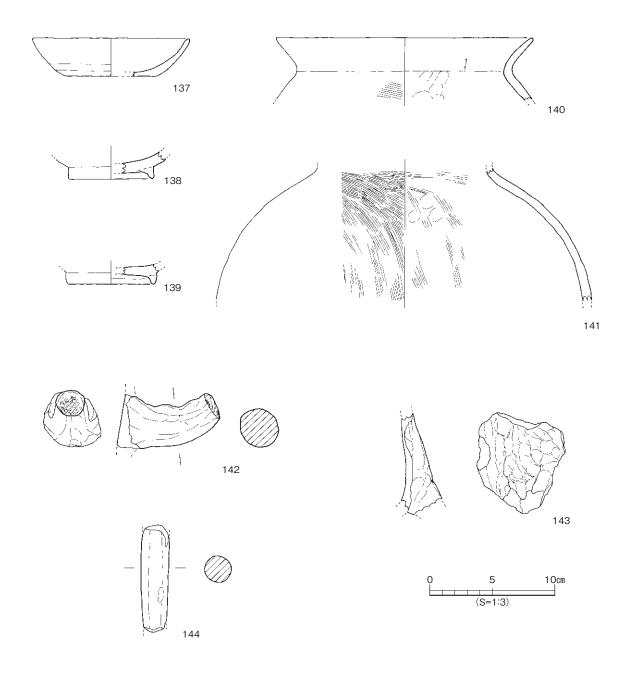
2) 包含層出土遺物 (第24~26 図、図版10)

117~133は須恵器である。117は坏蓋で天井部は屈曲部をもち、口縁部は下方に屈曲する。118 ~ 120 は坏である。118 は口縁部がわずかに外反し、口縁端部は尖り気味となる。底部外面には、回 転ヘラケズリ調整を施す。119 は平底で、底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。120 は高台の付 く坏である。121 は皿で、口縁部がわずかに外反し、口縁端部は尖り気味となる。底部外面には、回 転ヘラケズリ調整を施す。122・123 は高坏である。122 は無蓋高坏で、坏部中位に凸線が巡る。坏 下部外面には、回転ヘラケズリ調整を施す。123は脚部が「ハ」字状に開き、脚端部は尖り気味であ る。124 は鉢で口縁端部は上内方に肥厚し、口縁端面に凹線状の凹みがある。125 ~ 132 は壺である。 125 は口縁部が外反し、口縁端部は尖り気味である。内外面共に回転ナデ調整を施し、外面は平行叩 き、内面には円弧叩きを施す。126は頸部に凸線1条を施し、凸線上に波状文(6~8条)、凸線下 に波状文(4~5本)を施す。127~129は短頸壺である。127は口縁部が短く直立気味に立ち上がり、 口縁端面はナデ凹む。128 は口縁部が短く直立気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味である。130・ 131 は長頸壺である。130 は頸部に沈線2条を施す。131 は肩部小片で刺突文を施し、内面には円弧 叩きを施す。赤焼土器。132 は底部側面から貫通させたような径 0.3 cm大の円孔が、断面に一部看取 される。内外面共に回転ナデ調整を施し、底部外面は回転ヘラケズリ調整を施す。133 は甕の口頸部 で口縁端部は上方に拡張し、口縁端面に沈線状の凹みがある。肩部外面は平行叩き後回転カキメ調整、 内面には円弧叩きを施す。134~136は陶磁器である。134・135は磁器製の段皿で口縁部は上外方に 屈曲し、口縁端部は丸く仕上げる。胎土は134が灰白色、135は灰色を呈し、透明釉が全面に掛けら れている。136は肥前系陶器の段皿で、胎土は灰黄褐色を呈し、灰白色の釉が部分的に掛けられている。 137~144 は土師器である。137 は坏で口縁部は内傾し、口縁端部は尖り気味に丸い。底部は平底で、 外面には回転ヘラ切り痕を施す。138・139 は内黒椀の底部で、貼付による高台が付く。140・141 は 甕形土器である。140 は口縁部が外反し、口縁端部は尖り気味に丸い。141 は肩部片で、外面にハケ メ調整(6~7本/cm)を施す。142は韓式系の甑形土器の把手部で、把手先端部は面取りされる。 143・144 は土釜の底部片と脚部片である。

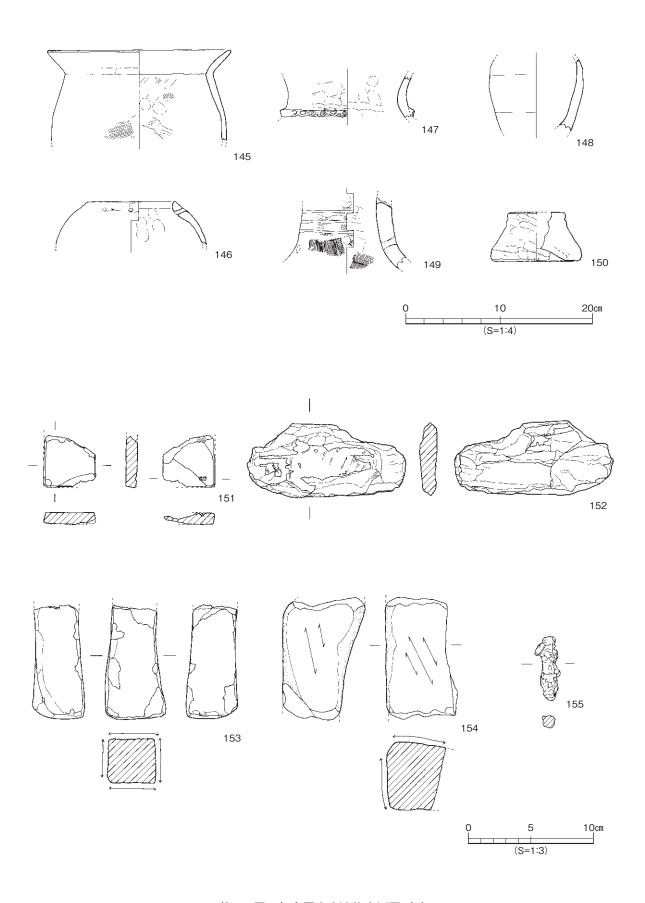


第24回 包含層出土遺物実測図(1)

 $145\sim150$ は弥生土器である。145 は甕形土器で口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸い。 $146\sim148$ は壺形土器である。146 は無頸壺で、口縁部に径 0.3 cm大の円孔 2 τ を看取する。147 は頸部で断面三角形状の凸帯を貼付け、凸帯上に刺突文を施す。148 は胴部である。149 は器台形土器の柱部で、沈線文 3 条と径 $0.7\sim0.9$ cm 大の円孔 2 τ を看取する。外面にはタテ方向、内面にはヨコ方向のハケメ調整(8 本/cm)を施す。150 は支脚形土器で、1/2 の残存である。151 は石帯で、径 2 mm大の孔を穿つ。152 は緑色片岩製の石庖丁で、敲打段階の未成品である。 $153\cdot154$ は砥石で、153 は四面、154 は二面の砥面をもつ。石材は153 が石英粗面岩、154 は砂岩である。155 は鉄釘である。



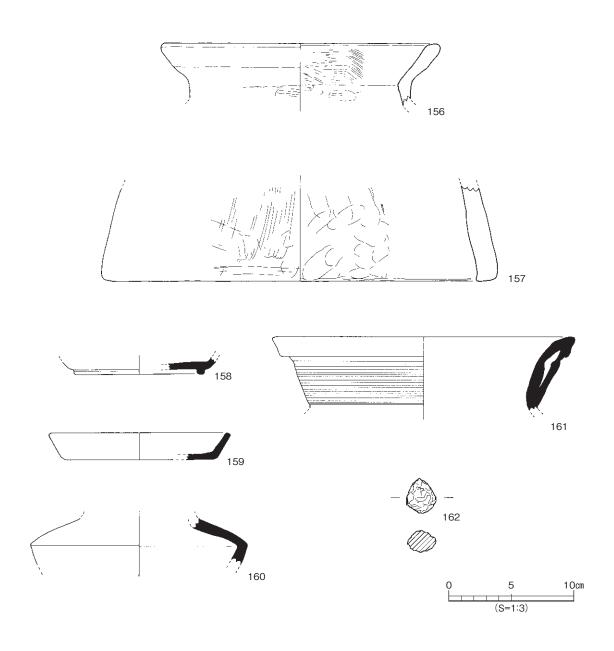
第25図 包含層出土遺物実測図(2)



第26図 包含層出土遺物実測図(3)

3) 地点不明出土遺物 (第27 図、図版10)

156・157 は土師器である。156 は甕形土器で口縁部は内傾し、口縁端部は内傾する面をもつ。口縁部中位には、わずかに稜をもつ。157 は移動式カマドの底部で、裾端部は平坦面をなす。器壁は、厚さ 1.7 cmを測る。外面はハケメ調整を施し、内面には指頭痕を顕著に残す。158~161 は須恵器である。158 は坏の底部で、直立する短い高台が付く。159 は皿で口縁部は外傾し、口縁端部は丸い。160 は長頸壺の肩部で、内外面共に回転ナデ調整を施す。161 は甕で口縁端部は肥厚し、頸部には火ぶくれ痕がみられる。頸部外面には、回転カキメ調整を施す。162 は鉄滓で、重量 8.4 g を測る。



第27図 地点不明出土遺物実測図

4. まとめ

本調査では、弥生時代から近世までの遺構や遺物を確認した。ここでは、時代別にまとめを行う。 弥生時代では、終末期の竪穴住居SB1を検出した。規模は不明であるが円形住居と考えられ、住 居内からは該期の遺物が少量出土した。なお、住居内や住居以外の遺構内からは弥生時代前期から後 期に時期比定される土器の出土も見られた。

古墳時代では、竪穴住居や掘立柱建物のほか溝や土坑を検出した。いずれも、古墳時代後期から終末期に時期比定される遺構である。SB2は隅丸方形住居で、住居の廃絶時期は古墳時代後期後半、6世紀後半頃と考えられる。掘立1・2は2×2間または2×1間以上の小型建物で、構築時期は出土遺物より6世紀前半以降と思われる。SD1は北東-南西方向に延びる直線的な溝で、溝内からは古墳時代中期後半から7世紀前半頃の土器類が混在して出土した。このほか7基の土坑を検出したが、SK1は6世紀中葉、その他は7世紀初頭から前半期に時期比定されるものである。このうち、SK1とSK3からは径5~20 cm、厚さ3~10 cm大の河原石が土器類と共に数多く出土した。遺物ではSD1より線刻を施した土器片や、包含層中からは韓式系土器などが出土している。

古代では平安時代中期、10世紀代の自然流路SR1を検出した。北東-南西方向の流路で、流路幅は推定10m以上を測る。SR1からは弥生土器や土師器、須恵器のほか緑釉陶器片や瓦片、鉄滓などが出土している。樽味地区における古代の遺構は検出事例が少なく、調査地南方にある樽味四反地遺跡1次調査ではSR1と同時期の流路が報告されている。なお、1次調査検出の流路内からは土師器や須恵器のほか緑釉陶器や灰釉陶器の破片などが出土している。このほか、包含層資料ではあるが石帯が1点出土している。

中・近世の遺構は未検出であるが、包含層中より室町時代から江戸時代に時期比定される土師器片 や陶磁器片などが少量出土している。

今回の調査で注目される遺構は、古代の流路SR1である。樟味地区における古代の遺構は検出事例が少なく、集落様相は不明な点が多い。しかしながら、流路出土の緑釉陶器や瓦などの遺物は樟味地区において官衙あるいは寺院に関連する施設の存在を伺わせる資料といえよう。今後、樟味地区の集落変遷を解明するうえで、古代集落の解明も重要課題のひとつになろう。

遺構・遺物一覧 一凡例一

- (1)以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2)遺物観察表の各記載について。

法量欄 ():復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例)□→□縁部、□端→□縁端部、天→天井部、頸→頸部、胴→胴部、 体→体部、脚→脚部、底→底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例)石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土、赤粒→赤色酸化土粒。

()の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例)石・長 $(1 \sim 4)$ → $\lceil 1 \sim 4 \text{ mm}$ 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表3	竪穴住居-	一覧
竪穴 (SB)	地 区	

ļ	竪穴 (SB)	地 区	平面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	内部施設	出土遺物	時期	備考
	1	D5·6	円形	(2.35)×(1.30)×0.30	周壁溝·高床部	弥生	弥生末	掘立1に切られる
Ī	2	D5·6	隅丸方形	(2.70)×(1.20)×0.10		土師·須恵·石	6世紀後半	

表 4 掘立柱建物一覧

掘立	地区	方 位	規 (間)	桁行長 (m)	梁行長 (m)	出土遺物	時 期	備考
1	C5~D6	南北	2×2	3.58	3.00	弥生·土師·須恵	6世紀前半以降	SB1を切る
2	B·C4	東西	(1)×2	4.20	(2.50)	弥生·土師·須恵· 石	6世紀前半以降	

表5 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時 期	備考
1	B1~C2	レンズ状	(5.20)×1.60×0.34	灰色砂 他	弥生·土師·須恵	7世紀前半	SK5・6を切る

表 6 自然流路一覧

流路 (SR)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時 期	備考
1	B3~C3	レンズ状	(12.00)×8.80×0.50	褐色砂質シルト 他	弥生·土師·須恵 瓦·緑釉·石·鉄	10世紀	Ⅳ層が覆う

表7 土坑一覧

201								
土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A5	(楕円形)	逆台形状	(2.20)×(0.96)×0.50	褐色シルト 他	弥生·須恵· 石	6世紀中葉	
2	в.сз	不整 楕円形	逆台形状	2.38×1.60×0.20	暗褐色シルト	土師·須恵	7世紀初頭 ~前半	SK7を切る
3	C1	楕円形	逆台形状	(1.84)×(1.40)×0.25	灰色粘質土 他	土師·須恵· 石	7世紀初頭	
4	B5·6	不整 楕円形	逆台形状	(4.48)×2.16×0.22	暗褐色シルト (褐色シルト混)	弥生·石	古墳時代以前	V層が覆う
5	B1~C2	(楕円形)	皿状	(2.42)×(1.66)×0.18	黒色粘質土		7世紀前半以前	SD1に切られる
6	C1	(円形)	皿状	(1.60)×(1.40)×0.12	黒褐色シルト		7世紀前半以前	SD1に切られる
7	C2·3	楕円形	逆台形状	3.30×(2.70)×0.60	暗褐色シルト 他	弥生·土師 須恵·石	7世紀初頭	SK2に切られる

表8 柱穴一覧 (1)

20	111/	70				(1 /
柱穴 (SP)	地区	平面形	規 模 長径 × 短径 × 深さ(m)	埋土	出土遺物	備考
1	C6	(円形)	$(0.55) \times (0.52) \times 0.12$	暗褐色土(黄色土混)		
2	C6	円形	0.35×0.35×0.08	暗褐色土(黄色土混)	土師·須恵	
3	C5	楕円形	0.60×0.45×0.21	暗褐色土(黄色土混)		
4	В5	円形	0.30×0.28×0.31	黒褐色土	弥生	
5	B4·5	円形	0.60×0.60×0.17	褐色土	弥生	
6	C5	楕円形	0.75×0.53×0.20	黒褐色土	弥生	
7	C4	楕円形	0.80×0.60×0.12	黒褐色土	弥生	
8	C5	円形	0.25×0.25×0.08	黒褐色土		
9	СЗ	円形	0.45×0.43×0.06	黒褐色土		
10	C3·4	楕円形	0.68×0.60×0.10	黒褐色土		

柱穴一覧 (2)

	<u> </u>					(2)
柱穴 (SP)	地 区	平面形	規 模 長径 × 短径 × 深さ(m)	埋 土	出土遺物	備考
11	СЗ	楕円形	0.58×0.46×0.21	黒褐色土	弥生	
12	СЗ	楕円形	0.64×0.54×0.12	黒褐色土		
13	СЗ	円形	(0.35)×(0.12)×0.09	黒褐色土		
14	СЗ	円形	0.20×0.20×0.06	灰色土		
15	в•сз	円形	0.40×0.38×0.06	暗褐色土(黄色土混)	須恵·石	
16	в.сз	円形	0.30×0.30×0.07	灰色土	土師	
17	C2	円形	0.25×0.25×0.06	灰色土		
18	C2·3	円形	0.50×(0.43)×0.06	灰色土		
19	C1	(円形)	(0.35)×(0.10)×0.10	暗褐色土(黄色土混)	土師·須恵	SK6基底面検出
20	C1	(円形)	(0.35)×(0.08)×0.08	暗褐色土(黄色土混)		SK6基底面検出

表9 SB1出土遺物観察表 土製品

100	O L	, , ,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	上/包7///	九尔 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八						
番号	器種	法量	(cm)	形態・施文		整	色調 (外面)	胎土	備考	図版
					外面	内面	(内面)	焼成		
1	甕	口径残高	(20.8) 0.9	口縁端部は上方に拡張し、口縁端面はナデ凹む。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1) ◎		
2	甕	口径残高	(10.8) 4.8	「く」の字状口縁。	ハケ→ナデ	□ハケ→ヨコナデ ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~5)金◎	黒斑	7
3	甕	残高	6.1	胴部小片。	タタキ→ ハケ(8本/cm)	ハケ(8本/cm) →ナデアゲ	暗灰褐色 淡茶色	石・長(1) ◎	黒斑	
4	薨	底径 残高	3.1 4.5	平底。1/2の残存。	ナデ ®ナデ・ヨコナデ	ナデ ナデアゲ	暗黒褐色 淡茶色	石・長(1~2) ◎	黒斑 煤付着	
5	壺	口径残高		口縁端面に竹管文(径0.4cm)1列と半截竹管文1列あり。	□竈ヨコナデハケ(10本/cm)→ヨコナデ	ヨコハケ (10本/cm)	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2)金◎	黒斑	7
6	高坏	底径 残高	(16.2) 4.6	裾部に凹線文1条と矢羽根透かしを施す。脚部端面に凹線文2条あり。	即ハケ→ヨコナデ即省ヨコナデ	板ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1)金		

表 10 SB2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量((cm)	形態・施文	調	整	色調 (外面)	胎土	備考	図版
田力	667里	(大里	(CIII)	形思·旭文	外面	内面	(内面)	焼成	加与	凶加
7	坏身	残高	2.5	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 白灰色	密 ○		
8	坏身	残高	1.5	受部は上外方に短く伸びる。	マメツ	マメツ	淡灰色 淡灰色	密〇		
9	高坏	つまみ径残高	3.2 1.6	有蓋髙坏。つまみ上部は凹む。	回転ナデ	ナデ	淡灰白色 灰色	密◎		
10	甕	口径残高	(20.7) 5.3	内湾口縁。口縁端部は内傾する面をも つ。	□ヨコナデ ハケ(マメツ)	□ヨコナデ ハケ(マメツ)	赤茶色 赤茶色	石(1~3)金 赤粒 ◎		7

表 11 SB2出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材質	長さ (cm)	法 幅 (cm)	量 厚さ (cm)	重さ (g)	備	考	図版
11	剥片	_	サヌカイト	2.5	1.7	0.2	1.1			

表 12 掘立 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量	()	形態・施文	調	整	色調 (外面)	胎土	備考	図版
笛写		公里	(CM)	形態·旭又	外面	内面	世調 (内面)	焼成	佣与	凶加
12	坏蓋	口径 残高	(11.5) 2.5	断面三角形状の丸味をもつ稜。口縁端 部は内傾する面をもつ。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密	SP4	
13	坏蓋	残高	2.3	断面三角形状の丸味をもつ稜。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 黒灰色	密◎	SP3	
14	甕	残高	2.4	頸部片。	□ヨコナデ ハケ(マメツ)	□ヨコナデ ハケ→ナデ	茶褐色 明茶褐色	石・長(1)金	SP2	
15	甕	口径残高		「く」の字状口縁。口縁端部は丸い。 小片。	マメツ (ヨコナデ)	□ヨコナデ ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~2)金◎	SP®	
16	甕	残高	2.7	貼付凸帯。凸帯上に指頭押圧を施す。	ナデ	ナデ	茶褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎	SP4	

表 13 掘立 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量	(cm)	形態・施文	新 外面	整内面	色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
17	坏蓋	口径残高	(12.9) 2.8	断面三角形状の丸味をもつ稜。口縁端 部は内傾する段をもつ。		回転ナデ	青灰色 青灰色	密	SP1)	
18	甕	残高	2.8	口頸部小片。	マメツ	ナデ(マメツ)	橙色 橙色	長(1) 〇	SP4	
19	鉢	底径 残高	(5.6) 7.6	突出する上げ底。	胴板ナデ→ハケ ⑥ハケ→ナデ	⊪ナデ→ハケ ⑥ナデ	暗褐色 淡灰褐色	石・長(1~2) ◎	SP② 黒斑 煤付着?	

(1)

表 14 SD1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量	(cm)	形態・施文	期 外面	整内面	色調(外面)	胎土 焼成	備考	図版
20	坏蓋	口径残高	(11.3) 4.0	断面三角形状の丸味をもつ稜。口縁端 部は内傾する面をもつ。		回転ナデ	灰色 灰色	密◎	3層	
21	坏身	口径残高	(9.5) 3.2	たちあがり端部は内傾し、受部端に沈 線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密◎	3層	7
22	坏身	口径残高	(10.6) 4.1	たちあがり端部は内傾し、受部端に沈 線状の凹みあり。小片。	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密◎	3層	
23	壺	口径残高		短頸壺。口縁部はほぼ垂直に立ち上が り、口縁端部は丸い。小片。	□回転ナデ 剛カキメ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密◎	3層	7
24	甕	残高	3.8	肩部片。	ヨコナデナデ	ヨコナデ ナデ(マメツ)	明橙色 明橙色	石・長(1~2)金◎	3層	
25	甕	残高	4.1	2条1組によるヘラ描き沈線文4条と刻目あり。小片。	ナデ	ナデ	淡茶色 淡橙茶色	石·長(1~2)金 赤粒 ◎	3層 黒斑	7
26	坏身	口径 残高	(9.2) 3.5	たちあがり端部は内傾し、受部端に沈 線状の凹みあり。	□回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密◎	2層	
27	坏身	口径残高	(12.1) 4.7	底部は平底風。たちあがり端部は内傾 し、受部端に沈線状の凹みあり。	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密◎	2層	7
28	坏身	口径残高	(12.0) 3.0	底部は平底風。たちあがり端部は丸くお さめ、受部端は丸い。	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色灰色	密◎	2層	7
29	高坏	口径残高	(14.4) 7.0	無蓋高坏。坏部外面に8条の波状文、 柱部外面に長方形透かし3ヶ所あり。	□回転ナデ○回転ヘラケズリ助カキメ	□回転ナデ(死) ナデ(別) 回転ナデ	青灰色 青灰色	密◎	2層	7
30	高坏	底径 残高	(11.0) 5.1	2ヶ所以上の透かしあり。小片。	脚カキメ 脚端 回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密◎	2層	

SD1出土遺物観察表 土製品

(2)

		от н		/						(Δ)
番号	器種	法量	(cm)	形態・施文	期 外面	整内面	色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
31	壺	口径残高	(16.8) 3.0	陶質系。頸部に1条の凸線と4条以上と 11条の波状文あり。	回転ナデ	マメツ	暗灰色 灰色	密◎	2層	7
32	蹇	口径残高	(21.2) 3.0	口縁部中位に稜をもち、口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	密◎	2層	
33	觝	口径残高	(23.0) 8.4	口縁部は直立し、口縁端部は平坦面をなす。	回ハケ(6本/cm) ナデ	回ハケ (6~7本/cm) ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長(1~4)金◎	2層	
34	鉢	口径残高	(14.4) 4.5	外反口縁。口縁端部は尖り気味。	ナデ(マメツ)	□ヨコナデ ナデ	赤茶色 黄褐色	石・長(1~5)金◎	2層	
35	壺	残高	6.2	肩胴部小片。	同ハケ(8本/cm) 剛ハケ(4本/cm)	^同 ナデ	褐色 褐色	石・長(1~2)金◎	2層	
36	坏蓋	口径残高	(12.5) 4.2	扁平な天井部。断面三角形状の鋭い 稜をもち、口縁端部は内傾する。		回転ナデ	灰色 灰色	密・金◎	1層	
37	坏蓋	口径残高	(13.0) 3.4	断面三角形状の鋭い稜をもち、口縁端 部は内傾する。		(医ナデ(回回転ナデ	灰色 青灰色	密◎	1層	
38	高坏	口径残高	(18.7) 4.0	無蓋高坏。坏部中位に凸線2条と凸線 下に8~9条の波状文あり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 淡灰色	密◎	1層	
39	高坏	底径 残高	(8.2) 5.2	脚部に透かしが2ヶ所以上あり。	回転ナデ	⑤ナデ	青灰色 青灰色	密◎	1層	
40	椀	残高	7.7	胴部中位に沈線2条あり。		回転ナデ	灰色 淡灰色	密◎	1層	
41	魙	口径残高	(19.4) 3.0	内湾口縁。口縁端部は丸い。	ヨコナデ (マメツ)	①濁ヨコナデ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)金◎	1層	
42	魙	残高	1.9	肩部にヘラ描き沈線文1条あり(記号か)。	回ヨコナデ ハケ→ナデ	□ヨコナデ ナデ(工具痕?)	明褐色 明褐色	石・長(1)金◎	1層	
43	魙	残高	3.4	肩部にヘラ描き沈線文2条あり(記号か)。	ハケ	□ヨコナデ ナデ(ハケ?)	淡褐色 淡褐色	石・長(1~2)金◎	1層	7
44	鉢	底径 残高	(8.9) 4.6	脚付鉢。	ナデ(マメツ)	ナデ(マメツ)	明橙褐色 明橙褐色	石・長(1~3) 赤粒 ◎	1層	
45	坏身	口径残高	(10.5) 1.6	たちあがりは短く内傾し、端部は尖り気 味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	乳白色 乳白色	密◎	SP(1)	
46	高坏	底径残高	(9.0) 3.9	脚端部は段をなし、下外方へ屈曲する。 脚端面に凹線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密〇	SP(1)	
47	高坏	底径 残高		脚裾部には凸線が巡り、柱部に透かしが2ヶ所以上あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰色	密◎	トレンチ	

表 15 SR1出土遺物観察表 土製品

(1)

				1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1						
番号	器種	法量	(cm)	形態・施文	別 別面	整内面	色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
					7下四	F.1HH	(下1曲)	がたがな		
48	坏蓋	口径残高		天井部は丸味を帯び、かえりはわずか に内傾し、端部は丸い。		回転ナデ	灰色 灰白色	密◎		
49	坏蓋	口径残高		扁平な天井部。かえりは下方に屈曲し、 端部は尖り気味。		回転ナデ	灰色 灰白色	密◎		
50	坏身	口径残高	(12.1) 4.8	たちあがりは内傾し、端部は丸い。	回回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	□回転ナデ ⑥ナデ	青灰色 灰色	密・金◎		8

(2)

SR1出土遺物観察表 土製品

	S	итщ.	上退水	/既奈衣 上表吅					'	(Δ)
番号	器種	法量	(cm)	形態・施文	別 外面	整 内面	色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
51	坏身	残高	1.4	底部にヘラ記号あり。	回転ヘラケズリ	回転ナデ ⑥ナデ	灰茶色 灰茶色	密〇		8
52	坏	口径器高	(9.6) 3.9	口縁部は内湾気味に立ち上がり、体部 中位に沈線1条あり。	□回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回回転ナデ 慮ナデ	灰白色 灰白色	密◎		8
53	坏	口径 底径 器高	(9.6) (6.0) 3.4	平底。口縁部はわずかに外反し、口縁 端部は丸い。	回回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密◎		
54	坏	口径 底径 器高	(11.2) (5.7) 3.5	突出する平底の底部。	回転ナデの回転ヘラ切り	回回転ナデ 慮ナデ	灰白色 灰白色	密◎		8
55	坏	底径 残高	(9.5) 2.5	「ハ」字状に開く高台。	働カキメ回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密◎		
56	高坏	口径残高	(16.3) 3.2	無蓋高坏。坏部中位に凸線1条と波状 文5条以上あり。	回転ナデ	回転ナデナデ	青灰色 灰色	密◎		
57	高坏	残高	6.3	1/3の残存。	⑤回転ナデ→ナデ⑩回転ナデ	⑤回転ナデ→ナデ側回転ナデ	灰黄白色 灰黄白色	密◎		
58	高坏	底径残高	(10.8) 4.2	柱部中位に凸線1条あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 淡灰色	密 🔘		8
59	Ш	口径 底径 器高	(17.7) (8.4) 3.8	平底。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は尖り気味。	ナデの国転へラ切り	回回転ナデ ⑥ナデ	淡灰色 淡灰色	密◎		
60	璲	口径残高	(11.2) 3.4	口縁部は屈曲し、口縁端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 淡灰色	密◎		
61	횮	残高	4.8	円孔(径1.4cm)あり。	剛シナデ 剛シ回転ヘラケ ズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密◎		
62	壺	口径残高	(22.2) 1.9	口縁端部は下方に肥厚し、口縁部に歪みあり。	□回転ナデ ®カキメ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密◎		
63	壺	残高	6.0	四耳壺。		⑧回転ナデ ⊪円弧叩き	灰黄色 灰色	密◎	自然釉	8
64	甕	残高	8.0	2条の凸線と凸線間に11条と14条の波 状文あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色灰色	密◎	自然釉?	
65	椀	底径残高	(7.0) 2.9	緑釉陶器。削出高台。内外面に濃緑色の釉が残る。	施釉	施釉	濃緑色 濃緑色	密◎	胎土: 灰色	8
66	坏	口径残高	(15.8) 3.5	口縁端部内面に沈線状の凹みあり。赤 色塗彩土器。	ヨコナデ	□ヨコナデ 働ミガキ?	橙褐色 橙褐色	密・金◎		8
67	坏	底径残高	(9.4) 1.4	平底。赤色塗彩土器。	ヨコナデ ⑥ヘラケズリ	ヨコナデ	淡乳褐色 淡乳褐色	密・金◎		
68	坏	底径残高	(10.6) 0.8	平底。赤色塗彩土器。	ヘラケズリ	ヨコナデ	淡乳白色 淡乳白色	密◎		
69	Ш	口径残高	(14.9) 2.0	口縁端部は内傾する凹面をもつ。赤色 塗彩土器。	ヨコナデ 慮ヘラケズリ	ヨコナデ	淡乳褐色 淡乳褐色	密◎		
70	高坏	残高	6.4	中実。	面取り→ナデ (マメツ)	ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長(1~2) ◎		
71	甕	口径残高	(21.2) 4.8	口縁端面はナデ凹む。器壁は厚い。	□ヨコナデ ハケ(5本/cm)	□ヨコナデ・ハケ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	淡茶褐色 淡灰茶色	石・長(1~3)金	黒斑	
				i .						

SR1出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量	(cm)	形態・施文		整	色調 (外面)	胎土	備考	図版
ш /	加加	仏里	(CIII)	心态 旭天	外面	内面	(内面)	焼成	Fr. III	IZI/IX
72	甕	口径 残高	(21.5) 6.1	口縁端部は内傾する面をもつ。	□ヨコナデ ハケ(5本/cm)	ハケ→ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1~4) ◎		8
73	壺	残高	4.6	平底。器壁は厚い。	ナデ	指頭痕	淡褐色 淡褐色	石·長(1~3)金 赤粒 ◎		8
74	甑	残高	3.4	瓦質土器。把手部。	ナデ	_	灰色	密・金◎		
75	壺	口径残高		複合口縁壺。山形文を縦横沈線で充 填。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1~2)金◎		8
76	壺	底径 残高	(7.8) 4.8	わずかに上げ底。	ナデ・ミガキ <u></u>	ナデ→ミガキ	乳橙色 乳黄色	石・長(1~3) ◎		
77	高坏	残高	6.4	柱部に3条と4条の沈線文あり。	ミガキ→ナデ	ナデ(工具痕)	淡乳褐色 灰褐色	石·長(1~3)金 赤粒 ◎		
78	支脚	残高	7.0	中空。	タタキ	シボリ痕	淡乳橙褐色 茶褐色	石・長(1~2)金◎	黒斑	
79	瓦	残長厚さ	9.5 1.4	丸瓦。	細縄叩き →ナデ消し	布目痕 →ナデ消し	青灰色	密◎		

表 16 SR1出土遺物観察表 石製品

ſ.	番号	器 種	残存	材質		法	量			備	老	図版
ľ	笛ケ	谷 俚	9戈 行	171 頁	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		7/HI	45	凶加
	80	扁平片刃石斧	完形	緑色片岩	13.1	6.4	1.6	201.1	未成品			9
	81	砥石	約2/3	砂岩	10.0	4.9	3.2	220.7				9

表 17 SR1出土遺物観察表 金属製品

番号	器 種	残存	材質		法	量		備	考	図版
田力	11年 1生	72、行	1/1 貝	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	νн	79	
82	鉄滓	_	鉄	7.5	7.0	2.8	142.2			9
83	鉄滓	_	鉄	3.6	5.2	2.9	38.4			9
84	鉄滓	_	鉄	2.6	3.1	1.9	12.8			9

表 18 SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量	(cm)	形態・施文	別 外面	整内面	色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
85	坏蓋	口径残高		天井部と口縁部の境界に沈線状の凹 みあり。		回転ナデ	褐灰色 青灰色	密◎		
86	甕	口径残高	(23.3) 2.8	口縁端部は方形状に肥厚。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密◎		
87	壺	口径 残高	(18.8) 3.6	複合口縁壺。櫛描き波状文(7条2段)あり。	ハケ→ナデ	ナデョコナデ	橙褐色 橙褐色	石・長(1~3) ◎		
88	魙	底径 残高	4.7 2.3	平底。完形品。	ミガキ→ナデ (マメツ)	ハケ・ミガキ →ナデ	褐橙色 暗褐色	石・長(1~3)金◎	黒斑?	
89	支脚	残高	8.4	中空。	ナデ 指頭痕	ナデ	淡茶色 淡茶色	石·長(1~2)金 赤粒 ◎		

表 19 SK2出土遺物観察表 土製品

ſ	番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調	整	色調 (外面)	胎土	備考	図版
L	笛ケ	谷生	法量 (cm)	形態・旭文	外面	内面	巴神 (内面)	焼成	湘乡	凶版
	90	坏蓋	口径 (13.2) 残高 2.5	小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密◎		
	91	燕	口径 (22.0) 残高 4.1	外反口縁。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	回郷ヨコナデナデ	狭窄巴	石·長(1~2)金 赤粒 ◎		

表 20 SK3出土遺物観察表 土製品

100			T-/	四.水火 二.水山						
番号	器種	法量	(cm)	形態・施文	別 外面	整内面	色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
92	坏蓋	口径器高		扁平な天井部。天井部と口縁部の境界 は凹み、口縁端部は内傾する面をもつ。	(3)回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰黄褐色 灰色	密◎		9
93	坏蓋	口径残高		扁平な天井部。断面三角形状の稜をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。	図画転へラケズリ 回回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密◎		
94	甕	口径 残高	(24.8) 4.9	口縁端部は下方に肥厚。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密◎		
95	甕	残高	7.9	頸肩部片。大型品。	□ナデ ⊪平行叩き	□ナデ ハケ(15本/cm)剛円弧叩き	灰色灰色	密◎		
96	高坏	残高	10.3	中実。	ナデ (ミガキ痕)	ナデ(マメツ)	乳橙色 橙褐色	石·長(1~2) 赤粒 ◎		9

表 21 SK3出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材質	長さ (cm)	法 幅 (cm)	量 厚さ (cm)	重さ (g)	備	考	図版
97	敲石	ほぽ完形	砂岩	13.3	12.4	6.6	1761.1			9

表 22 S K 7 出土遺物観察表 土製品 (1)

1 4	2. 51(7) 四工度物就示式 工表面 (1)									
番号	器種	強 法量 (cm)		形態・施文		整	色調 (外面)	胎土	備考	図版
ш.,	HII JEE	154.75	(UIII)	7076. 762	外面	内面	一, (内面)	焼成	Vi O	<u></u>
98	坏身	口径 残高	(12.2) 4.3	たちあがり端部は内傾する段をなす。	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密◎		
99	坏身	口径 残高	(12.0) 3.7	たちあがり端部は丸い。	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密		
100	坏身	残高	2.6	受部は外方に伸びる。	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密◎		
101	高坏	底径 残高	(8.2) 4.5	脚柱部に透かしが1ヶ所以上あり。	回転ナデ (工具痕)	回転ナデ	灰色 灰色	密◎		
102	提瓶	口径 残高	(7.4) 3.2	外反口縁。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密◎		
103	提瓶	残高	16.2	体部片。	カキメ 回転ヘラケズリ	ナデ (指頭痕)	暗灰色 暗灰色	密◎	自然釉	9
104	壺	口径 残高	(17.0) 1.9	口縁部は上外方に屈曲。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密◎		
105	壺	残高	6.0	やや扁球形の胴部。	剛シ回転ナデ 剛シ回転ヘラケ ズリ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密◎		
106	甕	口径残高	(23.4) 4.1	口縁部は下外方に肥厚。	□ 回転ナデ 叩き→回転ナデ	ナデ・回転ナデ 叩き?	青灰色 青灰色	密◎		

SK7出土遺物観察表 土製品

(2)調整 色調 (内面) (外面) 胎土 図版 番号 器種 法量 (cm) 形態・施文 備考 外面 内面 焼成 青灰色 灰褐色 口径 残高 (25.7) 5.8 口縁部は長方形状に肥厚。 ナデ 107 甕 回転ナデ 9 石·長(1)金 赤粒 ◎ (16.6) 内湾口縁。口縁端部は内傾する面をも 3.4 つ。 ヨコナデ (マメツ) 淡乳褐色 褐黄色 口径 残高 マメツ (ハケ) 108 甕 □濁ヨコナデ ハケ(マメツ) 淡黄橙色 淡黄橙色 (21.0) 3.0 口径 残高 長(1)赤粒 口縁端面に凹線状の凹みあり。 シューノッ ミガキかハケ →ナデ 109 甕 □ハケ**→**ナデ 圓ハケ 褐黄色 褐黄色 ナデ 石·長(1~3)金 黒斑 110 甕 残高 6.0 外反口縁。 ヨコナデ (5~6本/cm) 石·長(1~2) 赤粒 ナデ ミガキ ミガキ(マメツ) ナデ 橙色 111 鉢 残高 2.7 脚付鉢。小片。 橙色 石·長(1~4)金 赤粒 ◎ 橙褐色 暗灰色 (6.0)112 甕 上げ底。 マメツ ナデ 黒斑 残高 3.4

表 23 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量	(cm)	形態・施文			色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
113	坏身	口径残高	(12.2) 2.9	たちあがりは内傾し、受部はやや外上 方向に伸びる。	同転生会		灰白色 灰白色	密◎	SP2	
114	坏身	口径残高	(13.0) 2.3	たちあがりは内傾し、受部はやや外上 方向に伸びる。受部端に沈線状の凹み あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密◎	SP15	
115	壺	残高	6.1	短頸壺の肩部。	カキメ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密◎	SP2 自然釉	
116	壺	底径 残高	8.4 4.2	わずかに上げ底。	ミガキ (マメツ)	ナデ (マメツ)	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~4)	SP5	

土製品 (1)表 24 包含層出土遺物観察表

番号	器種	法量	(cm)	形態・施文	調	整	色調 (外面)	胎土	備考	図版
田力	1071生	仏里	(CIII)	/// // // // // // // // // // // // //	外面	内面	(内面)	焼成	用与	凶ルス
117	坏蓋	口径 残高	(13.4) 1.1	天井部は屈曲部をもち、口縁部は下方 に屈曲する。	マメツ	マメツ	灰白色 淡黄色	密〇		
118	坏	口径 残高		口縁部はわずかに外反し、口縁端部は 尖り気味。	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密◎		
119	坏	底径 残高		底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	灰白色 灰白色	密〇		
120	坏	口径 底径 器高	(13.4) (8.4) 4.5	高台付の坏。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密◎	自然釉	10
121	Ш	口径 底径 器高	(18.5) (11.6) 3.7	平底。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は尖り気味。	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密◎		
122	高坏	口径 残高	(11.7) 3.6	無蓋高坏。坏部中位に凸線あり。	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密◎		10
123	高坏	底径 残高	(17.2) 2.3	脚端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	密◎	自然釉	10
124	鉢	口径残高	(24.4) 4.6	口縁端部は上内方に肥厚し、口縁端面に凹線状の凹みあり。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色灰色	密◎		
125	壺	口径残高		口縁部は外反し、口縁端部は尖り気味。	□回転ナデ ⊪平行叩き	□回転ナデ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	灰色灰色	密◎	自然釉	

(2)

包含層出土遺物観察表 土製品

調整 (外面) 胎土 番号 器種 形態・施文 色調 備考 図版 法量 (cm) 外面 内面 (内面) 焼成 (15.9)凸線1条と波状文(6~8本と4~5本) 灰白色 □径 回転ナデ 回転ナデ 126 壺 灰色 残高 3.7 灰白色 密◎ 口径 (11.9)127 壺 短頸壺。口縁端面はナデ凹む。 回転ナデ 回転ナデ 自然釉 灰白色 残高 2.4 灰白色 口径 密 (6.4)128 壺 短頸壺。口縁端部は尖り気味。 回転ナデ 回転ナデ 灰白色 残高 4.4 青灰色 密 壺 残高 短頸壺の頸胴部片。 回転ナデ 回転ナデ 129 3.8 青灰色 白灰色 130 壺 残高 11.3 長頸壺。頸部に沈線2条あり。 回転ナデ 回転ナデ 自然釉 白灰色 長頸壺の肩部小片。刺突文あり。赤焼回転ナデ 円弧叩き にぶい赤褐色 密 131 壺 残高 2.5 土器。 →回転ナデ 褐灰色 回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ 底径 (8.1)灰白色 壺 平底。円孔(径0.3cm)を看取。 132 回転ナデ 残高 3.5 灰白色 0 口径 (24.0)口縁端部は上方に拡張し、口縁端面に 回転ナデ 暗オリーブ灰色 密 甕 自然釉 10 133 オリーブ灰色 残高 7.5 沈線状の凹みあり。 ⊞円弧叩き 0 (11.2)磁器の段皿。口縁部は上外方に屈曲 胎土: 口径 施釉 施釉 透明釉 Ш 134 残高 し、口縁端部は丸い。 灰白色 口径 (9.9)磁器の段皿。口縁部は外傾し、端部は 密◎ 胎土: 施釉 135 \coprod 施釉 透明釉 灰色 残高 1.6 肥前系陶器の段皿。口縁部は外傾し、 ◎施釉 密〇 □径 (11.9)胎士: 136 ${\rm I\hspace{-.1em}I\hspace{-.1em}I}.$ 施釉 灰白色釉 端部は丸い。 ⑥回転ナデ 残高 2.7 灰黄褐色 口径 (12.2)回転ナデ 長(1) 137 坏 底径 (7.0)平底。口縁端部は尖り気味。 回転ナデ ⑥回転ヘラ切り 橙色 器高 3.0 浅黄橙色 底径 (6.6)ヨコナデ 石・長(1~2) 138 椀 内黒椀。貼付輪高台。 ナデ 褐灰色 残高 2.1 ナデ 底径 残高 (6.8)ヨコナデ 暗灰色 黒褐色 石·長(1) 椀 内黒椀。貼付輪高台。 ナデ 139 コー*)* ナデ 16 ロマメツ □マメツ(ハケ) 剛ナデ 口径 (20.2)外反口縁。口縁端部は尖り気味に丸 橙色 石・長(1~5) 140 甕 にぶい黄橙色 残高 5.0 (5本/cm) ハケ 灰黄褐色 石·長(1~2) ナデ→ハケ 141 甕 残高 10.5 肩部片。 (6~7本/cm) にぶい黄橙色 にぶい橙色 把手先端部は面取りされる。韓式系土 長(1)金·赤粒 ナデ 甑 残高 ナデ 10 142 4.4 にぶい橙色 淡黄色 石・長(1~4) マメツ 残高 8.0 底部片。 ナデ 143 土釜 にぶい橙色 石·長(1~2) ナデ 土釜 残高 脚部片。断面三角形。 にぶい橙色 144 8.5 ロマメツ 口径 (19.2)にぶい黄橙色 石(1~2) 145 甕 外反口縁。口縁端部は丸い。 マメツ(ハケ) にぶい黄橙色 残高 無頸壺。口縁部に円孔(径0.3cm)2ケを 回郷ヨコナデ 橙色 口径 (9.0)石・長(1~3) 壶 10 146 看取。 残高 4.6 ナデ 橙色

	包含層出土遺物観察表 土製品 (3)												
番号	器種	景種 法量 (cm)		形態・施文		整	色調 (外面)	胎土	備考	図版			
ш	ин кас	124.35	(0111)	715761 71830	外面	内面	(内面)	焼成	P10 3	1-1/1/2			
147	壺	残高	4.4	貼付凸帯。凸帯上に刺突文あり。	ナデ・ヨコナデ (マメツ)	ナデ (マメツ)	灰白色 灰白色	石・長(1~3)					
148	壺	残高	7.7	胴部。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 浅黄橙色	石・長(1~2) ◎					
149	器台	残高	7.7	沈線文3条と円孔(径0.7~0.9cm)2ヶを 看取。	ハケ(8本/cm)	板ナデ→ナデ ハケ(8本/cm)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ◎					
150	支脚	底径 器高	(8.6) 5.2	1/2の残存。	ナデ	_	にぶい橙色	石・長(1~4)	黒斑				

表 25 包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材質	長さ (cm)	法 幅 (cm)	量 厚さ (cm)	重さ (g)		備	考	図版
151	石帯	約3/4	粘板岩	4.1	4.1	0.9	24.9				10
152	石庖丁	完形	緑色片岩	12.5	5.8	1.3	132.5	未成品			10
153	砥石	約1/2	石英粗面岩	9.0	4.7	3.5	253.9				10
154	砥石	約1/2	砂岩	9.6	6.3	7.4	453.3				10

表 26 包含層出土遺物観察表 金属製品

番号	器 種	残存	材質	法 量 長さ (cm) 幅 (cm) 厚さ (cm) 重さ (g)				備	図版	
				長さ (cm)	中田 (CIII)	厚さ (cm)	重さ (g)			
155	釘	破片	鉄	5.0	1.8	0.9	11.0			

表 27 地点不明出土遺物観察表 土製品

12 4	20 地流年为国工遗物就乐公 工农品											
番号	器種	法量	(cm)	形態・施文	新 外面	調整 内面		胎土 焼成	備考	図版		
156	雞	口径残高	(21.6) 4.9	内湾口縁。口縁端部は内傾。口縁部中 位に稜あり。	ヨコナデ ハケ・ナデ	ハケ→ナデ	橙色 橙色	石・長(1~3) ◎				
157	カマド	底径 残高	(30.8) 7.5	裾端部は平坦面をなす。	ナデ・ハケ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~6) ◎		10		
158	坏	底径 残高	(10.0) 1.3	高台坏。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密◎				
159	Ш	口径 底径 器高	(13.8) (11.5) 2.1	平底。口縁部は外傾し、口縁端部は丸い。	マメツ(ナデ)	マメツ	灰白色 灰白色	密△				
160	壺	残高	3.7	長頸壺。肩部と体部の境界は明瞭。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密◎				
161	漉	口径残高	(23.0) 5.8	火ぶくれ痕あり。	①郷回転ナデ カキメ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰色	密・金◎	自然釉	10		

表 28 地点不明出土遺物観察表 金属製品

番号	器 種	残 存	材質	長さ (cm)	法 幅 (cm)	量 厚さ (cm)	重さ (g)	備	ā	考	図版
162	鉄滓	_	鉄	2.7	2.4	1.7	8.4				

第4章 樟味高木遺跡 15 次調查

1. 調査の経緯

(1)調査に至る経緯

2006 (平成 18) 年 5 月 18 日、浅川ハツコ氏より松山市樽味二丁目 90 - 2 地内における宅地開発 に伴う埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化財課(以下、文化財課)に提出された。

確認願が提出された申請地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地『No.81 樟味遺物包含地』内に所在する。申請地周辺には、樟味高木遺跡($1 \sim 14$ 次調査)、樟味立添遺跡($1 \sim 4$ 次調査)、樟味四反地遺跡($1 \sim 19$ 次調査)、樟味遺跡(愛媛大学構内)などがあり、縄文時代晩期から中世までの集落関連遺構や遺物が多数確認されている。

これらのことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)は、申請地内における埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、2006(平成18)年5月31日に試掘調査を実施することとなった。調査の結果、竪穴住居や土坑、溝、柱穴のほか、弥生土器や土師器、須恵器を含む遺物包含層を検出した。

2007 (平成 19) 年 10 月 15 日には同じ申請地内において、みどり建設興業株式会社代表取締役濱田憲史郎氏より共同住宅建築に伴う埋蔵文化財の確認願が文化財課に提出された。文化財課と申請者の両者は遺跡の取り扱いについての協議を重ね、共同住宅建築によって消失する遺跡に対し記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は申請者と埋文センターが委託契約を結び、申請地内における弥生時代から中世までの集 落構造解明を主目的とし、文化財課の指導のもと埋文センターが主体となり、2007(平成19)年12 月4日より開始した。

(2)調査の経緯

調査は、2007 (平成 19) 年 12 月 4 日から 2008 (平成 20) 年 1 月 31 日まで屋外調査を実施した。 2007 (平成 19) 年 12 月 4 日、調査を開始する。重機の使用により表土の掘削を行い、12 月 5 日、第 W層上面にて遺構検出作業を行う。調査では竪穴住居や土坑、柱穴を確認する。12 月 19 日、遺構検出状況写真を撮影し、遺構の掘り下げや遺構・遺物の測量を行う。2008 (平成 20) 年 1 月 28 日、ローリングタワーを用いて遺構完掘状況写真を撮影し、同日、現地説明会を行う。 1 月 29 日、発掘用具の撤去を行い、1 月 31 日に屋外調査を終了する。

(3)調査組織

所 在 地:松山市樽味二丁目90-2の一部

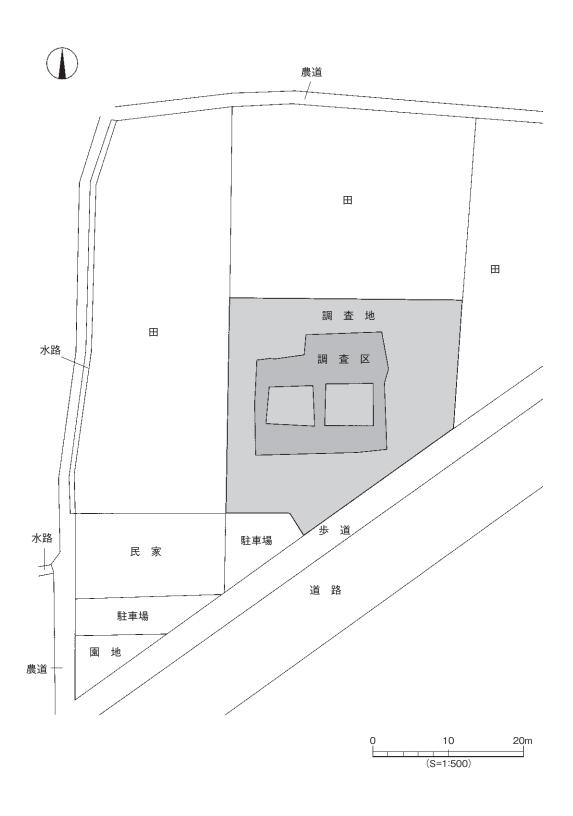
調査期間:2007 (平成19) 年12月4日~2008 (平成20) 年1月31日

調査面積:169.5 m²

調査主体:松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

調査担当:水本完児、宮内慎一



第28図 調査地測量図

2. 層 位

(1) 基本層位 (第29·30図)

調査地は松山平野北東部、石手川左岸の標高 42.50 ~ 42.85 mに立地する。調査以前は水田として利用されていた。調査で確認した土層は、以下の四種類である。

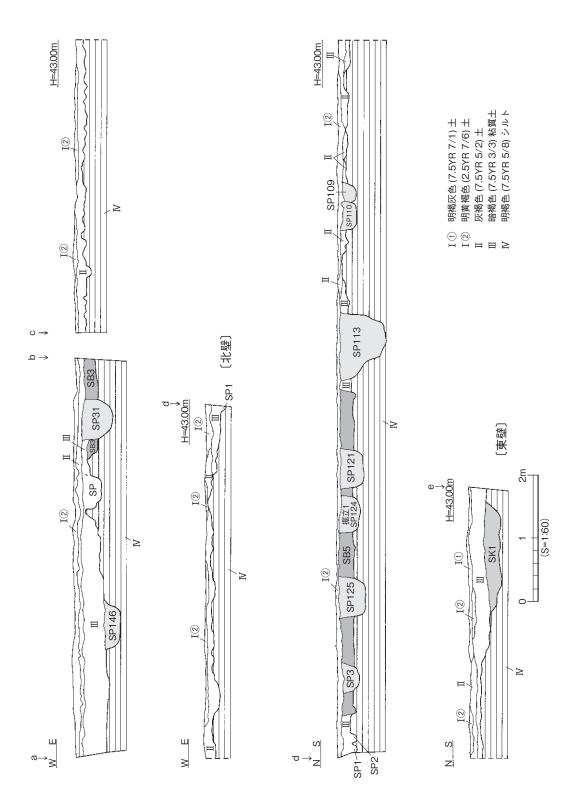
- Ⅰ層-水田耕作に伴う耕作土で、土色・土質の違いにより2つに分層される。
 - I①層:明褐灰色(7.5YR 7/1) 土で調査区南側と南東部にみられ、層厚3~10 cmを測る。
 - I②層:明黄褐色(2.5YR 7/6)土で調査区南東部を除く地域にみられ、層厚 2~15 cmを測る。
- Ⅱ層-灰褐色 (7.5YR 5/2) 土で調査区ほぼ全域にみられ、層厚 2 ~ 30 cmを測る。調査壁の土層観察により、本層上面にて柱穴を確認した。遺物は、本層中より古代の土師器片や須恵器片が出土した。
- Ⅲ層-暗褐色 (7.5YR 3/3) を呈する粘質土で調査区ほぼ全域にみられ、層厚 5 ~ 43 cmを測る。なお、本層は調査区北東部から南西部に向けて傾斜堆積をなす。調査壁の土層観察により、本層上面から竪穴住居や柱穴等が掘削されていることを確認した。遺物は、本層中より弥生土器や土師器、須恵器が出土した。
- IV層 明褐色 (7.5YR 5/8) を呈するシルト層で本層上面が調査における最終遺構検出面である。 なお、調査壁の土層観察により第IV層上面にて検出した遺構は本来、本層中または本層上面 から掘削された可能性が高いものばかりである。

検出した遺構や出土遺物より、II層は古代、III層は古墳時代までに堆積したものと推測される。なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリットに分けた。グリットは北から南へ $A \cdot B \cdot C \cdot D \cdot E$ 、西から東へ $1 \cdot 2 \cdot \cdot \cdot \cdot 4$ とし、 $A \cdot 1 \cdot A \cdot 2 \cdot \cdot \cdot \cdot \cdot E \cdot 4$ といったグリット名を付した。グリットは、遺構の位置表示や遺物の取り上げに利用した。

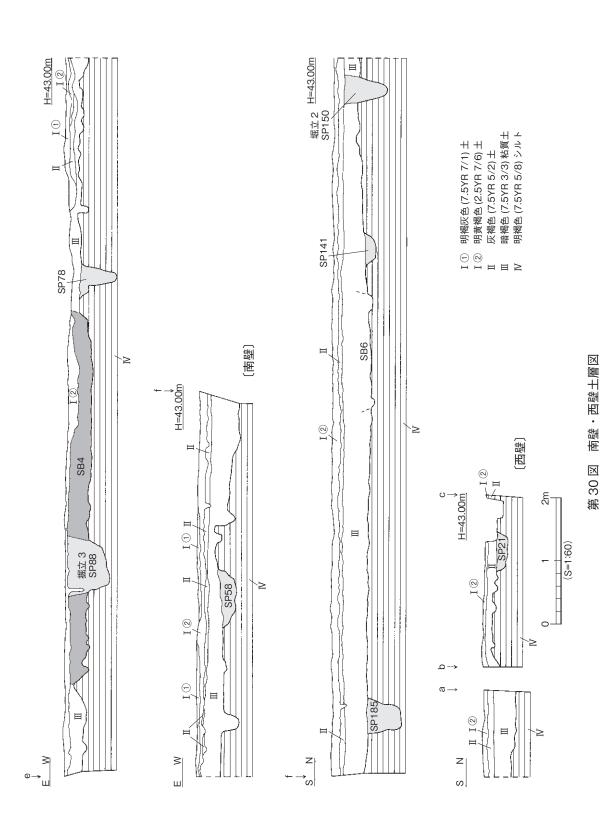
(2) 検出遺構・遺物(第31図)

調査では、竪穴住居 6 棟〔S B 1 : 古墳中期後半、S B 2 : 古墳後期後半、S B 3 : 弥生末、S B 4 : 古墳後期後半以前、S B 5 : 古墳中期後半以前、S B 6 : 古墳後期後半以前〕、掘立柱建物 3 棟〔掘立 1 : 古墳中期後半以降、掘立 2 : 古墳後期中葉以降、掘立 3 : 古墳後期末以降〕、土坑 2 基〔S K 1 · 2 : 古墳以前〕、柱穴 141 基を検出した。

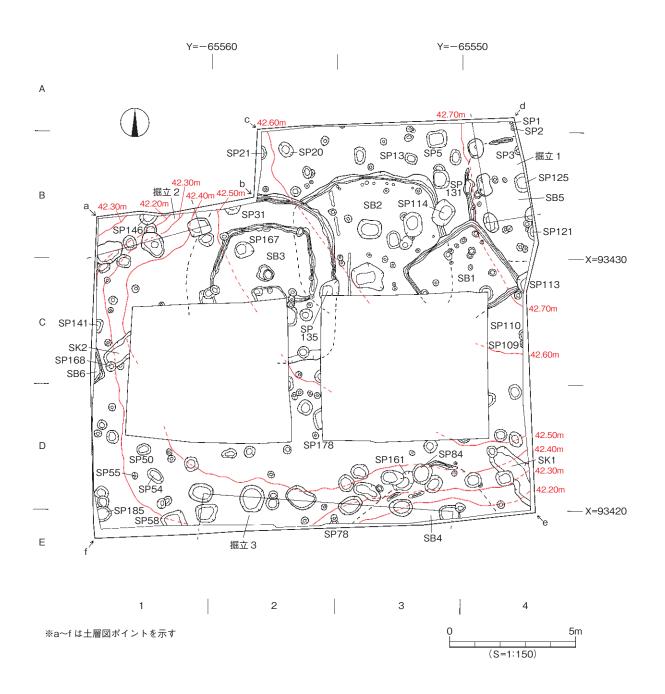
遺物は遺構や包含層及び重機掘削時に出土したもので、弥生土器(前期~後期)、土師器(古墳~中世)、須恵器(古墳~古代)、瓦質土器、軟質土器、石器、鉄滓、ガラス玉である。なお、包含層中より完形の匙形土製品が1点出土している。遺物の出土量は、収納箱(44×60×14 cm)約10箱分である。



第29 図 北壁・東壁土層図



- 55 -



第31図 遺構配置図

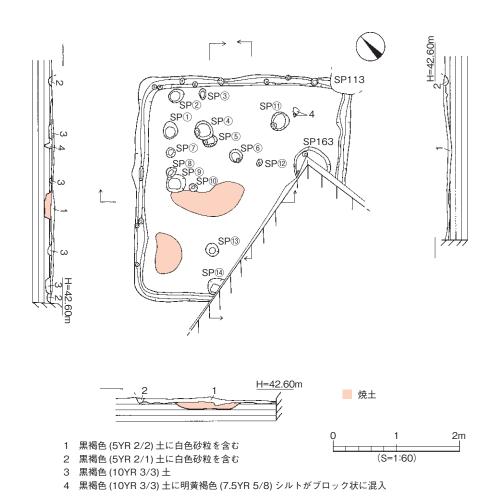
3. 遺構と遺物

調査では、弥生時代から中世までの遺構と遺物を確認した。検出した遺構は、竪穴住居 6 棟(弥生時代~古墳時代)、掘立柱建物 3 棟(古墳時代)、土坑 2 基(古墳時代)、柱穴 141 基(掘立柱建物柱穴 20 基を含む)である。

(1) 竪穴住居

SB1 (第32図、図版13)

調査区北東部B 3~C 4区に位置し、住居南東隅はS P 113に切られ、住居北西部はS B 2 と重複し、住居南西側は調査区外へ続く。平面形態は方形を呈し、規模は南北長 3.54 m、東西長 3.40 m、壁高は 6 cmを測る。住居埋土は黒褐色土を基調とし、白色砂粒や明黄褐色シルトが部分的に混入するものである。内部施設は、周壁溝と柱穴を検出した。周壁溝は住居壁体に沿って全周し、幅 $10 \sim 20$ cm、深さ $4.5 \sim 15$ cmを測る。溝内には径 $5 \sim 8$ cm、深さ $3 \sim 5$ cm大の小ピットが点在しており、杭痕跡と考えられる。住居床面にて大小 14 基のピットを検出したが、主柱穴は特定できなかった。また、住居中央部と南西部の床面にて、焼土(厚さ $3 \sim 10$ cm)を検出した。遺物は S B 1 埋土中より弥生土器片や土師器片、須恵器片が散在して出土した。

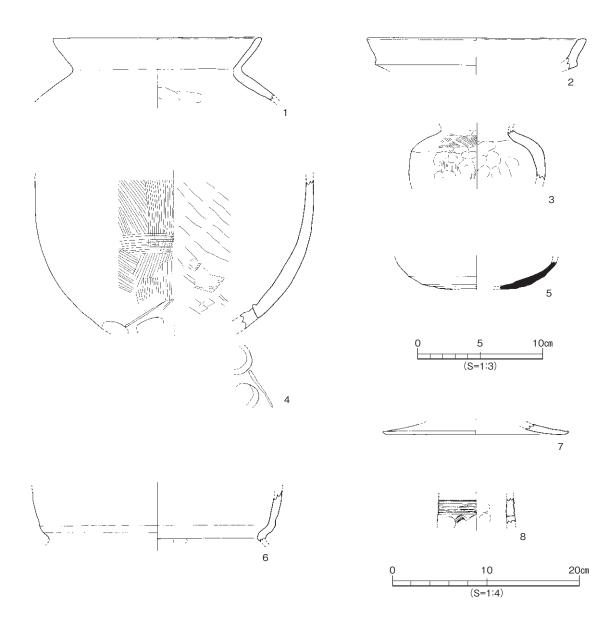


第 32 図 S B 1 測量図

出土遺物 (第33 図、図版17)

1~4は土師器である。1は甕形土器で口縁部は内湾し、口縁端部はわずかに内傾する。2は壺形土器の口縁部片で、口縁端部は平坦面をなす。3は壺形土器の胴部片で、内外面共に指頭痕を顕著に残す。4は甑形土器で、推定直径2cmを測る円孔2ケを看取する。また、胴下部には幅1mm程度の線刻がみられる。外面はハケメ調整、内面には板状工具によるナナメ方向のナデ調整を施す。5は須恵器坏身片で、底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。6~8は弥生土器。6は出雲系の鉢形土器で、色調は浅黄橙色を呈する。7は脚付鉢の脚部片で、裾端部は尖り気味に仕上げる。8は器台形土器の脚部片で、ヘラ描き沈線文6条と推定直径1.5cm大の円孔を穿つ。

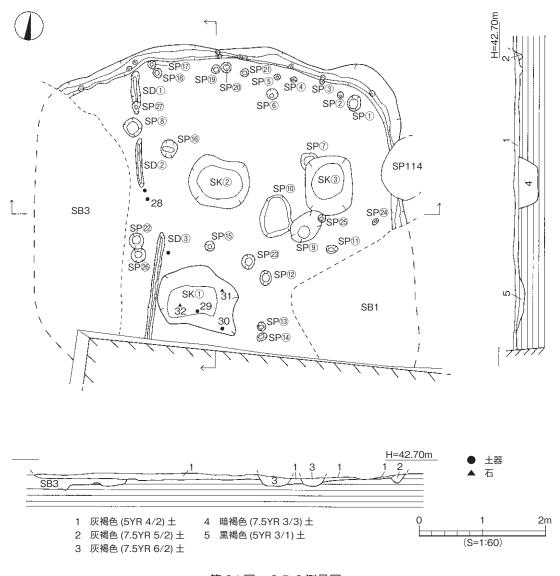
時期:出土した土師器・須恵器の特徴より、SB1の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半、5世紀後半とする。



第33図 SB1出土遺物実測図

SB2 (第34図、図版14·15)

調査区北東部 B 2~ C 3 区に位置し、住居西側は S B 3、南東部は S B 1 と重複し、住居東側壁体は S P 114 に切られ、住居南側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長 5.52 m、南北検出長 4.90 m、壁高は 10 cmを測る。住居埋土は、灰褐色土である。内部施設は周壁溝や土坑、溝、小ピットを検出した。周壁溝は住居壁体に沿って検出され、幅 10~ 40 cm、深さ 7~ 22 cmを測り、埋土は住居埋土より色調の明るい灰褐色土である。土坑は、住居床面にて 3 基を検出した。 S K①は不整楕円形を呈する土坑で、規模は長径 1.46 m、短径 0.85 m、深さ 10 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑北半部壁体は緩やかに立ち上がる。土坑埋土は、黒褐色土単層である。 S K②は楕円形土坑で、規模は長径 0.96 m、短径 0.77 m、深さ 33 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。 S K③は楕円形土坑で、規模は長径 0.98 m、短径 0.97 m、深さ 29 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、土坑北半部壁体は緩やかに立ち上がる。土坑埋土は、S K②と同様の暗褐色土単層である。このほか、住居西側では南北方向の溝 3条(S D



第34図 SB2測量図

①~③)を検出した。溝幅8~12 cm、深さ3~5 cmを測り、埋土は住居埋土と同様の灰褐色土である。これら3条の溝は、住居内を区画するための仕切り溝と推測される。

これらの遺構のほかに、住居床面にて大小 26 基のピットを検出した。このうち、S P ⑨・⑩は断面観察より住居埋没後に掘削されたピットである。その他のピット埋土は、すべて住居埋土と同様の 灰褐色土であるが、主柱穴を特定することはできなかった。

遺物は住居埋土中より弥生土器片や土師器片、須恵器片が混在して出土した。しかしながら、SB2はSB1やSB3と重複しており、弥生時代や古墳時代中期に時期比定される土器類は、本来SB1やSB3に帰属する遺物と考えられる。住居床面検出のSK①からは、弥生時代末に時期比定される土器(29・30)のほかに、砥石2点(31・32)が出土した。遺物の出土状況や埋土等から、SK①はSB2構築以前の遺構と考えられる。また、SK②からは土師器椀(33)や弥生土器片、SK③からは須恵器坏身片(36)や弥生土器片が混在して出土した。出土遺物や検出状況から、SK②・③はSB2に伴う可能性が高い遺構である。このほか、SP®からは須恵器坏身片(15)が出土している。

出土遺物 (第 35 ~ 37 図、図版 17)

1) SB2埋土出土品 (9~28)

 $9 \sim 12$ は土師器。 $9 \cdot 10$ は甕形土器で、9 の口縁端部は内側に肥厚し、頸部に幅 1 mm大の線刻を施す。 胴部外面はハケメ調整、内面には指頭痕が顕著に残る。10 の口縁部は内湾し、端部は丸く仕上げる。 11 は高坏形土器の脚部で、坏脚部の接合は指込技法による。外面にはタテ方向のヘラミガキを施し、色調は灰白色を呈する。12 は甑形土器で口縁部はわずかに外反し、外面は粗いハケメ調整、内面は ハケメ調整後ヨコ方向のヘラケズリを施す。 $13 \sim 16$ は須恵器。13 は坏蓋で、断面三角形状の鋭い稜をもつ。 $14 \sim 16$ は坏身で、15 のたちあがり端部は丸く仕上げる。なお、15 の受部には焼成の際に付着した別個体の破片がみられる。

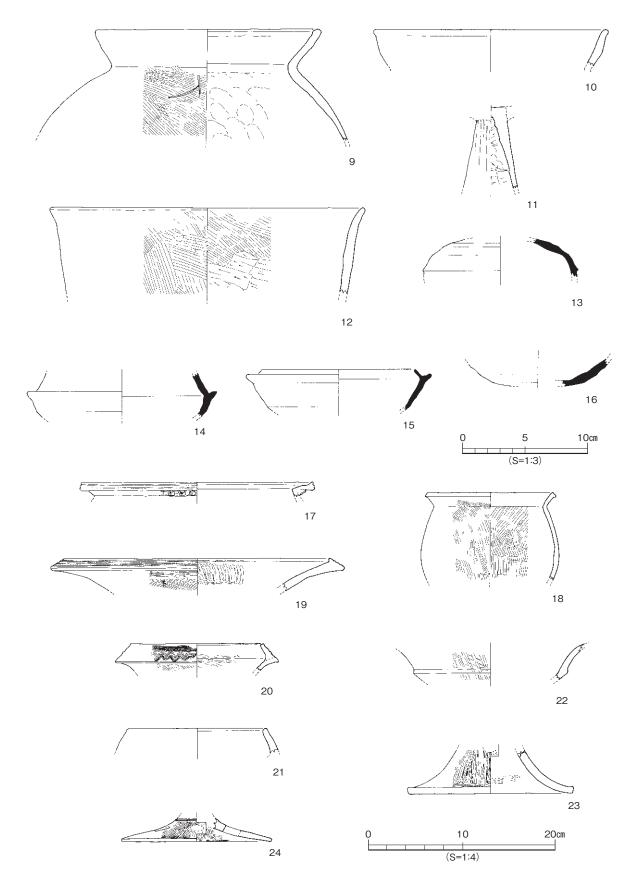
17~28 は弥生土器。17・18 は甕形土器で、17 は口縁端面に凹線文2条、頸部には凸帯を貼付け、凸帯上に刻目を施す。18 の口縁部は「く」の字状を呈し、内外面共にハケメ調整を施す。19~21 は壺形土器。19 は広口壺で口縁端面に凹線文4条を施し、口縁部内面には細かなヘラミガキを施す。20・21 は複合口縁壺で口縁端部は内傾し、20 は口縁部に櫛描き波状文を施す。22・23 は高坏形土器で、23 は径1.6 cm大の円孔を看取する。22・23 共に、外面には丁寧なヘラミガキを施す。24 は脚付鉢の脚部で、径1.7 cm大の円孔2 ケを看取する。内外面には、丁寧なヘラミガキを施す。25 は器台形土器の柱部片で、径1.7 cm大の円孔と櫛描き沈線文5条を施す。26 は支脚形土器で受部上面は凹み、脚部は中空となる。27 は甕形土器、28 は鉢形土器の底部である。27 は平底で、外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。28 は外面にハケメ調整、内面には板状工具によるナデ調整を施す。

2) SK①出土品 (29~32)

29・30 は弥生土器。29 は広口壺の口縁部片で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。30 は鉢形土器の底部で、底部外面には指頭痕が顕著に残る。31・32 は砂岩製の砥石で31 は1面の砥面をもち、側面は一部火を受けている。32 は2面の砥面をもち、部分的に欠損している。

3) SK②出土品(33~35)

33 は土師器の椀形土器で体部は内湾し、体部下半部から底部の外面には板状工具によるナデを施す。34·35 は弥生土器の高坏形土器。34 は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に櫛描き波状文を施す。35 は口縁部が外反し、外面にはハケメ調整後にヘラミガキを加える。

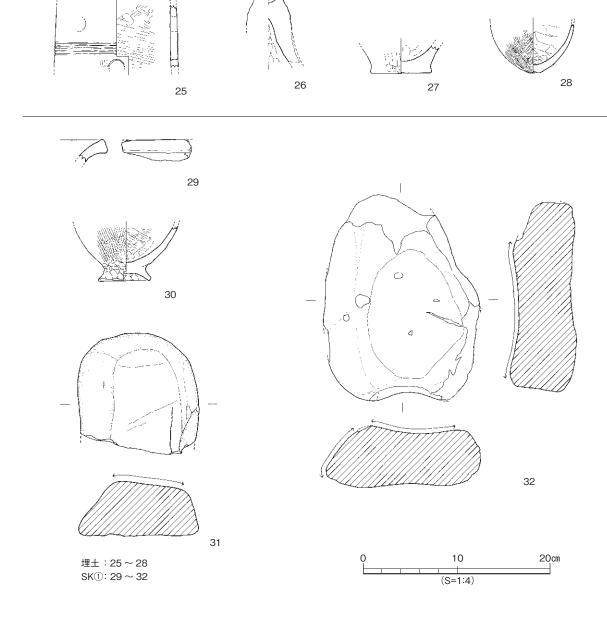


第35図 SB2出土遺物実測図(1)

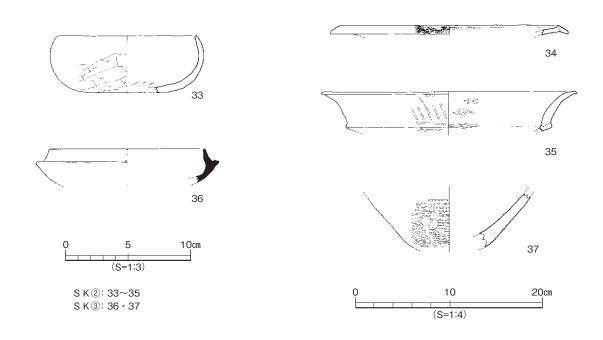
4) SK③出土品 (36·37)

36 は須恵器坏身片で、たちあがり端部は尖り気味に仕上げる。37 は弥生土器の甕形土器で、外面に細かなタタキ調整を施す。

時期:出土した土師器や須恵器の特徴より、SB2の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、6世紀後半とする。



第36図 SB2出土遺物実測図(2)



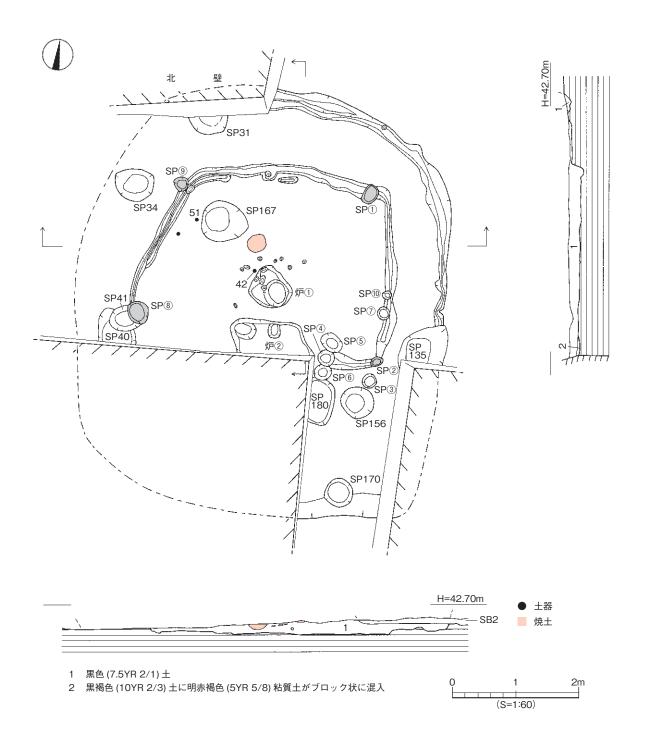
第37図 SB2出土遺物実測図(3)

SB3 (第38~40 図、図版15)

調査区中央部北側 B $1 \sim$ C 2 区に位置し、住居東側は S P 135 に切られ、住居南側や北側は調査区外に続き、西側壁体は消失している。調査壁の土層観察により、S B 3 上面は第 \square 層が覆う。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は東西長 6.70 m、南北検出長 5.70 m、壁高は 26 cmを測る。住居埋土は、黒色土単層である。住居床面には段差がみられ、住居壁体より内側に幅 $0.8 \sim 1.0$ m、高さ 15 cm程度の高床部を付設している。なお、高床部の内側には幅 $10 \sim 25$ cm、深さ 5 cm程度の溝が二重に巡る。さらに、住居壁体沿いには幅 $10 \sim 40$ cm、深さ 8 cm程度の溝が巡っており、北側壁体付近には溝の重複する箇所が見られる。溝の検出状況より、S B 3 は建替えが施された住居と考えられる。

内部施設は、主柱穴と炉を検出した。主柱穴は $SP1\cdot 2\cdot 8\cdot 9$ の4本を検出した。柱穴は高床部内側に巡る溝の埋没後に掘削されており、柱穴掘り方埋土は黒褐色土である。柱穴規模は径 $16\sim 38~cm$ 、深さ $28\sim 48~cm$ を測る。なお、柱穴の配置から、本来は5本柱構造であったと思われる。

住居中央部にて、2基の炉を検出した。炉①は不整楕円形を呈し、規模は長径 0.68 m、短径 0.60 m、深さ 24 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、二段掘り構造となっている。埋土は二種類あり、上層は暗褐色土に鈍い褐色砂や焼土、炭化物が混入するものであり、下層は黒褐色土である。炉基底面には径5~13 cm、深さ 3 cm程度の小ピットが点在している。炉内からは径3~20 cm、厚さ2~6 cm大の円礫が数点出土したほか、土器片が少量出土した。なお、炉①周辺には径3~7 cm、深さ2~4 cm大の小ピットが点在している。炉②は不整長方形状を呈し、規模は東西長 1.30 m、南北検出長 0.53 m、深さ 10 cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土である。なお、埋土中には明赤褐色粘質土のブロックや炭化物のほか、径1~3 cm大の小礫が少量含まれている。炉基底面には2箇所で深さ3 cm程度の凹みを検出したが、埋土は炉埋土と同様の黒褐色土である。炉②からは、土器の出土はない。



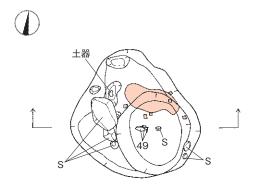
第38図 SB3測量図

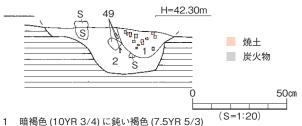
このほか、住居床面にて15基の柱穴(SP ③~⑦・⑩、SP31・34・40・41・135・156・ 167・170・180)を検出した。このうち、6基 の柱穴(SP③~⑦・⑩)の埋土は黒褐色土で あり、SP135は褐色土、その他の柱穴埋土は 暗褐色土である。

遺物は住居埋土中より弥生土器片や土師器片のほか、鉄滓やガラス小玉が出土した。また、SP⑦からは壺形土器の口縁部片(44)が出土している。なお、SB3はSB2と重複していることから、SB3で取り上げた土師器や須恵器は本来、SB2に帰属する可能性が高い遺物である。

出土遺物 (第 41 · 42 図、図版 18)

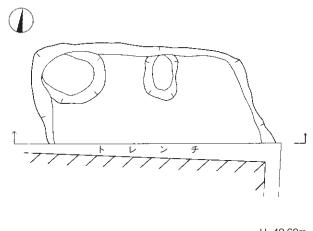
38~58 は弥生土器。38~43 は甕形土器で 38~40は「く」の字状口縁を呈し、口縁端部 は「コ」字状に仕上げる。41 は逆「L」字状 口縁で頸部に凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を 施す。42 は小型品で胴下部外面にはタタキ調 整がみられ、口縁部及び胴下部内面はヨコ方向 のハケメ調整を施す。43は胴部片で、外面に ヨコ方向の細かなタタキ調整がみられる。44 ~ 47 は壺形土器。44・45 は広口壺の口縁部で、 内外面共にハケメ調整を施す。46は頸部片で、 刺突文を1列施す。47は5×5cmを測る肩部 片で、ヘラ状工具による線刻がみられる(記号 か)。48~51は鉢形土器。48·49は直口口縁で、 口縁端部は丸く仕上げる。48の外面にはシワ 状の凹みが多数みられ、底部は平底となる。内 面にはハケメ調整を施し、底部内面には黒斑が 残る。50 は推定口径 33.2 cmを測る大型品で口 縁部は外反し、外面には粗いタタキ調整がみら れ、内面は細かなハケメ調整を施す。なお、胴 部内面には煤が付着している。51 は完形の小 型品で、口径 7.3 cm、底径 2.8 cm、器高 3.0 cmを 測る。色調は茶褐色を呈し、内外面には指頭痕 が顕著に残る。52は高坏形土器の坏部小片で、 外面はハケメ調整後にヘラミガキを施し、内面

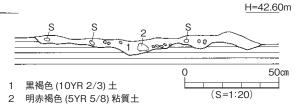




- 暗褐色 (10YR 3/4) に鈍い褐色 (7.5YR 5/3) 砂が少量混入〔焼土・炭化物含む〕
- 2 黒褐色 (10YR 2/3) 土

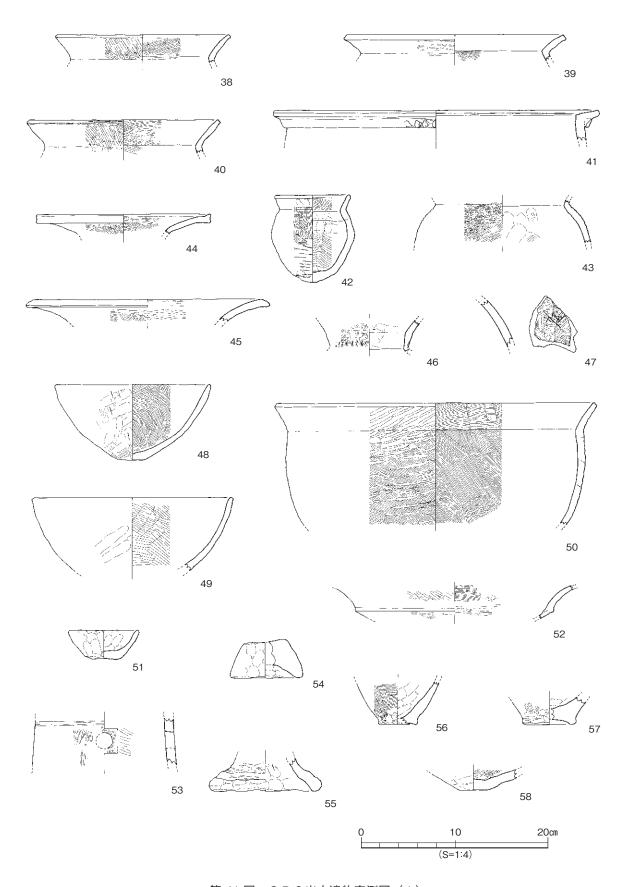
第39図 SB3炉①測量図





炭化物

第40図 SB3炉②測量図

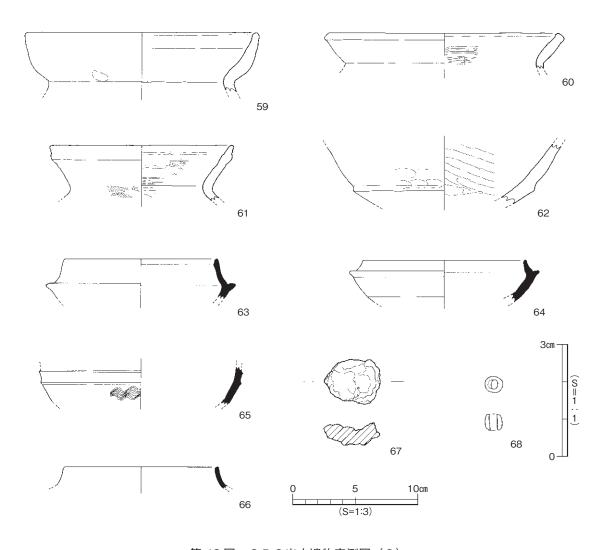


第41図 SB3出土遺物実測図(1)

はヨコ方向の細かなハケメ調整($14 \sim 15$ 本/cm)を施す。53 は器台形土器の柱部片で、沈線文 2 を径 1.7 cm大の円孔を看取する。 $54\cdot 55$ は支脚形土器で、54 は受部がやや凹み、外面には指頭痕が残る。55 は脚部片で外面には工具痕、内面はシボリ痕を残す。 $56\cdot 57$ は甕形土器、58 は鉢形土器の底部である。 $56\cdot 57$ は上げ底を呈し、58 の内面にはクモの巣状のハケメ調整を施す。

59~62 は土師器。59・60 は甕形土器で口縁部は内湾し、59の口縁端部は内傾する面をもち60 は内方にやや肥厚する。61 は壺形土器で、口縁部外面に沈線状の凹みが巡る。色調は灰白色を呈する。62 は高坏形土器の坏部で、器壁は厚い。63~66 は須恵器。63・64 は坏身片で63 のたちあがり端部には沈線状の凹みが巡り、64 はたちあがり端部を丸く仕上げる。65 は無蓋高坏の坏部小片で、2条の凸線と波状文を施す。66 は短頸壺の口縁部片で、口縁端部は丸く仕上げる。67 は鉄滓で、重量25.04 gを測る。68 はガラス製の小玉で、直径 0.47 cm、厚さ 0.42 cmを測り、色調は青緑色を呈する。

時期:住居埋土や炉①から出土した弥生土器の特徴より、SB3の廃棄・埋没時期は弥生時代末とする。



第42図 SB3出土遺物実測図(2)

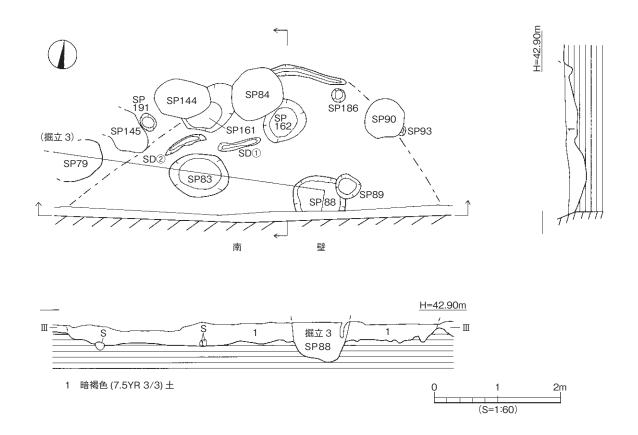
SB4 (第43図)

調査区南東部D3~E4区に位置し、住居南側は調査区外に続く。平面精査では周壁溝の一部のみの検出であるが、調査壁の土層観察により竪穴住居と判断した。なお、SB4は掘立3(古墳後期末)に先行する遺構である。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.55 m、南北検出長3.35 m、壁高は13 cmを測る。住居埋土は、第皿層と同様の暗褐色土単層である。周壁溝は住居北側で検出され、幅10~15 cm、深さ8~10 cmを測り、埋土は住居埋土と同様の暗褐色土である。また、住居床面にて2条の溝(SD①・②)を検出した。規模は幅8~12 cm、深さ3~5 cmを測り、埋土は住居埋土と同様である。住居内からは、遺物は出土していない。

時期:出土遺物がなく時期特定は困難であるが掘立3に先行することから、概ね古墳時代後期後半、6世紀後半以前とする。

SB5 (第44 図、図版16)

調査区北東部B・C4区に位置し、住居東側は調査区外に続く。平面精査では周壁溝の一部のみの検出であるが、調査壁の土層観察により竪穴住居と判断した。なお、SB5は掘立1やSB1に先行する遺構である。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長5.00 m、東西検出長2.50 m、壁高は3 cmを測る。住居埋土は、褐灰色土単層である。周壁溝は住居北西部で検出され、幅10~40 cm、深さ6~10 cmを測り、埋土は住居埋土と同様の褐灰色土である。住居床面にて大小



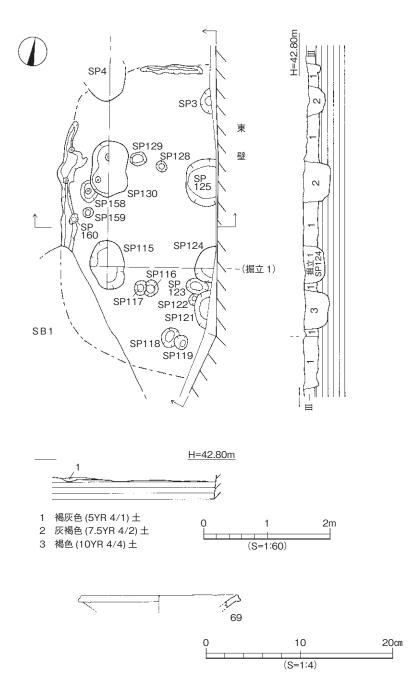
第43図 SB4測量図

10 基の柱穴を検出したが、主柱穴は特定できなかった。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。図化しうるものを1点掲載した。

出土遺物 (第44図)

69 は弥生土器の甕形土器。口縁部の小片で、口縁端面はナデ凹む。

時期:出土遺物が僅少で時期特定は難しいがSB1に先行することから、概ね古墳時代中期後半、5世紀後半以前とする。

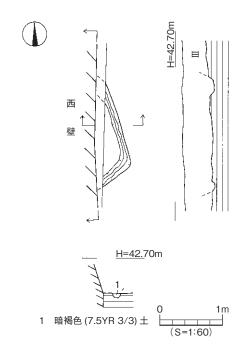


第44図 SB5測量図・出土遺物実測図

SB6 (第45図)

調査区西側 C・D 1 区に位置し、住居西側は調査区外に続く。平面精査では周壁溝のみの検出であるが、調査壁の土層観察により竪穴住居と判断した。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長 1.40 m、東西検出長 0.58 mを測る。住居埋土は、第皿層と同様の暗褐色土単層である。周壁溝は幅 10 ~ 15 cm、深さ 6 ~ 10 cmを測り、埋土は住居埋土と同様の暗褐色土である。住居内からは、遺物は出土していない。

時期:出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土や検出状況がSB4と酷似することから、概ね古墳時代後期後半、6世紀後半以前とする。



第45図 SB6測量図

(2) 掘立柱建物

掘立1 (第46 図、図版16)

調査区北東部 $A \cdot B$ 4 区に位置し、建物東側は調査区外に続く。南北 2 間、東西 1 間以上の建物址で、4 基の柱穴(S P 4 · 115 · 124 · 130)で構成される。建物規模は南北検出長 3.70 m、東西検出長 1.98 m、柱穴間隔は $1.50 \sim 1.60$ mである。建物を構成する各柱穴の平面形態は円~楕円形を呈し、柱穴掘り方規模は径 30 \sim 90 cm、深さ 5 \sim 20 cmを測る。柱穴掘り方埋土は、灰褐色土に白色砂粒が混入するものである。柱痕は 2 基の柱穴(S P 4 · 130)で検出され、規模は径 $10 \sim 17$ cm、深さ $11 \sim 15$ cmを測る。柱痕埋土は、柱穴掘り方埋土より色調の暗い灰褐色土である。遺物は柱穴掘り方埋土中より、少量の土師器片と須恵器片が出土した。

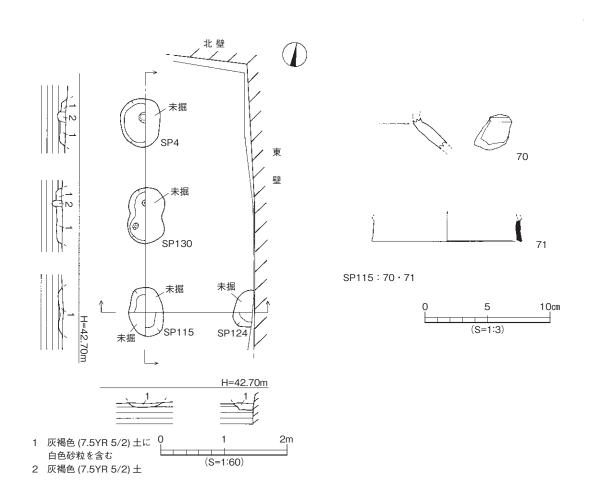
出土遺物 (第46図)

70・71 は S P 115 出土品。70 は土師器の甕形土器。肩部の小片で、頸部内面には明瞭な稜をもつ。 71 は須恵器坏蓋の小片で、口縁端部は内傾する。

時期:出土遺物の特徴と検出状況などから、概ね古墳時代中期後半、5世紀後半以降とする。

掘立2 (第47 図、図版16)

調査区北西部 B 1 区に位置し、建物北側及び西側は調査区外に続く。調査壁の土層観察により、建物上面は第 II 層が覆う。なお、各柱穴は全掘しておらず、未掘箇所がある。 2 間以上の建物址で、3 基の柱穴(S P 33·148·150)で構成される。建物規模は東西長 4.68 m、柱穴間隔は $1.80 \sim 2.00$ m である。建物を構成する各柱穴の平面形態は楕円形を呈し、柱穴掘り方規模は径 $70 \sim 120$ cm、深さ $20 \sim 55$ cmを測る。柱穴掘り方埋土は、灰褐色土単層である。柱痕は 2 基の柱穴(S P $33\cdot148$)で検出され、規模は径 25 cm、深さ $33 \sim 55$ cmを測る。柱痕埋土は、柱穴掘り方埋土より色調のやや暗い灰褐色土である。遺物は柱穴掘り方埋土中より少量の土師器片や須恵器片のほか、S P 33 からは



第46図 掘立1測量図・出土遺物実測図

ガラス小玉が1点出土した。

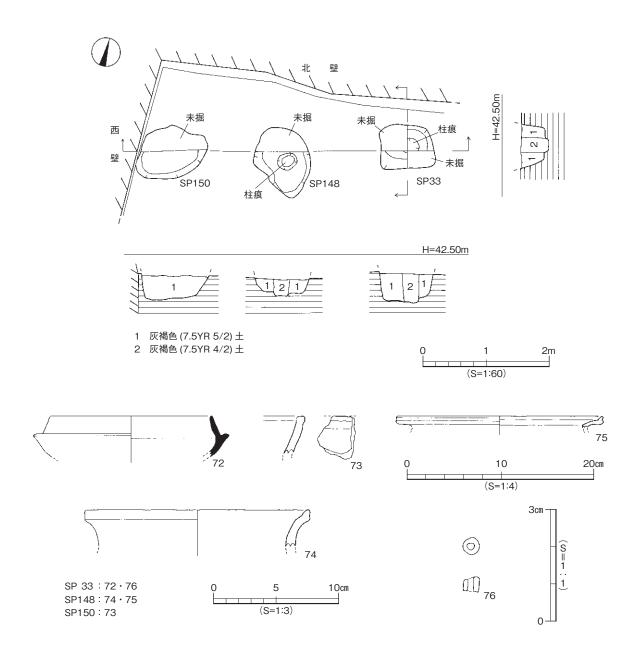
出土遺物 (第47 図、図版18)

72・76 は S P 33、73 は S P 150、74・75 は S P 148 出土品。72 は須恵器坏身で、たちあがり端部は尖り気味に丸い。73 は土師器の甕形土器で口縁部は内湾し、口縁端部は内側に肥厚する。74 は瓦質の壺形土器で、口縁端部は上方にやや肥厚する。75 は弥生土器の甕形土器で口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文 1 条を施す。76 はガラス製の小玉で直径 0.46 cm、厚さ 0.40 cmを測り、色調は褐緑色を呈する。完存品。

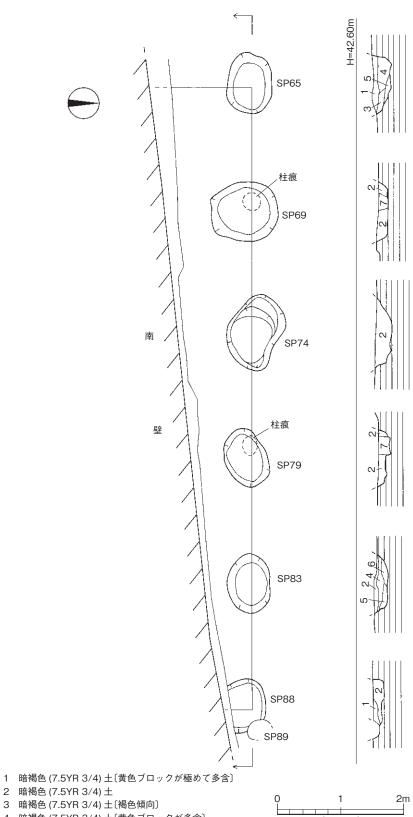
時期:出土した土師器や須恵器の特徴から、概ね古墳時代後期中葉、6世紀中葉以降とする。

掘立3 (第48 図、図版16)

調査区南側D1~E3区に位置する。建物東側柱穴はSP89に切られ、建物南側は調査区外に続く。5間以上の建物址で、6基の柱穴(SP65・69・74・79・83・88)で構成される。建物規模は東西検出長 10.80 m、柱穴間隔は 2.00 mである。建物を構成する各柱穴の平面形態は円形を呈し、柱穴掘り方規模は径 55~ 117 cm、深さ 10~ 30 cmを測る。柱穴掘り方埋土は暗褐色土を基調とし、黄色土ブロックや白色砂粒が混入するものである。柱痕は 2 基の柱穴(SP69・79)で検出され、規模は径 15~ 150 cm、深さ 15~ 171 cmを測る。柱痕埋土は、暗褐色土単層である。遺物は柱穴掘り方埋土中より、少量の弥生土器片や土師器片、須恵器片のほか、SP79からは軟質土器片が 11 点出土した。



第47図 掘立2測量図・出土遺物実測図



- 2 暗褐色 (7.5YR 3/4) 土
- 3 暗褐色 (7.5YR 3/4) 土〔褐色傾向〕
- 4 暗褐色 (7.5YR 3/4) 土[黄色ブロックが多含] 5 暗褐色 (7.5YR 3/4) 土[白色砂粒が多含]
- 6 暗褐色 (7.5YR 3/4) 土
- 7 暗褐色 (7.5YR 3/4) 土[黄色ブロックを含まず、暗色傾向] (柱痕)

第48図 掘立3測量図

(S=1:60)

出土遺物 (第49 図、図版19)

77 は S P 74、78・79 は S P 65、80 は S P 79、81 は S P 69 出土品。77 は土師器の甕形土器で口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。78・79 は須恵器坏身片で、78 のたちあがり端部は尖り気味に仕上げる。80 は軟質土器。甕形土器の胴部片で、一辺 1.0~ 1.5 mm大の格子目叩きを施す。色調は内外面共に黄褐色を呈し、器壁は厚さ 5 mmを測る。81 は弥生土器の壺形土器で、口縁端部は上方に拡張し、口縁端面に凹線文 3 条を施す。

時期:出土した土師器や須恵器の特徴から、概ね古墳時代後期末、7世紀前半以降とする。

(3) 土 坑

SK1 (第50図)

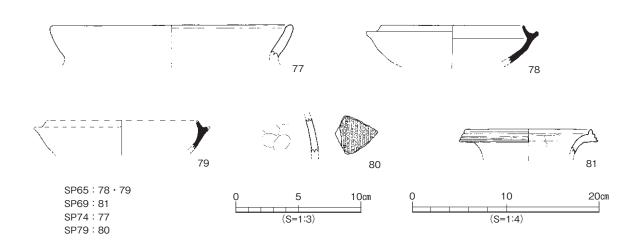
調査区南東隅D4区に位置し、土坑北側は2基の柱穴(SP97・98)に切られ、東側は調査区外に続く。調査壁の土層観察により、土坑上面は第Ⅲ層が覆う。平面形態は長楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西長1.22 m、南北検出長2.38 m、深さ38 cmを測る。SK1基底面は平坦で、断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色シルト単層である。遺物は、埋土中より弥生土器片が少量出土したが、図化しうるものはない。

時期:時期特定をしうる遺物の出土はないが第Ⅲ層が覆うことから、概ね古墳時代以前とする。

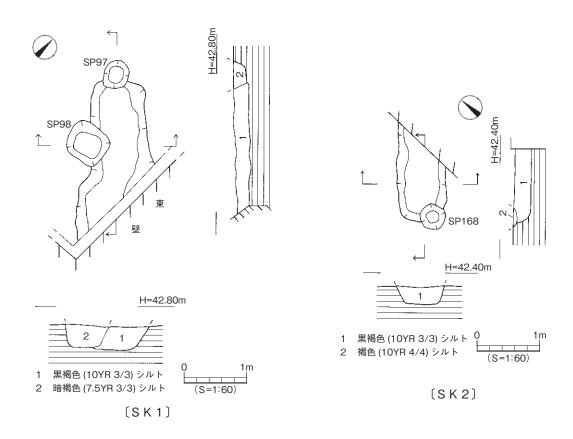
SK2 (第50図)

調査区北東部C1区に位置し、土坑西側は柱穴SP168に切られ、東側は調査区外へ続く。調査壁の土層観察により、土坑上面は第Ⅲ層が覆う。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は南北長0.80 m、東西検出長1.56 m、深さ28 cmを測る。SK2基底面は平坦で、断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色シルト単層である。遺物は土坑底面中央部にて径20 cm大の礫が出土したほか、埋土中より少量の土師器片と須恵器片とが出土したが、図化しうるものはない。

時期:時期特定しうる遺物の出土はないが第Ⅲ層が覆うことから、概ね古墳時代以前とする。



第49回 掘立3出土遺物実測図



第50図 SK1・2測量図

(4) その他の遺構と遺物

調査では、遺構内及び掘立柱建物柱穴を含む 141 基の柱穴を検出した。このほか、包含層掘り下げ時や重機掘削時に遺物が出土した。なお、重機掘削時の出土品は層位や地点が不明であるため、ここでは「地点不明出土遺物」として実測図を掲載する。

1)柱 穴

調査で検出した141基の柱穴は、埋土で分類すると以下の六種類(A類~F類)である。

A類:灰色土······10基(土師器)

B類:褐色土……23基(弥生土器・須恵器・土師器・石器)

C類: 灰褐色土……12基(弥生土器・土師器・須恵器)

D類:暗褐色土…………57 基(弥生土器・土師器・須恵器・石器・焼土・炭化物)

E類:暗褐色土(黄色土混) ……16基(弥生土器・土師器)F類:黒色土……23基(弥生土器・石器)

上記の柱穴のうち、B類の柱穴7基 (SP84·113·114·121·135·168·178)、D類の柱穴3基 (SP55·131·167)、E類の柱穴7基 (SP5·50·54·161)、F類の柱穴2基 (SP13·20) から出土した遺物を20点掲載した。

出土遺物 (第 51·52 図、図版 19)

82~101 は、以下の柱穴出土品である(82: SP113、83·92: SP114、84: SP161、85: SP50、86·90·97: SP5、87: SP168、88: SP54、89: SP121、91: SP178、93: SP167、94: SP84、95·100: SP131、96: SP135、98: SP20、99: SP13、101: SP55)。

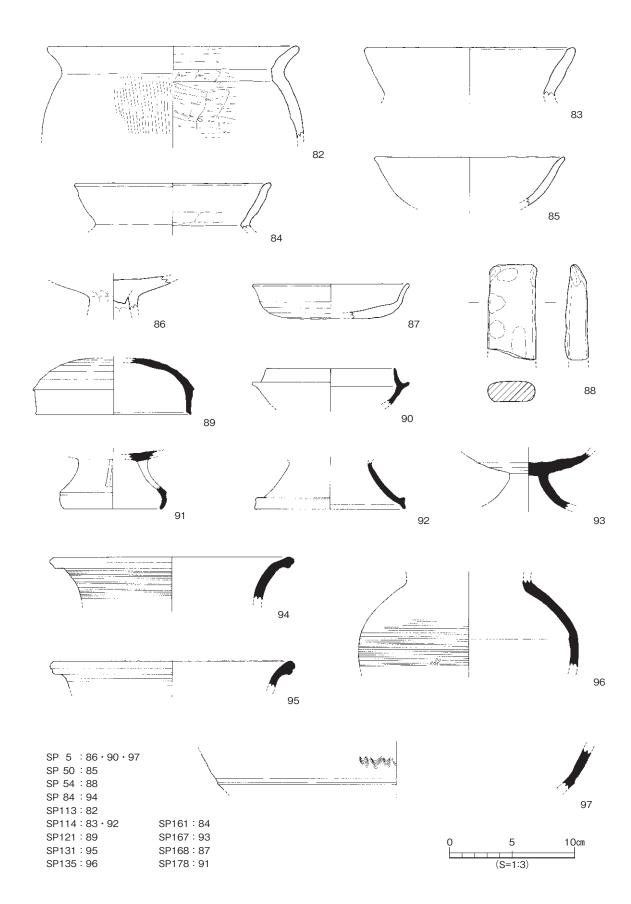
82~88 は土師器。82~84 は甕形土器で82 は口縁部が外反し、胴部外面はタテ方向のハケメ調整、 内面にはヨコ方向のヘラケズリを施す。83・84 は口縁部が内湾し、口縁端部は内傾する丸みのある 面をもつ。85・86は高坏形土器。85は坏部の小片で、口縁部はやや外反する。86の坏脚部の接合方 法は、充填技法による。5世紀。87は坏で口縁部はやや外反し、底部は平底となる。体部下半部か ら底部にかけての外面には回転ヘラケズリを施し、色調は内外面共に乳褐色を呈する。8世紀。88 は器種不明の把手部で、断面形態は長方形状を呈する。13~14世紀。89~97は須恵器。89は坏蓋 で断面三角形状の鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する面をなす。5世紀後半。90は坏身片で、たち あがり端部は尖り気味に仕上げる。6世紀後半。91~93は高坏で、91は長方形状の透かしを看取す る。5世紀後半。92は脚裾部を上下方に拡張し、端面は凹む。6世紀前半。94~96は壺で94の口 縁部は肥厚し、頸部に回転カキメ調整を施す。95の口縁部は珠玉状を呈し、口縁端面に沈線が巡る。 96 は短頸壺の肩胴部片で、胴部外面には平行叩き後に回転カキメ調整を施す。6世紀。97 は器台の 坏部で、凸線と波状文を施す。5世紀後半。98~101は弥生土器。98・99は甕形土器。98は口縁端 部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文2条を施す。弥生中期後半。99 は底部で突出する上げ底を呈 し、底部内面に黒班を残す。弥生後期。100は壺形土器の底部で、厚みのある平底となる。弥生後期。 101 は支脚形土器で、欠損しているが角状突起2ケと羽根状の突起1ケをもつ。外面には、全面にタ タキ調整を施す。弥生末。

2) 包含層出土遺物 (第53·54 図、図版 19·20)

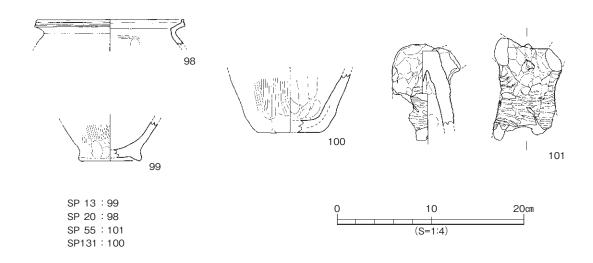
102~105 は壺形土器。102 は長頸壺の口頸部片で、口縁部内面に凸帯を貼付ける。弥生前期末。103 は肩部片で凸帯を貼付け、凸帯上に刻目を施す。弥生後期。104・105 は同一個体で、胴部最大径48.6 cmを測る。外面にはタテ方向のヘラミガキ、内面はハケメ調整を施す。弥生後期。106 は器台形土器の柱部片で櫛描き沈線文と波状文を施し、径 1.6 cm大の円孔を穿つ。弥生後期。107 はほぼ完形の匙形土製品で、長さ 9.7 cm、幅 7.7 cm、厚さ 1.1 cmを測る。内面には指頭痕が顕著に残り、外面には黒班が残る。

108・109 は土師器坏で、108 の底部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。10 世紀。110 は甕形土器の口縁部片で、口縁端部は先細りする。7世紀。111・112 は壺形土器。111 は口縁部が肥厚し、口縁部外面がやや凹む。112 は二重口縁壺で、口縁端部は内傾する面をもつ。古墳前期。113・114 は甑形土器で、113 の口縁端部はナデにより凹む。114 は 3 ケの穿孔を看取し、中央部は径 3.4 cm大の円孔、他の 2 孔は楕円形孔と推測される。5世紀。

 $115\sim126$ は須恵器。 $115\sim117$ は坏蓋で、115 は断面三角形状の丸みのある稜をもち、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。6 世紀中葉。 $116\cdot117$ はかえり端部が尖り、117 の天井部外面 1/3 の範囲には回転ヘラケズリ調整を施す。7 世紀後半。 $118\sim120$ は坏身で、118 のたちあがり端部は内傾する凹面をなす。5 世紀後半。119 は 2/3 の残存で、たちあがり径 12.0 cm、器高 5.1 cmを測る。たちあがり端部は丸く仕上げ、底部外面 1/3 の範囲には回転ヘラケズリ調整を施す。胎土中には石



第51図 柱穴出土遺物実測図(1)

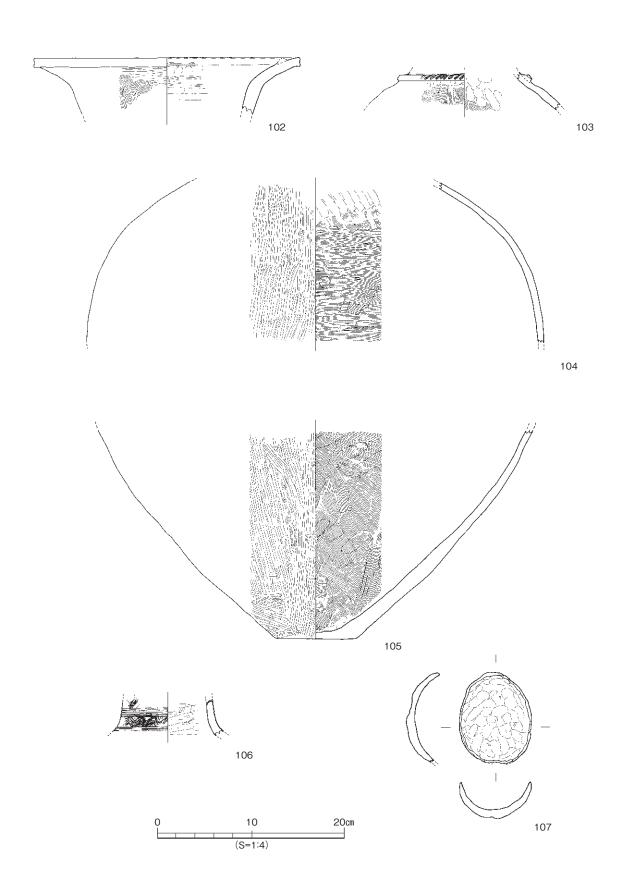


第52図 柱穴出土遺物実測図(2)

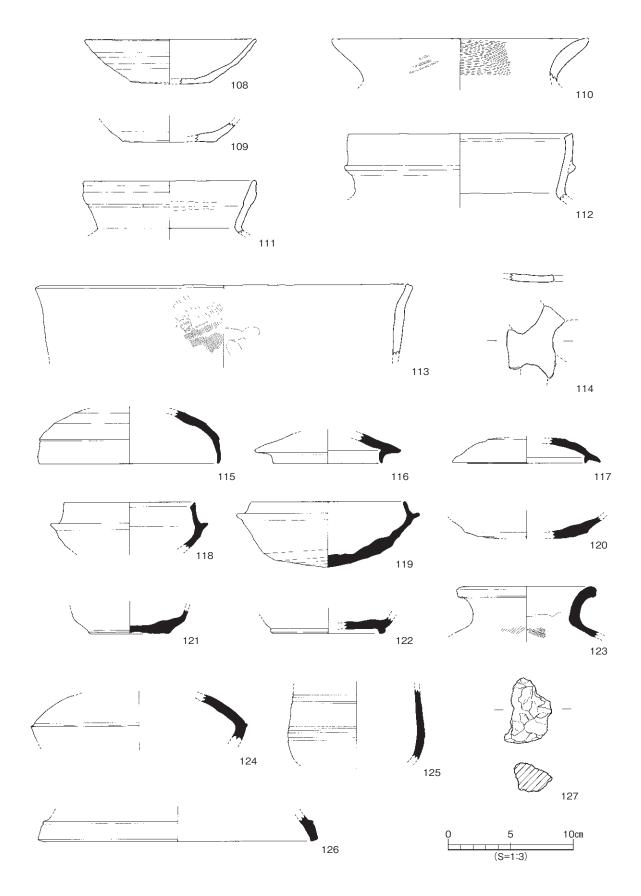
英や長石が数多く含まれ、色調は褐灰色を呈する。土師質土器。6世紀後半。120の底部外面には、回転ヘラケズリ調整がみられる。6世紀。121は坏の底部片で、底部外面には回転ヘラ切り痕を残す。10世紀。122は高台の付く坏で、高台は体底部境界付近に付き、内外面には回転ナデ調整を施す。8世紀。123は広口壺で、口縁端部は珠玉状に仕上げる。6世紀後半。124は長頸壺で、肩胴部境界に1条の沈線が巡る。7世紀。125は椀の体部片で、体部上下位には沈線が巡る。7世紀。126は器台の脚裾部小片で、端部は「コ」字状を呈する。6世紀。127は鉄滓で、重量49.53gを測る。

3) 地点不明出土遺物 (第55 図、図版20)

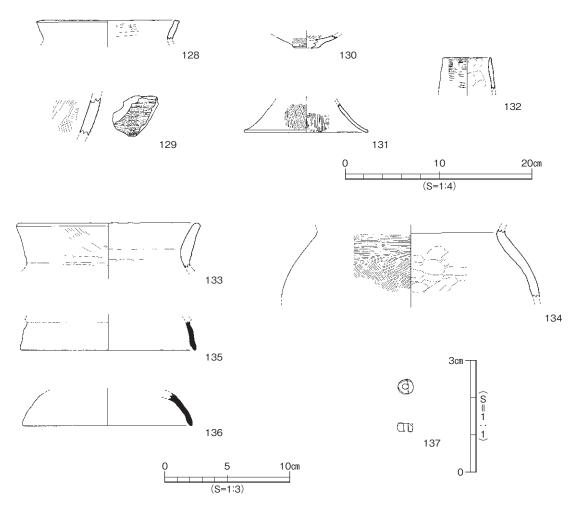
128・129 は弥生土器の甕形土器で、129 の外面にはタタキ調整を施す。弥生末。130 は鉢形土器の底部片で、突出する平底となる。弥生末。131 は高坏形土器の脚部片で、内外面には細かなヘラミガキを施す。弥生末。132 は製塩土器で、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。外面にはヨコ方向のタタキ調整がみられる。古墳前期。133・134 は土師器の甕形土器、135・136 は須恵器坏蓋で、135 は口縁端部が内傾する凹面をなす。6世紀。137 はガラス製の小玉で、径 0.45 cm、厚さ 0.25 cmを測り、色調は黒色を呈する。



第53回 包含層出土遺物実測図(1)



第54図 包含層出土遺物実測図(2)



第55図 地点不明出土遺物実測図

4. まとめ

調査では、弥生時代から古代までの遺構や遺物を確認した。以下、時代別にまとめを行う。

弥生時代では、終末期の竪穴住居SB3を検出した。一辺 6.7 mを測る方形住居で、住居内には高床部と2基の炉を付設している。周壁溝は二重に巡り、一部は溝の重複する箇所がみられ、さらには住居の主柱穴が周壁溝埋没後に掘削されていることなどから、SB3は建て替えが施された住居と推測される。住居内からは弥生土器のほか、ガラス小玉や鉄滓が出土した。遺物では、遺構内や包含層中より弥生時代前期末から終末期の土器が出土した。このうち、包含層中資料ではあるが匙形土製品1点が含まれている。

古墳時代では、中期後半から終末期の遺構を検出した。SB1は一辺35m前後を測る方形住居で、住居埋土中には焼土や炭化物が含まれており、出土した遺物も弥生土器や土師器などが混在していることから、SB1は人為的に埋め戻された住居と考えられる。なお、出土品よりSB1の廃絶時期は古墳時代中期後半と考えられる。SB2は一辺5.5m以上を測る方形住居で、住居床面には住居内の

間仕切りと思われる溝を検出した。SB2の廃絶時期は古墳時代後期後半、 $6世紀後半頃と推測される。このほか、3棟の竪穴住居(<math>SB4\sim6$)は周壁溝のみの検出であるが、廃絶時期は出土品より SB5は5世紀後半、 $SB4\cdot6$ は6世紀後半以前と考えられる。掘立柱建物は1間 × 2間以上の建物(掘立1・2)と1間 × 6間以上の大型建物(掘立3)を検出した。出土品や切り合いより、各建物の構築時期は掘立1が5世紀後半、掘立2が6世紀中葉、掘立3が7世紀前半以降と考えられる。遺物では掘立3柱穴内より、格子目叩きを施した軟質土器片1点が出土している。

古代の遺構は未検出であるが、柱穴内や包含層、地点不明品の中に該期の遺物が含まれている。なかでも、平安時代に時期比定される土師器坏が柱穴や包含層中より出土しているほか、飛鳥時代から奈良時代に時期比定される須恵器片が包含層中に含まれている。

今回の調査では、主に古墳時代中期後半から終末期の遺構を数多く検出した。竪穴住居や掘立柱建物には重複関係が認められることから、調査地や周辺地域では当該期には継続的に集落が営まれていたことが容易に推測される。今後、樟味地区における弥生時代から古墳時代の集落様相や変遷を解明するうえで、今回の調査成果は貴重な資料となろう。また、古代においては明確な遺構は検出されなかったが、出土した遺物は調査地や周辺地域に古代集落の存在を示唆する資料といえよう。

遺構・遺物一覧 一凡例一

- (1)以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ():復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例)□→□縁部、□端→□縁端部、天→天井部、肩→肩部、胴→胴部、 体→体部、脚→脚部、底→底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例)石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土、赤粒→赤色酸化土粒。

()の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 $(1 \sim 4)$ $\rightarrow [1 \sim 4 \text{ mm}$ 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表 29 竪穴住居一覧

27.0	0 32/ (12/							
竪穴 (SB)	地区	平面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	内部施設	出土遺物	時 期	備考
1	B3~C4	方形	3.54×3.40×0.06	黒褐色土 他		弥生·土師 須恵	5世紀後半	SB5を切る
2	B2~C3	隅丸方形	(5.52)×(4.90)×0.10	灰褐色土	土坑·周壁溝· 溝	弥生·土師 須恵·石	6世紀後半	
3	B1~C2	隅丸方形	6.70×(5.70)×0.26	黒色土	主柱穴·周壁溝 炉·高床部	弥生·土師 須恵·鉄·玉	弥生末	
4	D3~E4	隅丸方形	(4.55)×(3.35)×0.13	暗褐色土	周壁溝·溝		6世紀後半以前	掘立3に切られる
5	B·C4	隅丸方形	(5.00)×(2.50)×0.03	褐灰色土	周壁溝	弥生	5世紀後半以前	SB1に切られる
6	C·D1	隅丸方形	(1.40)×(0.58)×0.10	暗褐色土	周壁溝		6世紀後半以前	

表 30 掘立柱建物一覧

掘立	地 区	方 位	規模	桁行長 (m)	梁行長 (m)	埋土	出土遺物	時 期	備考
1	A·B4	南北	1×2間以上	(3.70)	(1.98)	灰褐色土 (白色砂粒混)	土師·須恵	5世紀後半以降	SB5を切る
2	B1	東西	1×2間以上	(4.68)	(1.30)	灰褐色土	弥生·土師 須恵·玉	6世紀中葉以降	
3	D1~E3	東西	1×5間以上	(10.80)	(1.60)	暗褐色土	弥生·土師 須恵·軟質	7世紀前半以降	

表 31 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時 期	備考
1	D4	長楕円形	逆台形状	(2.38)×1.22×0.38	黒褐色シルト	弥生	古墳時代以前	
2	C1	長方形	逆台形状	(1.56)×0.80×0.28	黒褐色シルト	土師·須恵	古墳時代以前	

表 32 柱穴一覧 (1)

柱穴 (SP) 地区 平面形 規模 長径×短径×深さ(m) 埋 土 出土遺物 1 A4 円形 (0.12)×(0.08)×0.10 暗褐色土 出土遺物 出土遺物	掘立1
2 A4 円形 0.14×(0.12)×0.11 暗褐色土 3 B4 楕円形 (0.39)×(0.16)×0.07 灰褐色土 4 B4 楕円形 0.76×0.64×0.13 灰褐色土 土師 5 A·B3 方形 0.71×0.62×0.46 暗褐色土(黄色土混) 弥生・土師 6 A3 円形 0.24×(0.20)×0.05 灰色土 7 A·B3 不整円形 0.18×(0.14)×0.13 暗褐色土 8 欠 番 9 欠 番 10 欠 番 11 B3 不整円形 0.34×0.28×0.10 暗褐色土	掘立1
3 B4 楕円形 (0.39)×(0.16)×0.07 灰褐色土 4 B4 楕円形 0.76×0.64×0.13 灰褐色土 土師 5 A·B3 方形 0.71×0.62×0.46 暗褐色土(黄色土混) 弥生・土師 6 A3 円形 0.24×(0.20)×0.05 灰色土 7 A·B3 不整円形 0.18×(0.14)×0.13 暗褐色土 8 欠 番 9 欠 番 10 欠 番 11 B3 不整円形 0.34×0.28×0.10 暗褐色土	掘立1
4 B4 楕円形 0.76×0.64×0.13 灰褐色土 土師 5 A·B3 方形 0.71×0.62×0.46 暗褐色土(黄色土混) 弥生・土師 6 A3 円形 0.24×(0.20)×0.05 灰色土 7 A·B3 不整円形 0.18×(0.14)×0.13 暗褐色土 8 欠 番 9 欠 番 10 欠 番 11 B3 不整円形 0.34×0.28×0.10 暗褐色土	掘立1
5 A·B3 方形 0.71×0.62×0.46 暗褐色土(黄色土混) 弥生·土師 6 A3 円形 0.24×(0.20)×0.05 灰色土 7 A·B3 不整円形 0.18×(0.14)×0.13 暗褐色土 8 欠 番 9 欠 番 10 欠 番 11 B3 不整円形 0.34×0.28×0.10 暗褐色土	掘立1
6 A3 円形 0.24×(0.20)×0.05 灰色土 7 A·B3 不整円形 0.18×(0.14)×0.13 暗褐色土 8 欠 番 9 欠 番 10 欠 番 11 B3 不整円形 0.34×0.28×0.10 暗褐色土	
7 A·B3 不整円形 0.18×(0.14)×0.13 暗褐色土 8 欠 番 9 欠 番 10 欠 番 11 B3 不整円形 0.34×0.28×0.10 暗褐色土	
8 欠番 9 欠番 10 欠番 11 B3 不整円形 0.34×0.28×0.10 暗褐色土	
9 欠番 10 欠番 11 B3 不整円形 0.34×0.28×0.10 暗褐色土	
10 欠 番 11 B3 不整円形 0.34×0.28×0.10 暗褐色土	
11 B3 不整円形 0.34×0.28×0.10 暗褐色土	
欠番	
13 B3 方形 0.48×0.47×0.32 黒色土	
14 B3 円形 0.28×0.27×0.24 暗褐色土	
15 B3 円形 0.24×0.23×0.03 灰色土	
16 B3 不整楕円形 0.64×0.38×0.20 暗褐色土(黄色土混) 弥生·土師	
欠 番	
18 B2 円形 0.32×0.30×0.30 暗褐色土	
欠 番	
20 B2 不定形 0.56×0.56×0.67 黒色土 弥生	
21 B2 円形 (0.54)×(0.19)×0.19 黒色土	
22 B2 円形 0.22×0.21×0.10 灰色土	
23 欠 番	
24 欠 番	
25 B2 円形 0.52×(0.26)×0.11 暗褐色土	
26 B2 楕円形 0.36×0.22×0.13 暗褐色土(黄色土混)	
27 B2 円形 0.42×0.41×0.14 暗褐色土	
28 B2 円形 0.17×0.17×0.05 暗褐色土	
29 B2 楕円形 0.20×0.15×0.08 暗褐色土	
(30) 欠 番	
31 B2 円形 (0.60)×(0.30)×0.22 灰色土	

柱穴一覧 (2)

	住八-	見				(2)
柱穴 (SP)	地 区	平面形	規 模 長径 × 短径 × 深さ(m)	埋 土	出土遺物	備考
32	l.		欠	番		
33	B1·2	方形	0.80×0.78×0.55	灰褐色土	須恵·臼玉	掘立2
34	B1·2	円形	0.60×(0.47)×0.10	暗褐色土		
35			欠	番		
36	B·C1	円形	0.57×0.55×0.07	暗褐色土		
37	2 01	1 4/12	欠	番		
38	C1	円形	0.20×0.19×0.33	暗褐色土		
39	C1	円形	0.32×0.30×0.33	暗褐色土(黄色土混)		
40	C1·2	楕円形	0.60×(0.36)×0.14	暗褐色土		SB3床面検出
41	C1·2	楕円形	0.42×(0.28)×0.48	暗褐色土	弥生·土師	SB3床面検出
42	C1	円形	0.23×0.22×0.16	褐色土	3.7.22 22.11	DEOMINE DOM
43	C1	円形	(0.33)×(0.24)×0.12	褐色土		
44	01	1 1/1/2	欠	番		
45			欠	番		
46	D1	円形	0.24×0.24×0.05	 暗褐色土		
47	D1	円形	0.24×0.24×0.03 0.37×0.36×0.12	暗褐色土		
48	D1	楕円形	0.52×0.41×0.19	暗褐色土(黄色土混)		
49	DI	作门心		────────────────────────────────────		
_	D1	ППТК	欠	 暗褐色土(黄色土混)	_1_6#	
50	D1	円形	0.54×0.52×0.16		土師	
51 52			欠	番 番		
-			欠			
53	D.	7°±6171 = 1	欠	番	I Azr	
54	D1	不整円形	0.64×0.44×0.19	暗褐色土(黄色土混)	土師	
55	D1	円形	0.22×0.21×0.31	暗褐色土	弥生	
56	D1	円形	(0.34)×0.30×0.10	褐色土		
57	D1	円形	0.31×(0.23)×0.09	黒色土		
58	D·E1	不定形	$(0.92) \times (0.57) \times 0.32$	黒色土	弥生	
59			欠	番	1	-
60	D1	円形	0.22×0.22×0.05	暗褐色土		
61	D1	円形	0.26×0.26×0.07	暗褐色土		
62			欠	番		
63			欠	番		
64	D1	円形	0.52×0.51×0.32	黒色土	弥生	
65	D1·2	楕円形	0.96×0.72×0.30	暗褐色土	土師·須恵	掘立3
66			欠	番		
67	D1~E2	不定形	0.88×0.76×0.16	暗褐色土		
68			欠	番		
69	D·E2	楕円形	1.06×0.94×0.23	暗褐色土	土師·須恵	掘立3
70	D4	円形	0.36×(0.23)×0.05	褐色土		
71	D4	円形	0.52×0.50×0.14	黒色土		
72			欠	番		
73			欠	番		
74	D4	楕円形	1.18×0.92×0.25	暗褐色土	土師	掘立3
75			欠	番		
76	D4	円形	0.18×0.18×0.11	暗褐色土		
77	E2·3	楕円形	(0.29)×0.21×0.36	暗褐色土	弥生·土師·須恵	
78	E2·3	楕円形	(0.22)×0.12×0.40	黒色土	弥生·石	
79	D.E3	楕円形	0.94×0.65×0.14	暗褐色土		掘立3
80	J.		欠	番		*
81			欠	番		
82			欠	番		
83	D·E3	楕円形	0.94×0.68×0.22	 暗褐色土	土師·須恵	掘立3
84	D3	円形	0.87×0.86×0.28	褐色土	須恵	
85			欠	番		
86	D3	楕円形	0.22×0.16×0.14	黒色土		
87	D3	円形	0.48×0.46×0.16	暗褐色土		
88	D.E3	方形	0.81×(0.55)×0.19	暗褐色土	弥生·土師	掘立3
89	D3~E4	円形	0.41×0.39×0.13	黒色土	AA-T- T-IMP	
90	D3 L4	円形	0.64×0.62×0.19	暗褐色土	弥生	
91	D3	円形	0.10×0.10×0.19	黒色土	J/J1	
92	D3·4	円形	(0.50)×(0.12)×0.29	暗褐色土	弥生·土師·石	
93	D3 4	円形	(0.08)×(0.08)×0.04	暗褐色土(黄色土混)	가가그 그 내가 기	
93	DΞ	1 1/12	欠	番		
74				·HI		T.

柱穴一覧 (3)

	住八	一見				(3)
柱穴 (SP)	地 区	平面形	規 模 長径 × 短径 × 深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
95			欠	番	ļ	
96	D4	円形	0.32×0.31×0.18	暗褐色土(黄色土混)		
97	D4	円形	0.41×0.41×0.17	暗褐色土		
98	D4	円形	0.66×0.64×0.35	暗褐色土	弥生·土師·須恵	
99	D4	円形	0.50×0.46×0.26	褐色土	弥生·土師	
100	Dī	1 1/12	欠	番	7/1.77 HIP	
101	D4	不整楕円形	0.59×0.46×0.06	褐色土		
102	DT	71.亚州117/2	欠	番		
103			欠	番		
104			欠	番		
105			欠	番		
106	D4	円形	0.56×(0.26)×0.17		土師	
107	C·D4	円形	0.58×0.54×0.23	褐色土	弥生·土師	
107	C D4	1 1/15	欠	番	沙王 工帅	
109	C4	円形	(0.28)×(0.09)×0.08	 褐色土		
110	C4	円形	(0.40)×(0.12)×0.06	灰褐色土		
111	C4	1 1)15	欠			
112	C4	円形	0.31×0.29×0.39		弥生	
113	C4 C4	門形 楕円形	(0.72)×(0.33)×0.46		弥生·土師·石	
					土師・須恵	
114	B3 B4	楕円形 楕円形	1.04×0.85×0.45 0.76×0.54×0.10	褐色土 灰褐色土	工即・須思	掘立1
				黑色土 黒色土		7年7.1
116	B4	円形	0.22×0.21×0.22			
117	B4	円形	0.26×(0.19)×0.04	暗褐色土		
118	B4	円形	0.32×0.30×0.08	暗褐色土		
119	B4	円形	0.22×(0.14)×0.04	灰色土		
120	D .	Det w/	欠	番	<i>r</i>	
121	B4	円形	0.60×(0.22)×0.19	褐色土	須恵	
122	B4	円形	(0.19)×(0.11)×0.03	暗褐色土		
123	B4	楕円形	0.35×0.24×0.06	暗褐色土	1 4	III-lea
124	B4	円形	0.51×(0.28)×0.11	灰褐色土	土師	掘立1
125	В4	円形	0.74×(0.50)×0.16	灰褐色土	土師·須恵	
126			欠	番		
127	D .	Fra w/	欠	番		1
128	B4	円形	0.18×0.18×0.06	褐色土	1.4-4	
129	В4	円形	0.25×0.24×0.26	灰色土	土師	
130	В4	楕円形	0.86×0.60×0.10	灰褐色土	須恵	掘立1
131	В3	方形	0.77×0.69×0.31	暗褐色土	弥生·土師	
132	В3	方形	0.60×0.58×0.18	褐色土		
133			欠	番		
134			欠	番	1	T
135	C2·3	不定形	(0.72)×(0.54)×0.05	褐色土	須恵	
136			欠	番		1
137	D2	不定形	0.40×0.38×0.12	灰色土		
138	F. 1	Fre w/	欠	番		1
139	D1	円形	0.33×0.31×0.09	褐色土		
140	01	ディナ・ボノ	欠	番		1
141	C1	不定形	0.57×(0.34)×0.14	黒色土		
142	D3	不定形	0.70×0.60×0.08	暗褐色土		
143	D3	楕円形	0.71×0.59×0.11	暗褐色土(黄色土混)		
144	D3	楕円形	(0.88)×0.58×0.13	暗褐色土		
145	D3	不定形	1.21×0.65×0.14	暗褐色土		
146	B1	楕円形	0.71×(0.40)×0.18	褐色土		
147	B1	楕円形	0.48×(0.31)×0.19	暗褐色土		
148	B·C1	楕円形	1.16×0.92×0.28	灰褐色土	土師·須恵	掘立2
149			欠	番	1	
150	B·C1	不定形	(1.08)×1.01×0.44	灰褐色土	土師·須恵	掘立2
151			欠	番		
152	C1	円形	0.26×0.25×0.38	灰色土	土師	
153	C1	円形	(0.30)×(0.11)×0.10	灰色土		
154			欠	番		
155	D1	円形	0.48×(0.40)×0.30	黒色土	弥生·石	
	C2	円形	0.51×0.50×0.28	暗褐色土	弥生·土師	SB3床面検出
156	CZ	1 1/12	欠	番	7/1.T. T.HIP	0000万円面 八日

柱穴一覧 (4)

	生八-	一見				(4)
柱穴 (SP)	地 区	平面形	規 模 長径 × 短径 × 深さ(m)	埋 土	出土遺物	備考
158	В4	円形	0.34×0.32×0.08	黒色土		
159	В4	円形	0.16×0.16×0.07	黒色土		
160	В4	円形	0.15×0.14×0.06	黒色土		
161	D3	楕円形	(0.85)×(0.68)×0.06	暗褐色土(黄色土混)		
162	D3	円形	0.68×0.66×0.06	暗褐色土(黄色土混)		
163	C4	円形	(0.68)×(0.56)×0.06	暗褐色土		
164	В3	方形	0.98×0.97×0.29	暗褐色土	焼土	SB2内SK③に変更
165	В3	楕円形	0.96×0.77×0.33	暗褐色土	炭化物	SB2内SK②に変更
166	В3	楕円形	0.16×(0.11)×0.03	褐色土		
167	B2	円形	0.74×0.55×0.24	暗褐色土	弥生·土師	
168	C1	円形	(0.35)×(0.32)×0.09	褐色土		
169			欠	番		
170	C2	円形	0.45×0.43×0.11	暗褐色土		
171	C·D2	不定形	(0.54)×(0.16)×0.23	暗褐色土	弥生·土師	
172	C2	円形	0.23×0.21×0.31	暗褐色土	土師·須恵·石	
173	C2	円形	(0.40)×(0.20)×0.19	灰褐色土		
174			欠	番		
175	D2	円形	0.27×0.22×0.07	灰褐色土		
176	D2	方形	(0.77)×(0.24)×0.10	灰色土		
177	D2	不定形	0.61×0.49×0.22	褐色土	土師	
178	D2	円形	0.22×0.20×0.09	褐色土	須恵	
179			欠	番		
180	C2	楕円形	0.71×(0.37)×0.28	暗褐色土(黄色土混)	須恵	SB3床面検出
181			欠	番		
182	D2	不定形	0.24×0.23×0.06	黒色土		
183	D2	不定形	0.20×0.18×0.03	黒色土		
184	D1	円形	(0.35)×0.34×0.13	暗褐色土(黄色土混)		
185	D·E1	楕円形	(0.61)×(0.58)×0.56	暗褐色土	弥生·土師·須恵	
186	D3	不定形	0.23×0.21×0.11	暗褐色土(黄色土混)	土師	
187	В3	楕円形	(0.46)×(0.25)×0.14	暗褐色土		
188	C1	楕円形	(1.05)×0.78×0.25	暗褐色土	土師·須恵	
189	D2	円形	0.31×0.30×0.24	暗褐色土(黄色土混)		
190	D2	円形	0.26×0.24×0.31	黒色土	弥生	
191	D3	円形	0.27×0.27×0.09	黒色土		
192	В1	不定形	0.56×0.45×0.20	褐色土	土師·須恵	
193	D2	不定形	0.54×0.40×0.10	暗褐色土		
194	D2	円形	0.22×0.20×0.12	暗褐色土		
195	E2	円形	0.26×0.25×0.09	暗褐色土		
196	B3∼C4	円形	(0.21)×(0.07)×0.10	黒色土		

表 33	SB1出土遺物観察表	十製品		(1)

番号	器種	法量	(am)	形態・施文	調	整	色調 (外面)	胎土	備考	図版
田力	667里	(大里	(CIII)	形思·旭文	外面	内面	内面)	焼成	加与	IZINX
1	甕	口径 残高	(16.2) 5.0	内湾口縁。口縁端部はわずかに内傾。	ヨコナデマメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~2)金		
2	壺	口径 残高	(17.0) 2.4	二重口縁壺。口縁端部は平坦。小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~3)		
3	壺	残高	4.0	扁球形の胴部。1/3の残存。	同ハケ(7本/cm) 剛ハケ→ナデ	ナデ(マメツ)	にぶい赤褐色 にぶい黄橙色			
4	甑	残高	11.8	径2.0cm大の孔2ヶ。底部外面に工具痕あり。	ハケ(6本/cm) 工具痕	ナデ 板ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1~2)金◎		17
5	坏身	残高	2.2	底部片。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密◎		
6	鉢	残高	5.4	出雲系有段鉢。	ヨコナデ	マメツ (ヨコナデ)	浅黄橙色 にぶい橙色	石・長(1~2)		17
7	鉢	底径 残高	(19.1) 1.1	脚付鉢。脚端部は先細り。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 橙色	石(1) 〇		

3.0

	S	B 1 出:	土遺物	観察表 土製品						(2)
番号	器種	法量	(cm)	形態・施文	調	整	色調 (外面)	胎土	備考	図版
田力	和的生	仏里	(CIII)	/// / / /// // // // // // // // // //	外面	内面	内面)	焼成	畑与	
8	器台	残高	3.3	ヘラ描き沈線文6条+波状文+円孔(径 1.5cm)。小片。	ヨコナデ	ナデ	橙色 浅黄橙色	石・長(1) ◎		17

(1)表 34 SB2出土遺物観察表 土製品 調敷 色調 (内面) (外面) 胎土 番号 器種 法量 (cm) 形態・施文 備考 図版 外面 内面 焼成 回ヨコナデ 回ヨコナデ 内湾口縁。口縁端部は内方へ肥厚。 胴部外面にヘラ記号。 にぶい橙色 石·長(1~3) 口径 (17.7)甕 (マメツ) 17 にぶい黄橙色 残高 8.8 剛指頭痕 内湾口縁。口縁端部は外方に肥厚。 にぶい橙色 口径 (18.2)石・長(1~2)金 10 甕 ヨコナデ ヨコナデ にぶい橙色 残高 2.8 小片。 ミガキ ナデ→ 灰白色 指込技法。 11 高坏 残高 6.4 17 →ヨコナデ 横方向の板ナテ にぶい橙色 口径 (24.5)ハケ 灰白色 石·長(1)金 甑 口縁部はわずかに外反。 (4~5本/cm) 黒斑 17 12 にぶい橙色 (4~5本/cm) 残高 6.8 ケズリ 回転ヘラケズリ 坏蓋 残高 断面三角形状の鋭い稜。小片。 回転ナデ 13 3.0 回転ナデ 灰白色 たちあがりは内傾し、端部は欠損。 回回転ナデ 灰白色 密 坏身 残高 3.5 ⑥回転ヘラケズリ 回転ナデ 14 小片。 灰白色 たちあがりは短く内傾。焼成時の別個体 口径 (12.0)回回転ナデ 密 15 坏身 残高 片が付着。 灰色 乳白色 密·赤粒 2.2 坏身 小片。 回転ヘラケズリ 回転ナデ 16 残高 乳白色 口径 (24.4)凹線文2条+刻目凸帯。凸帯上に布目 にぶい橙色 石・長(1~4) ヨコナデ 17 甕 ヨコナデ 押圧あり。小片。 にぶい橙色 残高 1.5 口径 (13.2)灰白色 石・長(1~2)金 働ハケ(5∼6本/ 18 甕 「く」の字状口縁。 ハケ(6本/cm) 里班 9.3 灰白色 残高 cm)→ナデ ヨコナデ 浅苗橙色 口径 (27.6)石・長(1~4) 19 壺 広口壺。口縁端面に凹線文4条あり。 ハケ ミガキ→ナデ 17 浅黄橙色 残高 3.4 (4~5本/cm) ヨコナデ 工具ナデ ヨコナデ 浅黄橙色 口径 (14.1)石·長(1~3) 複合口縁壺。櫛描き波状文6条+4条。 ハケ(6本/cm) 黒斑 17 20 壺 残高 2.9 にぶい橙色 **→**ナデ 口径 (14.5)橙色 石・長(1~4) 壺 21 複合口縁壺。小片。 マメツ マメツ にぶい橙色 残高 2.7 石·長(1~3) 』·₺ |赤粒 ○ 浅黄橙色 22 高坏 残高 口縁部は短く外反、口縁端部を欠損。 ミガキ マメツ 3.8 にぶい黄橙色 ハケ(12本/cm) 底径 (16.9)ハケ→ナデ 淡橙色 石·長(1~2)金 →ミガキ 黒斑 高坏 径1.6cm大の円孔を看取。 17 23 側端ヨコナデ 残高 4.6 淡橙色 側端ヨコナデ ミガキ 底径 (15.4)灰白色 石·長(1~2) ハケ→ミガキ 24 鉢 脚付鉢。径1.7cm大の円孔2ヶを看取。 ハケ→ミガキ 残高 灰白色 脚部ヨコナデ 石·長(1~3) 浅黄橙色 沈線文5条+円孔(径1.7cm)2ヶを看 マメツ ハケ(4本/cm) 残高 25 器台 6.8 赤粒 ハケ→ナデ →ナデ 浅黄橙色 灰茶色 石·長(1~2)金 中空。 ナデ シボリ痕 26 支脚 残高 6.8 茶色 石・長(1~3) 橙色 にぶい橙色 底径 残高 (6.4)ミガキ 平底。 ナデ 27 甕

ナデ

SB2出土遺物観察表 土製品 (2)

(1)

黒斑

石·長(1~3)金

番号	器種	法量	()	形態・施文	調	整	色調(外面)	胎土	備考	図版
笛ケ	谷俚	広里	(cm)	形態・旭文	外面	内面	巴嗣 (内面)	焼成	湘乡	凶加
28	鉢	底径 残高	0.7 5.1	小さな上げ底。	ハケ (7~8本/cm)	板ナデ ナデ	灰白色 灰黄色	石・長(1~3) ◎	黒斑	
29	樹	残高	2.3	広口壺。小片。	ヨコナデ	マメツ	黒褐色 黒褐色	石·長(1~3) ◎	SK①	
30	鉢	底径 残高	5.2 5.7	くびれをもつ上げ底。底部外面に指頭 痕顕著。	ハケ (4~5本/cm) ナデ	ハケ→ナデ	淡黄橙色 淡灰色	石·長(1~3) ◎	SK① 黒斑	
33	椀	口径 底径 器高	(10.8) (6.6) 4.5	体部は内湾し、口縁端部は先細り。1/4 の残存。	□ヨコナデ ®板ナデ	ナデョコナデ	乳橙色 乳橙色	石・長(1~2)金◎	SK②	
34	高坏	口径 残高	(23.0) 1.0	口縁端面に櫛描き波状文5条あり。	ョコナデ ハケ→ナデ	マメツ(ミガキ)	橙色 橙色	石・長(1~3)	SK2	
35	高坏	口径 残高	(27.0) 4.3	外反口縁。口縁端部は先細り。	ハケ→ヨコナデ →ミガキ	マメツ(ミガキ)	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~2)	SK② 黒斑	
36	坏身	口径残高	(12.2) 2.7	たちあがりは短く内傾。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密◎	SK3	
37	魙	残高	5.7	1/5の残存。	タタキ(マメツ)	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石(1~3) ⑤	SK3	

表 35 SB2出土遺物観察表 石製品

SB3出土遺物観察表

表 36

45

46

壺

壺

残高

残高

2.3

3.4

番号	器種	残存	材質		法	量		備	考	図版
笛ヶ	谷 俚	75、行	171 頁	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	VH	45	
31	砥石	1/2	砂岩	12.8	12.8	5.8	1410.0	SK(1)		17
32	砥石	ほぽ完形	砂岩	21.8	16.5	6.6	3600.0	SK(1)		17

土製品

広口壺。口縁端部は外傾。

刺突文あり。

(外面) 胎土 器種 色調 備考 図版 番号 法量 (cm) 形態・施文 外面 内面 (内面) 焼成 口径 残高 ミガキ にぶい橙色 石·長(1~2) (18.2)「く」の字状口縁。 38 甕 ハケ 3.0 →ヨコナデ 橙色 □ヨコナデ ハケ(8本/cm) $(22.6) \\ 2.8$ 「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」字状。 口径 橙色 橙色 石·長(1~2)金 (8~10本/cm) 39 甕 残高 →ヨコナデ 「く」の字状口縁。口縁部中位にふくらみ をもつ。 回郷ヨコナデ ハケ(4本/cm) 口径 (19.8)橙色 石·長(1~2) 40 甕 ハケ(5本/cm) 黒斑 にぶい橙色 3.7 残高 口径 (34.3)回郷ヨコナデ にぶい橙色 石·長(1~2) 甕 刻目凸带。小片。 ヨコナデ 41 灰黄褐色 残高 3.2 口径 (8.0)回ハケ(8本/cm) 淡橙褐色 石·長(1~3)金 ハケ(10本/cm) 甕 1.5 9.3 小型品。1/2の残存。 黒斑 18 42 底径 橙褐色 器高 , ハケ(5本/cm) 指頭痕・ハケ にぶい橙色 石·長(1~2) タタキ→ハケ 甕 残高 胴部片。 43 4.4 (マメツ) 浅黄橙色 (回郷)ヨコナデ □勵ヨコナデ 浅黄橙色 口径 (18.2)石·長(1) ハケ(5本/cm) →ハケ(8本/cm) (5~6本/cm) 壺 広口壺。口縁端面はナデ凹む。 黒斑 44 残高 2.1 淡黄色 (回郷)ヨコナデ 口径 (24.0)黒色 石·長(1~3)

ント・/ ハケ(4~5本/cm) (マメツ)

ヨコナデ

ハケ(5本/cm) →ヨコナデ

橙色

淡茶褐色

淡褐色

(2)

SB3出土遺物観察表 土製品

調整 (外面) 胎土 番号 器種 形態・施文 色調 備考 図版 法量 (cm) 外面 内面 (内面) 焼成 乳黄褐色 石·長(1~2)金 ヨコナデ 47 壺 残高 5.0 ヘラ状工具による線刻(記号か)。 ハケ(16本/cm) 18 灰褐色 口径 (16.0)ナデ・板ナデ 苗褐色 石·長(1~3) (8~10本/cm) ナデ 48 鉢 底径 直口口縁。小さな平底。 黒斑 18 慮ハケ→ナデ 黄褐色 器高 8.0 ヨコナデ コフナデ 明褐灰色 口径 (20.9)石・長(1~3) 49 鉢 直口口縁。1/3の残存。 明褐灰色 ナデ 残高 7.8 (4~5本/cm) 回タタキ 淡橙黄色 (33.2)外反口縁。口胴部境界に明瞭な稜あ 里班 □径 石・長(1~3)金 鉢 厠タタキ→ハケ (9~11本/cm) 18 50 煤付着 13.0 淡橙色 残高 (9~10本/cm) →ナデ (7.3) 2.8 □径 小型品。内外面に指頭痕が顕著に残けデ 茶褐色 石·長(1~4) 51 鉢 底径 ナデ 黒斑 18 茶色 る。 器高 3.0 ハケ→ミガキ 橙色 橙色 石·長(1~3) 高坏 (14~15本/cm) 52 残高 3.6 小片。 ⑥ハケ→ナデ 風工具ナデ ハケ(3本/cm) 浅黄橙色 石·長(1~3) 残高 沈線文2条+円孔(径1.7cm)1ヶ。 器台 53 4.9 (6~7本/cm) (マメツ) 灰白色 受部径 4.6 淡茶褐色 石·長(1)金 支脚 底径 器高 中実。1/2の残存。 ナデ ナデ 18 54 (8.6)淡茶褐色 4.1 工具痕 ナデ 底径 (10.0)シボリ痕 にぶい橙色 石·長(1~3) 外面に工具による押圧痕が顕著。 黒斑 支脚 55 残高 3.6 ナデ にぶい橙色 底径 (4.0)浅黄橙色 石·長(1~3) (10~12本/cm) 56 甕 わずかに上げ底。 ナデ 残高 にぶい黄橙色 4.7 ナデ にぶい橙色 底径 (5.0)石·長(1~3) 上げ底。 ハケ→ナデ 57 甕 ナデ 2.9 褐灰色 残高 にぶい橙色 板ナデ ハケ(4本/cm) 底径 30 石・長(1~3) 58 鉢 平底。 残高 2.2 ナデ 灰白色 内湾口縁。口縁端部は内傾し、丸味のある面をもつ。 にぶい橙色 口径 (18.1)石·長(1~3)金 ヨコナデ 甕 ヨコナデ にぶい橙色 残高 4.7 内湾口縁。口縁端部は内方にわずかに 肥厚。小片。 口径 (17.8)にぶい黄橙色 石·長(1~2) にぶい黄橙色 ◎ ハケ→ヨコナデ 60 甕 2.7 残高 マメツ ハケ(マメツ) 口径 (14.3)ハケ(5本/cm) 灰白色 石・長(1~3) 壺 口縁部外面に沈線状の凹みが巡る。 18 61 (マメツ) 残高 4.4 灰白色 にぶい黄橙色 石・長(1)金 高坏 ヨコナデ ナデ 62 残高 4.8 小片。 にぶい黄橙色 たちあがり端部に沈線状の凹みあり。 口径 (11.9)灰白色 密◎ 63 坏身 回転ナデ 回転ナデ 残高 3.1 小片。 灰白色 回転ナデ 灰白色 口径 (12.7)密 坏身 たちあがり端部は尖り気味。 64 回転ナデ 残高 灰白色 暗青灰色 無蓋高坏。凸線2条+波状文9条あり。 密 高坏 回転ナデ 回転ナデ 残高 2.9 65 暗青灰色 口径 (12.1)灰色 密 66 壺 短頸壺。小片。 回転ナデ 回転ナデ 灰色 残高 1.7

樽味高木遺跡 15 次調査

表 37	SB3出土遺物観察表	金属製品
------	------------	------

	番号	器 種	残存	材質	長さ (cm)	法 幅 (cm)	量 厚さ (cm)	重さ (g)	備	7	学	図版
ſ	67	鉄滓	_	鉄	3.5	4.5	1.4	25.0				18

表 38 SB3出土遺物観察表 玉類

番	子 器 種	残 存	材質	色	直径 (cm)	法 量 高さ (cm)	重さ (g)	備	ā	考	図版
68	小玉	完存	ガラス	青緑色	0.47	0.42	0.097				18

表 39 SB5出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調	整	色調 (外面)	胎土	備考	図版
笛勺	谷俚	法量 (cm)	/ 形態・旭文	外面	内面	巴神 (内面)	焼成	湘乡	凶加
69	甕	口径 (16.3) 残高 1.4	「く」の字状口縁。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 浅黄橙色	石・長(1~3) ◎		

表 40 掘立 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調	整	色調 (外面)	胎土	備考	図版
田力	有67生	(乙里(CIII)	// // // // // // // // // // // // //	外面	内面	(内面)	焼成	川与	
70	漉	残高 2.5	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 灰黄褐色	石・長(1~2)	SP115	
71	坏蓋	口径 (11.7 残高 1.7	口縁端部は内傾。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色灰色	密◎	SP115	

表 41 掘立 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量	(cm)	形態・施文	調	整	色調 (外面)	胎土	備考	図版
田力	1071生	仏里	(CIII)	//> /// // // // // // // // // // // // //	外面	内面	内面)	焼成	畑与	
72	坏身	口径 残高	(12.7) 3.3	たちあがり端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密◎	SP33 自然釉	
73	巍	残高	3.0	内湾口縁。口縁端部は内方へ肥厚。	マメツ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1~2)	SP150	
74	壺	口径残高	(17.5) 2.9	瓦質土器。口縁端部は上方へわずか に肥厚。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密〇	SP148	18
75	甕	口径残高	(21.4) 1.2	口縁端部は上方へ拡張、口縁端面に 凹線文1条あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1)	SP148	

表 42 掘立 2 出土遺物観察表 玉類

番号	器 種	残 存	材質	色	直径 (cm)	法 量 高さ (cm)	重さ (g)		備	考	図版
76	小玉	完存	ガラス	褐緑色	0.46	0.40	0.120	SP33			18

表 43 掘立 3 出土遺物観察表 土製品

1	0 ли-	<u> 2</u> О _Ш .	11/22 1/2	E/L/N 2/						
番号	器種	法量	(cm)	形態·施文	期 外面	整内面	色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
77	甕	口径残高	(18.6) 2.6	内湾口縁。口縁端部は内傾する丸味の ある面をもつ。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ◎	SP74	
78	坏身	口径 残高	(11.2) 3.0	たちあがり端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密◎	SP65	
79	坏身	残高	2.3	たちあがり端部は欠損。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色灰色	密〇	SP65	
80	甕	残高	2.7	軟質土器。1.0~1.5mm大の正格子目叩き。	正格子目叩き	ナデ	黄褐色 黄褐色	密◎	SP79	19
81	壺	口径残高	(13.2) 2.6	広口壺。凹線文3条あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1~2)金◎	SP69	

遺物観察表

表 44 柱穴出土遺物観察表 土製品

衣 4	1 1工/	тил.	退彻 飭	· 一	-Sho	i abr	/ LI -7*\	17. 1		т —
番号	器種	法量	(cm)	形態・施文	外面	整内面	色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
82	甕	口径残高	(19.8) 7.3	外反口縁。口縁端部は丸い。	回ヨコナデハケ(3~4本/cm)→ナデ	□ハケ→ヨコナデ ケズリ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~3)金	SP113	19
83	甕	口径残高	(16.2) 3.9	内湾口縁。口縁端部は内傾し、丸味のある面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色		SP114	
84	甕	口径残高	(15.2) 3.7	内湾口縁。口縁端部は内傾する丸味の ある面をもつ。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~3)	SP161	19
85	高坏	口径残高	(15.0) 3.8	口縁部はわずかに外反。	マメツ(ナデ)	マメツ(ナデ)	橙色 橙色	長(1)	SP50	
86	高坏	残高	2.5	坏脚部の接合は充填技法による。	マメツ(ナデ)	マメツ	橙色 橙色	石·長(1~2) 赤粒 ○	SP5	
87	坏	口径器高	(12.3) 2.7	外反口縁。底部切り離しは回転ヘラ切り 技法による。	ヨコナデ ⑥回転ヘラケズリ	ヨコナデナデ	乳褐色 乳褐色	密・金・赤粒◎	SP168	
88	器種 不明品	長さ 幅 厚さ	7.5 3.8 1.6	把手部。断面丸味のある長方形状。	ナデ	_	黄橙色	石·長(1~2)金 赤粒 ◎	SP54 煤付着	19
89	坏蓋	口径残高	(12.2) 4.4	断面三角形状の鋭い稜。口縁端部は 内傾。		回転ナデ	青灰色 青灰色	密◎	SP121	19
90	坏身	口径残高	(10.0) 2.8	たちあがり端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密〇	SP5	
91	高坏	底径 残高	(7.6) 4.5	3方向の長方形状透かしあり。	回転ナデ	(9) (9) (9) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1	灰色 灰色	密◎	SP178	
92	高坏	底径 残高	(11.8) 3.7	脚裾部は上下方に拡張。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密◎	SP114	
93	高坏	残高	4.5	1/3の残存。	囫回転ヘラケズリ 脚回転ナデ	(死®ナデ 脚回転ナデ	灰白色 灰白色	密◎	SP167	
94	壺	口径残高	(18.6) 3.4	外反口縁。口縁端面に凹線状の凹み が巡る。	回回転ナデカキメ	回転ナデ	灰色 灰色	密◎	SP84	19
95	壺	口径残高	(18.5) 2.1	広口壺。口縁部は珠玉状、口縁端面に 沈線あり。	回回転ナデ カキメ	回転ナデ	灰色 灰白色	密〇	SP131	19
96	壺	残高	7.0	短頸壺。扁球形の胴部。	原回転ナデ ・	回転ナデ	灰白色 灰白色	密◎	SP135	
97	器台	残高	3.2	波状文6条以上+凸線1条。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密◎	SP5	
98	甕	口径残高	(15.4) 2.8	口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に 凹線文2条あり。	ヨコナデ	ヨコナデ ヨコハケ?	橙色 橙色	石・長(1) ◎	SP20 煤付着	19
99	甕	底径 残高	(6.1) 4.1	突出部をもつ上げ底。	ハケ(4~5本/cm) ナデ・ヨコナデ	ナデ	淡灰茶色 灰茶色	石・長(1~4) ◎	SP13 黒斑	
100	壺	底径残高	(6.6) 6.2	厚みのある平底。	ハケ(5本/cm) ナデ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1~2)金赤粒	SP131 黒斑	
101	支脚	残高	10.8	角状突起2ヶ+羽根状突起1ヶ。	ナデ タタキ	ナデ シボリ痕	橙褐色 橙褐色	石・長(1~3)金	SP55 黒斑	19

長 4				観察表 土製品	調	整	(外面)	胎土		(1)
番号	器種	法量	(cm)	形態・施文	外面	内面	色調(内面)	焼成	備考	図版
102	壺	口径 残高	(28.0) 5.5	長頸壺。内面凸帯。	ハケ(3~4本/cm) ハケ(7~8本/cm)	マメツ(ハケ)	橙色 にぶい橙色	石・長(1~2)		
103	壺	残高	4.0	貼付凸帯。凸帯上に刻目あり。	ハケ (12~13本/cm)	ナデ ハケ (6~7本/cm)	橙色 灰白色	石·長(1~3) ◎		19
104	壺	残高	18.1	肩部片。	ハケ→ミガキ	・同ハケ→ナデハケ(12~14本/cm)	茶褐色 黒色	石・長(1~4) ◎	黒斑	
105	壺	底径残高	(8.6) 22.2	平底。	ハケ→ミガキ	ハケ (12~14本/cm)	にぶい橙色 黒色	石・長(1~5) ◎	黒斑	
106	器台	残高	4.0	波状文4~5条+沈線文5条+波状文 4~5条+沈線文3条。円孔(径1.6cm)1 ケ。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	灰白色 にぶい橙色	石・長(1) ◎		19
107	匙形 土製品	長さ 幅 厚さ	9.7 7.7 1.1	完形品。内外面に指頭痕が顕著。	ナデ	ナデ	淡黄茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2)金	黒斑	19
108	坏	口径 底径 器高	(13.4) (6.2) 3.5	底部切り離しは回転ヘラ切り技法によ る。	ヨコナデ <u></u> ⑥回転ヘラケズリ	ヨコナデ	橙黄色 橙褐黄色	長(1~2) 〇		20
109	坏	底径残高	(7.2) 1.5	底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。1/5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 灰白色	密〇		
110	甕	口径残高	(20.3) 3.4	外反口縁。口縁端部は先細り。	ハケ →ヨコナデ	ハケ (7~8本/cm)	にぶい橙色 にぶい橙色	長(1)赤粒		
111	壺	口径残高	(13.4) 4.2	口縁部は肥厚し、外面がやや凹む。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	淡黄橙色 淡黄橙色	密·赤粒		20
112	壺	口径残高	(17.6) 5.2	二重口縁壺。口縁端部は内傾する面をもつ。	マメツ(ヨコナデ)	マメツ	黄茶色 黄茶色	石・長 (1~2) ◎		20
113	甑	口径残高	(29.0) 5.6	口縁端部はナデにより凹む。小片。	ハケ→ヨコナデ ハケ(12本/cm)	ヨコナデナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1~2) ◎		
114	觝	長さ 幅 厚さ	5.7 3.7 0.5	中央は円孔(径3.4cm)、周囲に楕円形 孔あり。	マメツ(ナデ)	ナデ 工具ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1)金		
115	坏蓋	口径残高	(14.1) 4.2	断面三角形状の丸味のある稜。口縁端部は尖り気味に丸い。		回転ナデ	灰色 オリーブ灰色	密〇		
116	坏蓋	口径残高	(8.6) 2.3	かえりは長く、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密◎	自然釉	20
117	坏蓋	口径残高	(9.4) 1.9	かえりは短く、端部は尖る。		回転ナデ	灰白色 灰白色	密◎	自然釉	20
118	坏身	口径残高	(10.3) 3.7	たちあがり端部は内傾。	回転ナデ	回転ナデ	灰色灰色	密◎		
119	坏身	口径器高	(12.0) 5.1	たちあがり端部は丸い。 2/3の残存。	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ ®ナデ	褐灰色 オリーブ灰色	密◎		20
120	坏身	残高	1.7	小片。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	灰色 明オリーブ灰色	密◎		
121	坏	底径残高	(6.4) 1.9	平底。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。	回転ナデ	回転ナデ ⑥ナデ	青灰色 青灰色	密◎		20
122	坏	底径 残高	(8.1) 1.3	直立気味の高台。	回転ナデ ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密◎		

包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量	(cm)	形態・施文	調	整	色調(外面)	胎土	備考	図版
田力	1071里	仏里	(CIII)	//> /// // // // // // // // // // // //	外面	内面	(内面)	焼成	川サ	
123	壺	口径 残高	(10.2) 4.1	口縁端部は珠玉状。	回回転ナデ 平行叩き	回回転ナデ 円弧叩き	灰白色 灰白色	密		20
124	樹	残高	3.7	長頸壺。肩部の張りは強い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密◎	自然釉	
125	椀	残高	5.4	沈線2条+沈線3条。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密◎	自然釉	20
126	器台	底径 残高	(22.0) 2.1	脚裾部は「コ」字状。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密◎		20

表 46 包含層出土遺物観察表 金属製品

番号	器 種	残存	材質		法	量		備	老	図版
田ク	66 1里	75、 行	471 貝	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	T/HI	45	IZINX
127	鉄滓	_	鉄	5.1	3.7	2.3	49.5			20

表 47 地点不明出土遺物観察表 土製品

衣 4	衣4/ 地只不明出工夏彻観祭衣 工聚品									
番号	器種	法量 (cm)		形態・施文	調整		色調 (外面)	胎土	備考	図版
<u> </u>					外面	内面	「内面」	焼成		\vdash
128	甕	口径 残高	(14.2) 2.1	小片。	ナデ	ハケ ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1)		
129	甕	残高	4.0	小片。	タタキ→ハケ	ナデ (ハケ)	淡黄色 淡黄色	石・長(1~2) ◎		
130	鉢	底径残高	(3.4) 1.5	突出する平底。	ハケ (10~12本/cm) ヨコナデ	ミガキ	浅黄橙色 淡黄色	石・長(1)		
131	高坏	底径 残高	(13.0) 3.1	脚部片。	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ◎		
132	製塩土器	口径残高	(5.0) 3.4	小片。	タタキ→ナデ (マメツ)	ヨコナデナデ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~2) ◎		
133	甕	口径残高	(14.0) 3.6	直立口縁。	ハケ→ヨコナデ	マメツ (ナデ)	橙色 橙色	石・長(1~2)金		
134	甕	残高	5.4	胴部片。	ハケ (8~9本/cm)	ナデ	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長(1~2) ◎		
135	坏蓋	口径残高	(13.8) 2.3	口縁端部は内傾。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密◎		
136	坏蓋	口径残高	(13.2) 2.6	口縁端部は丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密〇		

表 48 地点不明出土遺物観察表 玉類

番号	器 種	残存	材質	色		法 量 高さ (cm)	重さ (g)	備	考	図版
13	7 小玉	完存	ガラス	黒色	0.45	0.25	0.054			20

第5章 調査の成果と課題

本書に掲載した二遺跡の調査では、弥生時代から近世までの遺構や遺物を確認することができた。ここでは、時代別の集落変遷を行うと共に、出土品について概観する。

1. 集落変遷

(1) 弥生時代

当該期の遺構は、弥生時代終末期に時期比定される2棟の竪穴住居である。樽味立添遺跡4次調査では平面形態が円形を呈する竪穴住居SB1を検出し、樽味高木遺跡15次調査では隅丸方形を呈する竪穴住居SB3を検出した。このうち、SB3の規模は一辺6.7mを測り、建て替えが施された住居である。SB3は高床部を付設しており、住居内には2基の炉を検出した。

遺物では遺構や包含層中より弥生時代前期から終末期の土器が出土しており、樟味高木遺跡 15 次調査では包含層資料であるが、匙形土製品(柄部を欠損)が出土している。

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構は、中期後半から終末期に時期比定されるものである。中期では樟味高木遺跡 15 次調査にて竪穴住居 S B 1 と S B 5 のほか、掘立柱建物(掘立 1)を検出した。このうち S B 1 は一辺 3.5 m前後を測る方形住居で、出土遺物や埋土の堆積状況から人為的に埋め戻された住居と推測される。樟味地区で検出される古墳時代の住居には、故意に埋め戻された住居の検出事例は数多く報告されており、その中には臼玉を伴った祭祀儀礼が執り行われたと思われる事例も数多く含まれている。

後期では
博味立添遺跡 4 次調査において竪穴住居 1 棟と掘立柱建物 2 棟のほか、溝 1 条や土坑 7 基が検出されており、
博味高木遺跡 15 次調査からは竪穴住居 3 棟と掘立柱建物 2 棟が検出されている。

6世紀代では樟味立添遺跡 4 次調査にて竪穴住居 1 棟(SB2)と掘立柱建物 2 棟(掘立 1・2)が検出され、樟味高木遺跡 15 次調査からは竪穴住居 3 棟(SB2・4・6)と掘立柱建物 1 棟(掘立 2)が検出されている。このうち、 樟味高木遺跡 15 次調査検出の SB2は一辺 5.5 mを測る隅丸方形住居で、住居内を区画するための仕切り溝を検出した。なお、検出した竪穴住居の廃絶時期は、6世紀後半〔樟味立添遺跡 4 次調査:SB2、 樟味高木遺跡 15 次調査:SB2〕と6世紀後半以前〔樟味高木遺跡 15 次調査:SB4・6〕である。また、掘立柱建物の構築時期は6世紀前半〔樟味立添遺跡 4 次調査:掘立 1・2〕と6世紀中葉以降〔樟味高木遺跡 15 次調査:掘立 2〕に分かれている。

7世紀代の遺構は、掘立柱建物と溝が検出されている。 樽味高木遺跡 15 次調査検出の掘立 3 は 1 間 × 5 間以上の比較的大型の建物で、柱穴出土品より構築時期は 7世紀前半以降と推測される。 樽味立添遺跡 4 次調査では 7世紀前半の溝 S D 1 のほか、 7世紀初頭から前半に時期比定される 5 基の土坑を検出している。

古墳時代中期から後期の遺構は両遺跡で検出され、とりわけ樽味高木遺跡 15 次調査では竪穴住居 や掘立柱建物が重複して存在していることから、当該期には調査地や近隣地域において集落経営がさかんに行われていたものと推測される。

(3) 古代

古代の遺構は、樟味立添遺跡 4 次調査にて自然流路を検出した。 SR1 は北東 - 南西方向に流れる

推定幅 10 m以上を測る流路で、流路内には土砂や小礫、砂質シルトが堆積している。遺物は弥生時代後期の土器や古墳時代の土師器、須恵器、奈良時代から平安時代の土師器や須恵器、緑釉陶器、瓦のほか石器や鉄滓などが混在して出土した。検出層位や出土遺物より、SR1の最終埋没時期は平安時代中期、10世紀代と考えられる。なお、調査地南方にある樽味四反地遺跡1次調査では同時期の流路が検出され、流路内からは土師器や須恵器のほかに緑釉陶器や灰釉陶器が出土している。また、時期はやや異なるが、樽味四反地遺跡1次調査地の西方にある樽味四反地遺跡5次調査からは弥生時代から中世までの遺物が混在して出土した自然流路SR1が報告されている。なお、流路内からは円面硯をはじめ畿内産土師器や奈良三彩の壺のほか緑釉陶器などが出土している。

(4) 中世~近世

中世から近世の遺構は未検出であるが、包含層や地点不明遺物の中に室町時代から江戸時代までの 土師器や陶磁器の破片が少量ではあるが含まれている。これらの遺物は周辺地域に該期の遺構が存在 することを示唆する資料といえよう。

2. 出土品について

二遺跡の調査からは、検出事例の少ない遺物や特異な遺物が出土した。まず、弥生時代では樟味高木遺跡 15 次調査において匙形土製品が出土している。柄部は欠損しているが体部の完形品である。古墳時代では樟味立添遺跡 4 次調査において、包含層中より韓式系土器の甑が出土したほか、樟味高木遺跡 15 次調査からは、古墳時代の掘立柱建物内より軟質土器片が 1 点出土している。古代では樟味立添遺跡 4 次調査の自然流路内より、平安時代の緑釉陶器片や奈良時代の赤色塗彩土器が出土したほか、包含層中からは破損品であるが、平面形態が方形を呈する粘板岩製の石帯が 1 点出土した。石帯の出土は、樟味地区では初例となる。

博味地区では、弥生時代末から古墳時代初頭の大型建物をはじめ、弥生時代から古墳時代にかけての集落関連遺構や遺物が数多く発見されており、該期の集落様相や変遷が解明されつつある。近年では、軟質土器や陶質土器の出土例が数多く報告されており、古墳時代における渡来系集団の存在が示唆されている。今回報告する樽味立添遺跡 4 次調査からも韓式系土器や軟質土器の出土が認められることから、今後さらなる調査・研究を進め、弥生時代から古墳時代における集落構造や変遷の解明が急務となろう。一方、樽味地区における古代の集落様相は不明な点が多く、現在までのところ解明されていない。とりわけ、樽味四反地遺跡 1 次調査や今回報告する樽味立添遺跡 4 調査の調査成果から判断すると、古代には数条の自然流路が存在したことや、流路出土品からは官衙や寺院に関連する施設が存在した可能性が高いと思われる。これまで、樽味地区内では該当する施設は検出されていないが、今後、樽味地区の集落様相や変遷を考えるうえで注意を要する時期でもあり、古代集落の解明は 樽味地区の集落変遷や古地形復元における重要課題のひとつとなろう。

【参考文献】

梅木 謙一 1992 「樟味四反地遺跡」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書第26集

高尾 和長 2002 『樟味四反地遺跡 5 次調査』松山市文化財調査報告書第87 集

写 真 図 版

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5 判や 6×7 判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35 mm判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材:

カ メ ラ トヨフィールド 45A レ ン ズ スーパーアンギュロン 90 mm他 アサヒペンタックス 67 ペンタックス 67 55 mm他 ニコンニュー FM 2 ズームニッコール $28 \sim 85 \text{ mm}$ 他 フィルム 白 黒 ネオパン $SS \cdot アクロス$

フ ィ ル ム 白 黒 ネオパン SS・アクロス カラー アスティア 100 F

2. 遺物は、4×5 判で撮影した。すべて白黒ネガフィルムを使用している。 使用機材:

カ メ ラ トヨビュー 45G

レ ン ズ ジンマーS 240 mm F 5.6 他

ストロボ コメット/CA32・CB2400

スタンド等 トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101

フィルム ネオパンアクロス

3. 単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

引 伸 機 ラッキー 45MD・90MS

レ ン ズ エル・ニッコール 135 mm F5.6A・50 mm F2.8N

印 画 紙 イルフォードマルチグレードWRCペーパー

4. 製 版:写真図版 175 線

使用機材:

印 刷:オフセット印刷

用 紙:マットコート 76.5kg

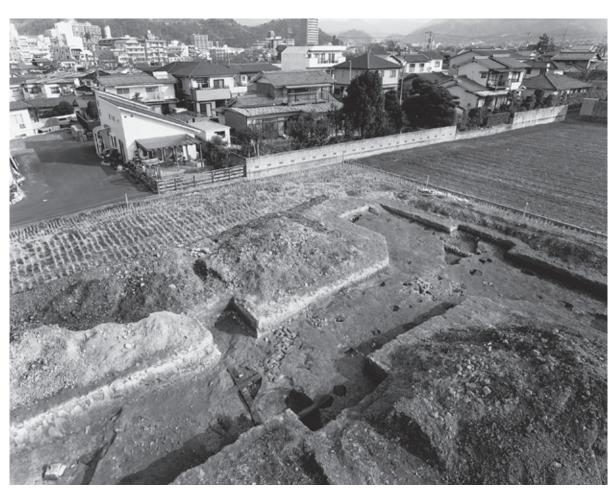
製 本:アジロ綴じ

【参考】『埋文写真研究』vol.1 ~ 20 『報告書制作ガイド』

[大西朋子]



1. 調査前全景(北西より)



2. 調査区完掘状況(南西より)



1. 西半部遺構検出状況(南東より)



2. 東半部遺構検出状況(南西より)



1. 西半部遺構完掘状況(南より)



2. 東半部遺構完掘状況(南西より)



1. SB1・2 完掘状況(東より)



2. 掘立1完掘状況(南西より)



1. SD1 完掘状況(北東より)



2. SK1遺物出土状況(南より)



1. SK3遺物出土状況(北東より)

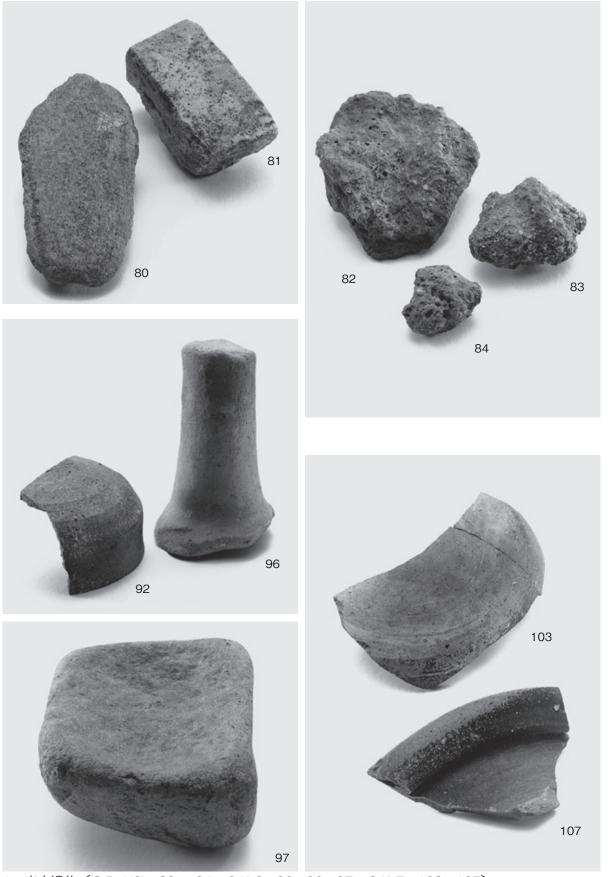


2. SK7完掘状況(東より)

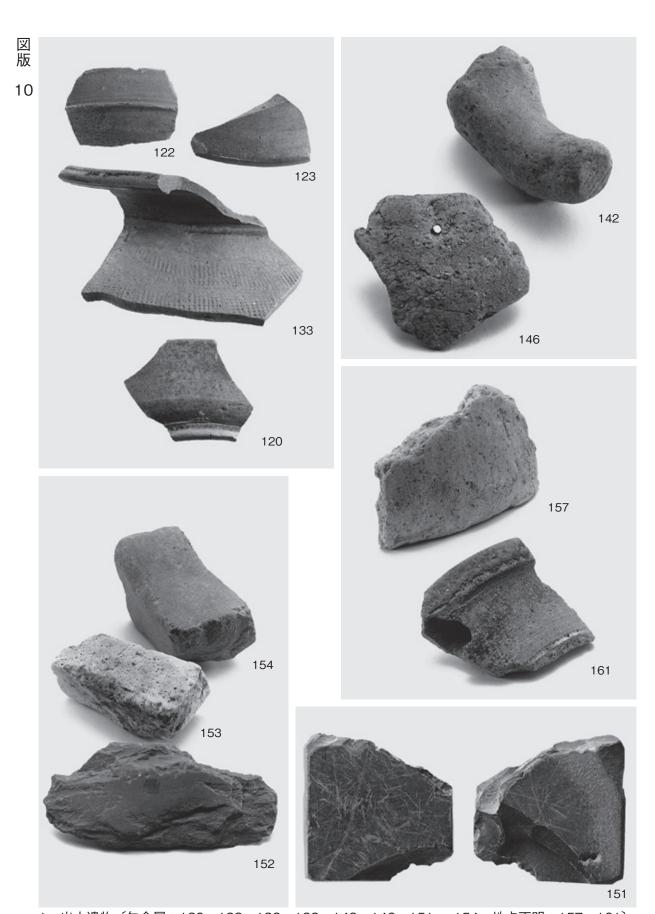
1. 出土遺物〔SB1:2·5、SB2:10、SD1:21·23·25·27~29·31·43〕



1. SR1出土遺物(1)



1. 出土遺物〔SR1(2):80~84、SK3:92·96·97、SK7:103·107〕



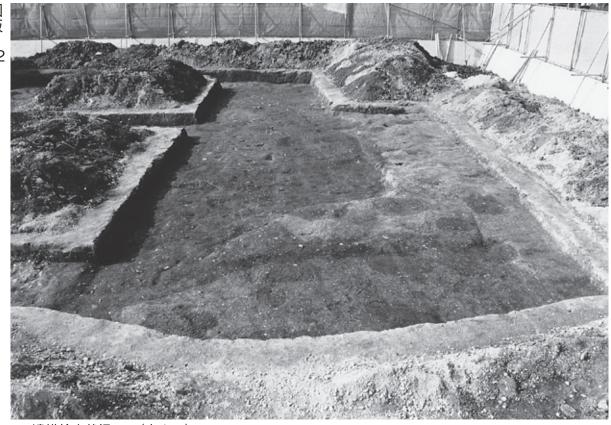
1. 出土遺物〔包含層: 120・122・123・133・142・146・151 ~ 154、地点不明: 157・161〕



1. 調査前全景(南西より)



2. 作業風景(東より)



1. 遺構検出状況(1)(東より)



2. 遺構検出状況 (2) (西より)



1. 遺構完掘状況(東より)



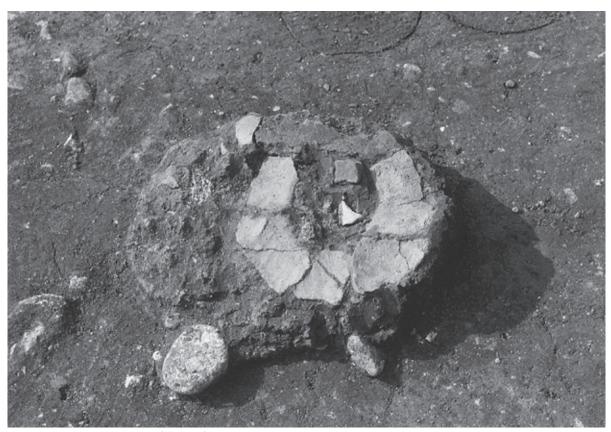
2. SB1 完掘状況(北東より)



1. SB2検出状況(北より)



2. SB2完掘状況(東より)



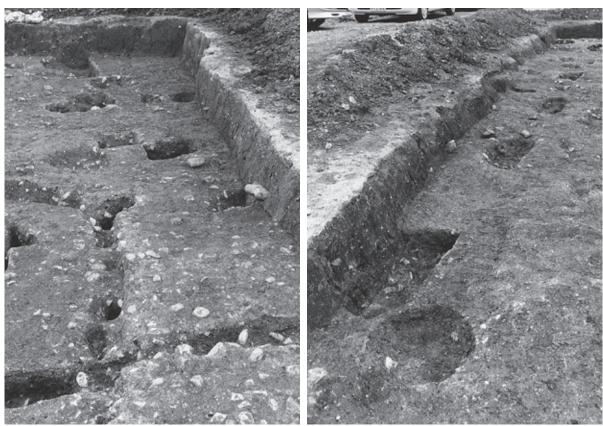
1. SB2遺物出土状況(東より)



2. SB3完掘状況(北東より)



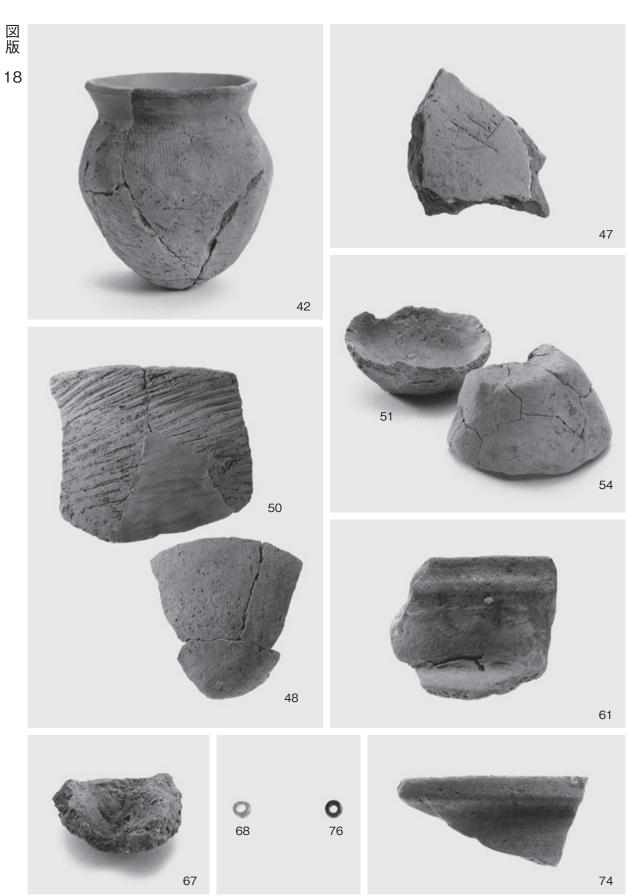
1. SB 5・掘立 1 完掘状況(東より)



2. 掘立2完掘状況(東より)

3. 掘立3完掘状況(東より)

1. 出土遺物〔SB1:4・6・8、SB2:9・11・12・19・20・23・31・32〕



1. 出土遺物〔SB3:42・47・48・50・51・54・61・67・68、掘立2:74・76〕

1. 出土遺物 [堀立 3:80、桂穴:82・84・88・89・94・95・98・101、包含層 (1):103・106・107]



1. 出土遺物〔包含層 (2): 108·111·112·116·117·119·121·123·125 ~ 127、地点不明: 137〕

報告書抄録

ڿ	ŋ		が	な	たるみたちぞえいせき・たるみたかぎいせき												
書																	
副		書		名													
巻				次													
シ	1]	_	ズ	名	松山	公山市文化財調査報告書											
シ	1) –	- ブ	ズ番	号	第 15	第 152 集											
編	著		者	名	水本												
編	集		機	関		松山市教育委員会 財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター											
所		在		地		市教委:〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 Tel 089-948-6605 埋 文:〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6 Tel 089-923-6363											
発	行 年 月 日 西暦 2011年 3月 15日																
ふ所	り 収		が 跡	な名	ふ所	り が 在	な 地	市町村	一ド 遺跡番号	北 緯。, "	東。	更 経 , "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因		
杉原	なたちそ	ままし 系遣) tr = 遺跡 4	上次	たるな 樽味	二丁目:部	18 番	38201		33° 50′ 28″	13	2° 47′ 30″	20070109	約 174.0	個人住宅建設		
たる。	^{みたか た高オ}	大遺	t 跡 1:	5次	たるみ 博味	二丁目 部	90-2	38201		33° 50′ 26″	13	2° 47′ 30″	20070208 20071204	169.5	個人住宅建設		
	所収遺跡名			種別 主な		な時代主		な遺構		主な遺物		特記事項					
樽	樽味立添遺跡 4								号・掘立柱建物		弥生土器、土師器、 須恵器、陶磁器、 瓦、石器		検出事例の少ない古 代の流路の検出				
樽	樽味高木遺跡 15					生時代 竪穴住, 實時代 竪穴住,		•		弥生土器、土師器、 須恵器、軟質土器、 石器、ガラス玉							
	博味立添遺跡 4 次調査では平安時代の自然流路を検出し、流路内からは緑釉陶器や瓦が出土したことから、博味地区において古代の官衙や寺院に関連する施設の存在が何要 約 れる。 韓味高木遺跡 15 次調査では、主に古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物を検出した遺構には重複関係が数多く見られることから、 韓味地区において古墳時代の落経営がさかんに行われていたことを追従する結果となった。)存在が伺わ を検出した。							

松山市文化財調査報告書 第152集

樽味立添遺跡 4 次調查 樽味高木遺跡 15 次調查

平成 23 年 3 月 31 日 発行

編集松山市教育委員会

〒 790-0003 松山市三番町 6 丁目 6 - 1 TEL (089) 948-6605

発 行

財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

〒 791-8032 松山市南斎院町乙 67 番地 6 TEL (089) 923-6363

印刷岡田印刷株式会社

〒 790-0012 松山市湊町 7 丁目 1 - 8 TEL (089) 941-9111

